918. 6-Ta31ㄅ
1200500759419
.6
T1

918.6
Ta 31
(8)

本宣

高山茶

國立國會圖書館
昭 23.1.1 和
納

本部所蔵

見返し

少林古籍

國立圖書館
昭和 23.11.1
購入

定本虚子全集の第八巻から第十二巻までを創作集とする。
第八巻を創作集第一篇とし、明治、大正年間に執筆した中小篇
（寫生文）を輯録する。

昭和二十三年八月

虚子

目次

風流懺法……一
斑鳩物語……三五
大内旅宿……五六
女易者……八一
百八の鐘……九〇
牛肉屋……九八
北清島町……一〇二

汽車待つ間……一一
天文臺……一一七
幻住庵の跡……二一四
籠茶屋……一三一
玄女節……一三五
八文字……一四一
雜魚網……一四四
病兒……一五一
田舍今川……一七一
興福寺の寫眞……一七七

古川の奥さん……一八五
洪水……一九七
彦太……一九九
舞鶴心中の事實……二〇六
澤子の嘘……二一四
母……二二一
造化忙……二二九
死に絶えた家……二五三
お今……二八〇
十五代將軍……二九一

湖の宿……三〇五
カナリヤ……三一八
兄……三三四
山の家……三七一
貞さん……三八三
甲州の男……四一〇
女……四二一
濃霧……四二七
山家……四三六
嫂……四四六

定本

虚子全集

第八卷

創作集

(一)

風流懺法

横川

今朝阪東君が出立するのを送られて和尚サンもあまり行けぬ口に一杯過ごされた。阪東君が出立したあとで和尚サンは暫く火燵櫓に顎を乗せて居られたが、其内、「一寸一睡りしますわ」ところりと横になられた。

叡山の横川中堂の政所に余はもう四五日滞在して居る。偶〻京都に來た阪東君は昨日余を尋ねて登山して昨夜は和尚サンと三人枕を並べて寢たが、今朝東塔西塔を一見して無動寺から白川口に下つて京に歸る筈で出立した。余も明日は下山して阪東君と一兩日京都で同遊することに約束したのである。

横川は叡山の三塔のうちでも一番奥まつてゐるので淋しい事も亦格別だ。二三町離れた處にある大師堂の方には日によると參詣人もぽつ〳〵あるが、中堂の方は年中一人の參拜者もないといつてよい。大きな建物が杉を壓して立つて居る。四方の扉は皆締切つてあるので中は眞暗だ。只

正面に一尺角許りの穴が開いて居るので其處から中を覗くと、其眞暗な中に常燈明が淋しくともつて居る。政所は其中堂を十間許り離れた處に別棟になつて建つて居る。其處に和尙サンが下男も置かずに一人で自炊して居られる。余も自炊の手傳ひをしながら四五日滯在して居るのである。

和尙サンは布團から丸い頭だけ出して海老のやうになつて寢て居られる。もうぐう〳〵と眠られた樣子だ。此和尙サンのお勤めは毎日一時間半づゝ中堂で看經をせられることだ。其外に何も用事は無い。其看經も時は一定してゐない。朝でもよい晝でもよい晩でもよい。要するに一時間半さへ勤められゝばよいのだ。だから眠い時は朝からでも眠られる。淋しい境涯だが又氣樂な境涯だ。

余は和尙サンの部屋を出て玄關の並びの自分の部屋に戻る。机に凭れてぢつと耳をすます。靜かだ。今は嵐の音も聞えぬ、鳥の聲もせぬ。何だか靜かさが極點まで達してもの凄いやうな氣もする。程なくポツリ〳〵雨垂れらしい音が聞える。障子を開けて見るといつの間にか雨が降つて居る。軒の小坊主が光つては落ち光つては落ちて居る。寒い。障子をたてる。

其から二時間程余は用事をしてゐて何事も忘れてゐた。ふと氣がつくと和尙サンはまだ寢て居られる。雨はまだ靜かに降つて居る。臺所に物音が聞えるやうだ。不思議に思つて行つて見ると、暗い臺所に白い衣を着た小僧サンが一人居る。流しの前に立つて何物か洗つて居る樣だ。よく見

ると今朝よごれた儘の茶碗や皿を置いて置いたのを洗つて呉れてゐる樣だ。小僧サンは余の方を向いてニッコリ笑つたが辭儀もしない。

「君は何處の小僧サン」

と余が聞くと、

「大師堂」

と大きな聲で答へて、

「どうして昨日湯に入りに來なかつたの」

と友達のやうな口をきく。

「風邪をひいてゐたからサ」

「折角僕がわかしてやつたのにナア」

「君がわかしてくれたのか、其はすまなかつた。此次は這入るヨ」

「僕はあすうちへ歸るのだヨ」

「君のうちはどこ」

「僕のうちは東京、だけれど京都に伯母サンがゐるの、あすは伯母サンのうちへ行くの」

「伯母サンのうちは京都のどこ」

「祇園町」
祇園町とは一寸意外であつた。
「祇園町といふのは何處」
と試に聞いて見る。
「祇園町を知らないのか。馬鹿だナア」
と小僧サンは甚だ輕蔑した調子で、
「君はいつまで此處に居るの」
「僕か、僕も明日京都へ行く積りなの。いゝョこゝに拭巾があるから拭くのは僕が拭くョ」
「まア貸したまへ僕が拭いてやらア。明日京都へ行くのか。此次は這入るナンテ、今度いつ湯がわくと思つてゐるのだ。間抜けだなア、五日目〳〵で無けりやわかないのだョ」
機鋒鋭くして當るべからずだ。
「さうか、其ぢや大師堂のお湯にはもう這入れないね。困つたナア」
「困らなくつたつていゝや。アンナ汚ない湯に這入らなくつたつて京都にいくらでもいゝ湯があらア。君、湯は東京より京都の方がいゝョ。京極にいゝ湯があるぜ、蒸氣でわかすのだョ」
「君はいつ小僧サンになつたんだい」

「二月」
「二月つて今年の二月かい」
「ウン」
「東京にはいつまで居たの」
「去年まで。尋常を卒業するとコチラへ來たの。君、櫻田小學校知つてるかい。僕あそこに行つてたんだョ。山崎や戒田は今年高等二年になるんだつて威張つてらア。このあひだ手紙をよこしたョ。字ナンカ矢つ張り下手だア。ネー君、いくら威張つたつて、字の下手なのは見つとも無いや」
小僧サンは茶碗や皿を戸棚に片附けて臺所を掃除して、ヅン〳〵余の部屋に這入つて來る。
「君勉強してゐるのかい。君全體何しに來たの。遊びに來たのかい。……馬鹿だナア。コンナもの書いてらア。全體何の畫だい。下手だナア。僕の方がよつぽどうまいや」
と火鉢の向うに坐つて机の上に置いて置いたノートブックを開けて痛罵を試みはじめる。
暗い臺所から明るい部屋に來て見ると小僧サンはなかなか美少年だ。年は十二三で、色白で、目が大きくつて、口元が締まつて居る。
「よう君、何を書いたんだい。密壇の畫だつて。こんな密壇があるものか。馬鹿だナア。禮盤が

こんなに小さくて、脇机がこんなに大きくつてどうするんだい」

元來畫心の無い余が文字代りに急いで書き取つた圖を散々に攻擊する。

「『朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心』……ヤーイ十句觀音經なぞ書いてらア、間抜けだナア。……『どんな處に落ちたら死にますエ』……『强儀な事したもんだつせ』……こんな事君書いてるのかい。こんな事書いてどうするんだい。本當に馬鹿だナア」

と余の顏を見る。大きな目に冷笑の光を漲らせて居る。

「全體君は何だい。何を仕事にしてゐるんだい。妙な事を書き留めとくんだナア」

と獨り言のやうにいひながら、紙の間に挿んであつた鉛筆を取つて余の顏を寫生し始める。一寸空目を使つては書き、一寸空目を使つては書く。

「駄目だナア、君は動くから駄目だ。こゝの和尙サンを書いて見ようか。こゝの和尙サンは大きな頭をしてゐるだらう。こんな頭だぜ。それからねえ、耳がこんなに……まるで蝙蝠のやうだぜ。僕は和尙サンと向き合つてるといつでも頭と耳許り見てやるのだ。君、々」

とだん〳〵聲を張り上げて來て、

「それからねえ君、和尙サンの耳は動くぜ。不思議だぜ。どうかしたはずみにぴこ〳〵と猫のやうに動くんだもの、僕ア不思議だと思つちやつた」

和尙サンは「ウーン」と布團の上に白い片肱を突き出して片々の手で擦つて居られる。

「ヨセ〳〵、ソンナ人の惡口をいふものぢやない。君は腕白だナア」

と余は最中を三つやる。

「有難う」

と早速一つ頰ばる。余の飲みさして置いた茶碗の上に冷たい茶を注ぎ足して飲む。

和尙サンは、

「ア、よく寢たこつちや」

と欠びをしながら起き上られる。

「一念、來てゐたか。お客樣の邪魔をしてはいかぬぞ」

「邪魔なんかするものですか」

と手帳の上に和尙サンの欠びの圖を書いて顏中口にする。さうして其口から棒をひいて「一念キテイタカ、オ客サマノジヤマシテハイカヌゾ」と書いて、又耳から棒を引いて「コノ耳ウゴク」と書く。余は覺えず噴き出す。一念は知らぬ顏をして、

「寶珠院サンは今日午から下山る積りだから、さういつて呉れといひましたヨ」

と一寸和尙サンの方を見てすぐ今度は眼鏡を掛けた和尙サンの似顏を描く。見ると成程鼈甲緣の

大きな眼鏡を掛けて和尙サンは何か書つけを見て居られる。
「けふは十二日だな」
と迂遠なことをいはれる。
「十四日ですよ」
と余は答へる。
「十四日か。もうさうなるかな。あなたが來たのがをとと日であつたかな」
余はもう五日間滯在して居る、其を一月程にも覺えるのに和尙サンは呑氣なことをいはれる。
「あなた蕗の薹お好きか。納豆はどうかな」
「納豆は閉口ですが、蕗の薹は結構です」
「それではあすお歸りまでに蕗の薹の田樂を一つ拵へて上げう。けふは雨だから困るが、兜率谷の方へ行くと蕗の薹が澤山ある。あすの朝天氣になつたら一念一つ取つて來てんか」
一念は聞かぬ風をして「明治二十八年十月二日生一念」
と鉛筆を壓へ附けて四角な字をノートに書いて居る。
「蕗の薹の田樂といひますのは」
「蕗の薹を串にさして味噌を附けて燒くのぢや。よほど香りのえゝものぢや。蕗の薹が嫌ひで無

けりやキッと賞翫おしるぢやあろ」
「そりや結構でせう。兜率谷といふと惠心廟のさきの方ですね。其ぢや私が取つて來ませう」
余はこゝに來てから全く精進料理許りを食つて居る。それも煑豆に燒湯葉に味噌が主で、豆腐汁やほうれん草のしたし物などは坂本からの好便に豆腐やほうれん草が屆かなけりや食ふ事が出來ん。左樣な中に蕗の薹の田樂は聞いただけでも珍味だ。もう其香りが室内に滿ちてゐるやうな氣がする。
一念は余の机の上を搔き探してゐたが、
「これ、君何だい」
と安全剃刀に目を留める。
「剃刀だよ」
「剃刀だつて。馬鹿だナア。こんな剃刀で君は髯を剃るの。うまく剃れるかい」
と頻りにひねくつて見て居る。
「一念、御邪魔をせんやうにして、少し臺所の事でも手傳つてくれよ」
「一念君は最前もう大變働いてくれました。茶碗や皿をすつかり洗つてくれました」
「さうであつたか。其は御苦勞であつた。序に氣の毒だが、茶釜に一杯お湯をわかして吳れまい

か」

一念はだまつてまだ剃刀をいぢつてゐる。

「どうやつて研ぐんだい」

「斯うやるのサ」

と余はやつて見せる。

「馬鹿だナア」

と再び受取つて、

「君いつ剃つたの。今剃つて見たまへな。よう、剃らないのかい。馬鹿だナア」

と感心する時も不平な時も「馬鹿だナア」といふ。

「一念、お湯をわかして呉れまいか」

と和尚サンはゆつくりと又くりかへされる。

「君、和尚サンが何かいつて居られるぢやないか」

「剃つて見ないのかい。間抜けだナア」

と一念はいかにも残り惜しさうに剃刀を見返りながら臺所に立つて行つた。程なく茶釜の下を燃し始めたらしい、松葉のぱち〳〵といふ音が聞える。

「中々才はじけた小僧サンですね」

「どうも徒らで困りものだ。其代りお経もよく覚える、役にも立つ、育てやうによつたら立派なものになりますやろ。……大變降るやうだな。阪東サンはお困りぢやあろ。もう十一時か」

と和尚サンは火燵から出て背延びをせられる。大きな頭が目についてをかしい。一念は何をしてゐるのか只松葉のはねる音が聞える許りだ。

和尚サンは火燵櫓をのけられる。其趾がすぐ爐になる。其處に鐵瓶をかけて其邊の埃を拾うては爐の中にくべられる。

「お茶を入れう。仕事の切れ目ならお出でんか」

「頂戴しませう」

と爐の向う側に坐る。

「わしは冬でも籐枕をするので……けふはどういふ具合であつたか頭がしびれたやうだ」

と下にしてゐられた右側を掌で擦られる。見ると枕の角の痕が赤く頬に残つて居る。

「寢がへりもなさらず片側許り下にしてゐらしつたからでせう」

「寢がへりといふものは平常からあまりしませぬて。戒律に頭北面西右脇臥といふ事がやかましくいうてあるが、頭北面西は間取りの都合などで嚴密には行かぬにしても、僧は大概右脇臥とい

ふ事だけは守つてをる。殊に仰臥は非常に嫌ふので、仰向けに寝ると淫心を起すともいふし、淫を謂ぐものは仰臥するともいふし、旁其は必ず避くべきことになつて居る。其理由は兎も角、出家が大の字になつて寝るのはあまり見つとも無いものでな」

と和尚サンはきびしいよの終りの一二滴を余の茶碗と御自分の茶碗とに等分に落とされる。鐵瓶の湯氣が眞直ぐに登つて和尚さんの顔のあたりで消える。

「和尚サンおいくつです」

「わしかな、もう丁度ぢや」

「五十ですか」

「さうぢや。もう來年位からは小僧か男を一人置かぬと、自炊が臆劫ぢや」

「さうでせうとも。一念サンは寶珠院サンの御秘藏ですか」

「寶珠院は持てあまして居るのぢや。わしに預つてくれともいふとるのぢやが、わしの手にもあまりさうぢやて。ハ、、、、」

と最中の壞れてゐるのを掌に載せて丁寧にたべられる。爐の縁にこぼれたのを指尖でおさへて口へ持つて行かれる。

「和尚サン、お湯が沸きましたよ。サヨナラ」

と一念の聲がする。

「さうか、其はお世話であつた。もう午ぢや。茶漬なと食べて行かんか。……アヽ、さうおし。一念〳〵」

と延び上るやうにして大きな聲を出される。成程和尚サンの耳は少し動く。ノートに書いた一念の畫が思ひ出されてをかしい。併し一念はもう裏口から歸つたものと見えて返辭が無い。

一　力

仲居のお艶に、

「其が名高い赤前垂れかね」

と聞くと、お艶は一寸氣取つて蠟燭の心を切つて、

「さうどす。これは一力ばつかりに限つた事はおへんけど、斯うやつて帶に挾む具合が他樓とは違うてますのや」

といふ。阪東君が、

「一寸立つて見せたまへ、長いのかい」

ときくと、お艶はだまつて立つて、帶に挾んであるのをはづして見せる。大幅の緋の縮緬を二枚

合はせた廣いのが、チャンと並べた足を隠して幔幕のやうに疊の上に垂れる。廣い座敷に林のやうに立つて居る蠟燭の光りがこの赤前垂れ一つに集まる。其時向うの銀紙で張つた衝立の蔭から今日四條の雛店で見たやうな舞妓が一人現はれる。同時に衝立の中から、

「三千歳はん上げます」

といふ聲が聞える。舞妓は余等の前に指を突いて、

「姉はん、今晩は」

とお艶に會釋する。厚化粧の頰に靨が出來て、唇が玉蟲のやうに光る。お艶の赤前垂れの赤いのが此時もとの通り帶の間に疊まれて、極彩色の京人形が一つ疊の上に坐つて居る。

「お前いくつ」

「十三どす」

「ほんまに可愛い兒どすやらう。私等毎日見てますけど、見る度に可愛て可愛てかなひませんわ」

とお艶は銀煙管に煙草をつめる。

「其帶は妙な結びやうね」

「これどすか、かうやつて、こゝをかう取つて、こつちやに折つて、かう垂らしますのや」

と赤いハンケチを膝の上でたがねて見せる。白い指が其ハンケチにからまつて美しい。

「何といふの其名は」

「だらり」

「髷の名は」

「京風」

「櫛は」

「これどすか」

と白い手を前髪の後ろにやつて、

「花櫛、これは前髪くゝり。あなた何書いとゐやすの」

と余のノートを覗き込む。

「三千歳はん、今日虚空藏様へお詣りやしたか」

「ハー」

「何というてお拜みだ」

「阿呆どすさかいに智惠おくれやす、ちうて」

銀紙の衝立の蔭から又人形が一つ出る。

「松勇はんあげます」

「姉はん今晩は」
と三千歳に並んで坐つて、
「今日お詣りやしたか」
と三千歳の手を取つて自分の膝の上に置く。
「ハー」
「歸りしなにあとお向きやへなんだか」
「向かしまへなんだ」
と三千歳は膝の上を兩手で壓へる。
「面白さうなお話ね」
と聞くと、
「虚空藏様に詣つて戻り道にあと向くと智惠かへしますてやわ。あの染菊はんな、つい忘れてあと向かはつて、歸らはつてから阿呆にならはつたて、おゝいや」
とお艶がいふ。
「いやらし」
と三千歳と松勇は同じやうに眉をよせて同じやうに背中の帶に手をやる。一つの絲で二つの人形

が一所に動いたのかと思はれる。ちりけ元から垂れた帶は松勇のが殊に長く疊の上に流れて居る。
「其帶は何といふ結びやう」
と又松勇に聞いて見る。
「これどすか、だらり」
「髷は」
「京風」
と同じ事をいふ。
銀紙の衝立の蔭から今度は人形が二つ出る。
「喜千福はんあげます」
「玉喜久はんあげます」
「姉はんおほきに」
「姉はんおほきに」
と二人並んで燭臺の向うに坐る。此方の二人が鏡にうつゝたやうによく似て居る。
「二人の帶は」
と又聞くと、

「これどすか、だらり」
と喜千福が玉喜久を見る。
「髷は」
「京風」
と玉喜久が喜千福を見る。
「同じ事お聞きやす」
と三千歳は笑つて又ノートを覗き込む。
「喜千福はん、あんたの顔見て書いとゐやすわ。妙な顔にお書きやしたえ」
と三千歳がいふ。皆が笑つて喜千福の顔を見る。
「おゝ晴れがまし」
と喜千福は長い袂の中程で顔をかくして、
「姉はん、藝子はんは」
「お花はん貰ひにやつたの、もう來やはるやろ。あんた都踊にお出るのン」
「ハー」
「踊りばつかり」

「踊りと鼓」
「三千歳はんは」
「踊りばつかり」
銀紙の衝立の蔭から今度は五十餘りの藝子が出る。
「お花はんあげます」
「姉はんおほきに」
とお艶に會釋して坐ると、
「姉はん」
「姉はん」
「姉はん」
「姉はん」
と四つの人形が先を爭つて、老妓にお辭儀をする。
子供衆が蠟燭の數を殖やす。お花が三味線を取つて「京の四季」を唄ふ。四人が袂をそろへて舞ふ。四人共皆美しい。なかでも三千歳が一番美しい。其がすむと今度は三千歳が一人殘つて舞ふ。

『牡丹に戯れ獅子の曲』
とお花が少し皺嗄れてゐながらよく通るいゝ聲をふりしぼつて唄ふ。
『目前の奇特新たなり』
と爰で合の手があつて三千歳は扇を逆手に持つてきり〳〵と廻る。
『暫く待たせ玉へやと』
と其から調子が進んで來て、
『獅子とらでんの舞樂のみぎん』
の處でパタ〳〵と勇ましく拍子を踏む。余は便所に立つ。
梯子段を降りる。いつの間にやら醉うたと見えてひよろひよろとする。後ろからお艶が、
「あぶのつせ」
といひ乍らついて來る。
『獅子の座にこそなほりけれ』
といふ聲がかすかに後ろで聞える。下座敷も三所程で賑やかだ。
手水をすませて手を洗つて居ると、
「君來てるのかい」

といふものがある。ふりかへつて見ると一念だ。
「祇園町知らないなんて嘘いつてらア。君今日下山たのかい」
となつかしさうに寄つて來る。
「君の下山た翌日に下山たのサ。……こゝが伯母サンのうちかい」
「さうぢやないんだい」
「僕の座敷に來たまへナ」
「厭だ」
「なぜ、叱られたら僕が詫びてやるから來たまへ」
と手を取つて連れて戻る。
『玉椿の八千代までもと契りしに（合）西國順禮サーサ御詠歌……』
と松勇が踊るのをお花は地を彈いて居る。余が一念を連れて來たのを見てお花は唄ひながらニヤリと笑ふ。喜千福も玉喜久もニコリとする。お艶もホヽヽヽと笑ふ。よく見ると余の顏を見て笑ふのではなく、三千歳と一念の顏を見くらべて笑ふのだ。
「一念はんおいなはつたン。旦那はん知つとゐるの」
と三千歳は一念を小手招きして其傍に坐らせる。一念も大人しく其傍に坐る。

「旦那はん、あんたはんどつから其御夫婦連れといやしたの」
とお艶がいふ。
「何これが御夫婦なのかい」
と余は驚いて二人を見る。
「あたい一念はんに惚れてるのどつせ。皆なでお笑ひやす。お笑ひたてかまへん。ナアそやおへんか一念はん」
と三千歳は可愛ゆい口をむつと閉ぢて一座を見る。
「えらいおのろけ、かなはんな」
とお花は撥で空を煽ぐ。一念は余のノートを取上げて、
「またこんな事かいてるナ。『ウーンと首』つて君何の事。『きといた』つて君何の事」
「きとおねやしたといふ事をさういひますがな」
と三千歳は美しい顔を一念にすりつけるやうにしてノートを覗き込む。
「さつきもいろ〳〵書いとねやした。この畫けつたいな畫やおへんか」
『下手な畫だねえ。これ誰を書いたのかい。三千歳さんかい」
「喜千福はんどすがナ。旦那はん喜千福はんが好きやさかいお書きやしたのどすやろ。何どす其

畫は。大きな頭の坊さんや事。其も旦那はんがお書きやしたんか。さうか一念はんか。さうかそれが横川の和尚さんかア。横川の和尚さんそないに頭大きいのン。耳もそないに大きいのン。いやらしやの。『コノ耳ウゴク』ほんまに耳が動くのン。けつたいな事。松勇はん、横川河坊さんの耳が動くて。けつたいえないか」
「けつたいえなあ。一念はんほんまに動くのか。さうか、妙な耳えなあ」
「一念はん。尋常卒業おしたんか」
「したョ。三千歳サンは」
「しました。去年、一念はんは」
「僕も去年」
「さうか同じやな。一念はん優等か」
「僕は一番だつたよ。すつかり甲だつたよ」
「さうか、おゝえら」
「三千歳サンは」
「一年の時はお尻から三番やつたのが、二年からほんまに四番になつて、卒業する時もやつぱり四番どした。乙が一つあつたん」

「何が乙だつたの」
「體操」
「三千歳サン、斯ういふ字知つてるか」
「知りまへん、そんなむつかしい字。一念はん知つとゐるか」
「横川首楞嚴院の楞の字だョ」
「そんな坊さんの事知りますもんか。ソンナラ一念はん斯ういふ字知つとゐるか」
「そんな變挺な字知るかい」
「り〳〵といふ字どすがな」
「そんな藝者の事なんか知つてたまるかい。其なら斯ういふ字よめるかい」
「むつかしい字えな。知りまへん」
「蘇悉地經といつてね三部經の一つだョ」
「そんなら一念はん斯ういふ字知つとゐるか。書いてしまふまで見んと置きや」
と長い袖でノートを隠すやうにして何やら書く。花櫛が灯に光つて美しい。
「さあお見。これ何といふ字どす」
「馬鹿だナア。へのへのなんか書きやアがつた」

「君達は僕のノートをオモチャにするんだナ。よろしい。其を横川の和尚サンに送つて一念は嫁サンがあつて二人でこんないたづらをしました、とさういつてやるよ。いゝかい」
「いゝやい。間抜け」
「一念はんの事お告げやしたらひどい目に合はせまつせ。今度お出でやしたら殺したげまつせ」
「こはい事。旦那はん、こはいこつちやおへんか。三千歳はんに殺されたら痛い事どすやろ」
「赤い血が出ないで白い血が出るかも知れない」
「なんぼなとおなぶりやす。ナア一念はん二人でひどい目に合はしたげまほナア」
「間抜けの顔を僕が書いて見ようか。そらこんな四角な顔だらう」
「そや〳〵」
「こんなに眼尻が下つてらア」
「そや〳〵」
「こんなに鼻がふくれてらア」
「そや〳〵」
「こんなに頭が尖ンがつてらア」
「そや〳〵」

「こんなに首が延びてらア」
「そや〳〵、本間によう似てるわ。松勇はんお見んか。旦那はんの顔によう似てますやろ。一念はんは畫が上手えなあ」
「さう男はんの傍にばつかりゐんと、ちとお立ちたらどうえ。今からさう浮氣おしるとお母はんにつげるえ」
「いやな姉はん。いふとくれやしたらするのに。囃子どすか。あたし太鼓どすか。松勇はん一緒にしまほ」
囃子が始まる、三千歳と松勇の太鼓に喜千福と玉喜久が二挺鼓をうつ。ヤー、ハー、イヤー、と黄色い聲をふりしぼつて、チョンボボ、デンデコデンと鳴らす。お花と今新たに加はつた小末といふ若い藝子が地を彈く。阪東君が醉つて手拍子を打つ。其度に體が前後に搖れる。
「小原女の踊が見たいナ」
と阪東君が醉眼を開く。お花が三味線を取り上げると、今度は小末が踊る。
『わしが在所は京の田舍の片ほとり、八瀬や小原に牛引いて(合)柴うちばんしよぎ頭に一寸載せ(合)梯子買はんせんかいな、くるみ買はしやんせェ(合)ェ、、、、、(合)空が曇れば雪がちらちらと(合)それぢやたまらぬ熱燗でのめ、眞赤に醉へばそこらへぶつ倒れ(合)それぢや色氣もこひ

けもないわいな(合)おこしてやんなあェ(合)ェ、、、、、(合)』
一念も三千歳も並んで大人しく見て居る。小末といふのは十七八で、髪は江戸ッ子の島田に結つて縞飛白の着物に厚板の帶を小意氣にしめて居る。其が手拭で頬被りして小原女になつた姿は、今迄極彩色ばかりであつた中に又さつぱりと美しい。
「君食はないか」
と刺身を取つてやる。
「僕は坊主だから食はない」
「其で君三千歳サンに惚れられたり、小末サンに見とれたりしていゝのか」
「何いやがるンだい」
といひながら三千歳の前の皿にある林檎の切れを取つて食ふ。
「中のえゝ事」
と松勇が逃腰をしていふ。
「よろしおすやろ」
と三千歳はツンとすます。
『手を引いて、グードバイして二足三足、別れとも無い胸の内……』

といふ今度は今めかしい唄をお花がうたつて玉喜久と松勇が踊る。其内小末と喜千福も一所に踊り出す。そこがいかん、こゝがいかんとお花が直ほす。

『手を引いて、グードバイして二足三足……』

と同じ唄が何遍といふ事なくくりかへされる。まるでお稽古が始まつた様だ。しまひには阪東君が立つてをどり出す。不器用な踊り具合がをかしい。お艶が笑ふ。

下から仲居のみねが、

「一念はん。伯母はんが迎へに來やはりましたえ。早うお歸り」

といつても一念はだまつてゐる。

『互に見合はす顏と顏』

といふ處で阪東君の眼つきがをかしいといつて皆がどつと笑ふ。一念も笑ふ。

「おい一念君、伯母サンが迎へに來なすつたつていふぢやないか。叱られぬやうに早く歸りたまへ。そらお土產だ」

と今持つて來た許りの生菓子を半紙に一包やる。

「叱られたつていゝやい」

とお菓子をひつたくるやうに取つて、

「もう君横川へは歸らないのかい。僕明日歸るのだョ」

といつてお菓子を兩手に持つたまゝ歸りかける。

「一念はん、ハンケチ貸しまひよか」

と三千歲は立上つてハンケチを振る。一念は一寸振りかへつたが知らぬ風をして踊の中をかけぬけて歸つて行つた。

京都名物のむし鮓が來て藝子も舞妓も仲居も寄つてたかつて食ふ。

「三千歲はん、一念はんが歸らはつて淋しおすやろ。咽につめん樣にお上り」

「おほきに」

「利口な小僧だナア。三千歲サンが惚れるのも無理は無い」

「お父つあんもお母はんも無いのやてな。可哀想やおへんか。どうして横川みたいな淋しい處へ伯母はんがやりやはつたんやろ」

と三千歲は沈んで居る。

横川の夜は更けにくかつたが祇園の夜は更けやすい。

「ハ――イ――」

といふ子供衆の長い返辭が樓中に響きわたつて聞える。

（明治四十年四月）

斑鳩物語

上

法隆寺の夢殿の南門の前に宿屋が三軒ほど固まつてある。其の中の一軒の大黒屋といふうちに車屋は梶棒を下ろした。急がしげに奥から走つて出たのは十七八の娘である。色の白い、田舍娘にしては才はじけた顏立ちだ。手ばしこく車夫から余の荷物を受取つて先に立つ。廊下を行つては三段程の段階子を登り又廊下を行つては三段程の段階子を登り一番奥まつた中二階に余を導く。小作りな體に重さうに荷物をさげた後ろ姿が余の心を牽く。

荷物を床脇に置いて南の障子を廣々と開けてくれる。大和一圓が一目に見渡されるやうないゝ眺望だ。余は其まゝ障子に凭れて眺める。

此の座敷のすぐ下から菜の花が咲き續いて居る。さうして菜の花許りでは無く其と點接して梨子の棚がある。其梨子も今は花盛りだ。黄色い菜の花が織物の地で、白い梨子の花は高く浮織になつてゐるやうだ。殊に梨子の花は密生してゐない。其荒い隙間から菜の花の透いて見えるのが

際立つて美しい。其に處々麥畑も點在して居る。偶々燈心草を作つた水田もある。梨子の花は其等に頓着なく浮織になつて遠く彼方に續いて居る。牛里も離れた所にレールの少し高い土手が見える。其土手の向うもこゝと同じ織物が織られてゐる樣だ。法隆寺はなつかしい御寺である。法隆寺の宿はなつかしい宿である。併し其宿の眺望がこんなに善からうとは想像しなかつた。これは意外の獲物である。

娘は春日塗の大きな盆の上で九谷まがひの茶碗に茶をついで居る。やゝ斜に俯向いてゐる横顔が淋しい。さきに玄關に急がしく余の荷物を受取つた時のいき〳〵した娘とは思へぬ。赤い襦袢の襟もよごれて居る。木綿の着物も古びて居る。それが其淋しい横顔を一層力なく見せる。

併しこれは永い間では無かつた。茶を注いでしまつて茶托に乘せて余の前に差し出す時、彼はもう前のいき〳〵した娘に戻つて居る。

「旦那はん東京だつか。さうだつか。ゆうべ奈良へお泊りやしたの。本間になア、よろしい時候になりましたなア」

と脫ぎ棄てた余の羽織を疊みながら、

「御參詣だつか、おしらべだつか。あゝさうだつか。二三日前にもなア國學院とかいふとこのお方が來やはりました」

と羽織を四つにたゝんだ上に紐を載せて亂箱の中に入れる。

余は渴いた喉に心地よく茶を飲み干す。東京を出て以來京都、奈良とへめぐつて是程心の落つくのを覺えた事は今迄無かつた。余は膝を抱いて再び景色を見る。すぐ下の燈心草の作つてある水田で一人の百姓が泥を取つては箕に入れて居る。箕に土が滿ちると其を運んで何處かへ持つて行く。程なく又來ては箕に土をつめる。何をするかわからぬが此廣々とした景色の中で人の動いて居るのは只此百姓一人きりほか目に入らぬ。

娘は緣に出て手摺の外に兩手を突き出して余の足袋の埃を拂つて又之を亂箱の中に入れる。

「いゝ景色だナア」

といふと直々引取つて、

「此邊はなア菜種となア梨子とを澤山に作りまつせ。へー燈心も澤山に作ります。燈心はナー、あれを一遍よう乾かして、其から叩いてナー、それから又水に漬けて、其から長い錐のやうなもので突いて出しやはります。其から又疊の表にもしやはりまつせ。長い、のから燈心を取りやはつて短かいのは大概疊の表にしやはります」

「疊の表には藺をするのぢやないか。燈心草も疊の表になるのかい」

「いやな旦那はん。燈心草といふのが藺の事つたすがな」

と笑ふ。余は電報用紙を革袋の中から取り出す。娘は棚の上の硯箱を下ろして蓋を取る。
「まア」
といつて再び硯箱を取り上げてフッと輕く硯の上の埃を吹いて藥罐の湯を差して墨を磨つて呉れる。墨はゴシ／＼と脈やな音がする。
電報を認め終つて娘に渡しながら、
「下は大變多勢のお客だね。宴會かい」
と聞く。娘は電報を二つに疊んで膝の上に置いて、
「いゝえ。皆東京のお方だす。大師講のお方で高野山に詣りやはつた歸りだすさうな。今日はこに泊りやはつてあした初瀬に行きやはるさうだす。今晩はおやかましうおますやろ」
と娘は立たうとする。電報は一刻を急ぐ程の用事でもない。
「初瀬は遠いかい」
とわざと娘を引とめて見る。
「初瀬だつか」
と娘もも一度腰を下ろして、
「初瀬はナー、そらあのお山ナー、そら左の方の山の外れに木の茂つたとこがありますやろ……」

と延び上るやうにして、
「あこが三輪のお山で、初瀬はあのお山の向うわきになつてます。旦那はんまだ初瀬に行きやはつた事おまへんか」
「いやちつとも知らないのだ。さうかあれが三輪か。道理で大變に樹が茂つてゐるね。それから吉野は」
「吉野だつか」
と娘は電報を疊の上に置いて膝を立てる。手摺の處に梢を出してゐる八重櫻が娘の目を遮るのである。余は立上つて緣に出る。娘も余に寄り添うて手摺に凭れる。
「そら、此向うに高い山がおますやろ、霞のかゝつてる。へーあの藪の向うだす。あれがナー多武の峰で、あの多武の峰の向うが吉野だす」
娘は櫻の梢に白い手を突き出して、
「あの高い山は知つとゐやすやろ」
「あれか、あれが金剛山ぢやないか。あれは奈良からも見えてゐたから知つてる」
娘は手摺傳ひに左へ／＼と寄つて行つて、
「旦那はん、一寸來てお見やす。そらあそこに百姓家がおますやろ。さうだす、今鴉の飛んでる

下のとこ。さうだす、あの百姓家の左の方にこんもりした松林がおますやろ。そやおまへんがナー。それは鐵道のすぐ向うだすやろ。それよりももつとずつと向うに、さうだすあの多武の峰の下の方にうつすらした松林がありますやろ。さう〳〵。あこだす。あこが神武天皇樣の畝火山だす」

娘の顏はます〳〵いき〳〵として來る。畝火山を敎へ終つた彼はまだ何物をか探して居る。彼の知つて居る名所は見える限り敎へてくれる氣と見える。

「お前大變よく知つて居るのね。どうしてそんなによく知つて居るの。皆な行つて見たのかい」

「へー、皆んな行きました」

といつて余を見た彼の眼は異樣に燃えてゐる。

「さう、誰と行つたの、お父サンと」

「いゝえ」

「お客さんと」

「いゝえ。そんな事聞きやはらいでもよろしまんがナア」

と娘は輕く笑つて、

「私の行きました時も丁度菜種の盛りでなア。さう〳〵やつぱり四月の中頃やつた」

と夢見る如き眼で一寸余の顏を見て、

「旦那はん、あんたはんお出でやすのなら連れていておくれやすいな。ホ、、、私見たいな者はいやだすやろ」

「いやでも無いが、こはいナ」

「なぜだす」

「なぜでも」

「なぜだす」

「こはいぢやないか」

「しんきくさ。なぜだすいな、いひなはらんかいな」

「いゝ人にでも見つからうもんなら大變ぢやないか」

「あんたの」

「お前のサ」

「ホ、、、、馬鹿におしやす。そんなものがあるやうならナー。……無い事もおへんけれどナー。……ホ、、、、ホ、御免やすえ。……ア、電報を忘れてゐた。お風呂が沸いたらすぐ知らせまつせ」

と妙な足つきをして小走りに走つて疊の上の電報を抄ふやうに拾ひ上げて座敷を出たかと思ふ

と、襖を締める時、

「ほんまにおやかましう。御免やすえ」

しづかに挨拶してニッコリ笑つた。

「お道はん、〳〵」

と下で呼ぶ聲がする。

「へーい」

といふ返辭も落ついて聞えた。

お道さんが行つたあとは俄かに淋しくなつた。きのふ奈良でしらべた報告書の殘りを認める。時々下の間で多勢の客の笑ふ聲に交つてお道サンの聲も聞えるが、座敷が別棟になつてゐるのではつきりわからぬ。

夢殿の鐘が鳴る。時計を見るともう六時だ。

漸く風呂が沸いたと知らして來た。其はお道さんではなく、此家の主婦であらう三十四五の神サンであつた。晩飯の給仕に來たのもお道さんで無く此の神サンであつた。

此神サンの話によると、お道サンといふのは此うちの娘でなくすぐ此裏の家の娘で、平常は自分のうちで、機械機を織づて居るが、世話しい時は手傳ひに來るのだ。との話であつた。

「へい、此邊でナー、ちつと澁皮のむけた娘はナー、皆南の方へ行きやはります。南の方といふのはナー下市、上市、吉野あたりだす。お道はんも一寸行てやはりましたが、お父つあんが一人で年よつてゐるさかいに半年許りで歸つて來やはつた。へー、何だす。そりやナー若い時はナー。そやけれどお道はんに限つてそないな事はありまへんやらう。ホ、、、」

とお神サンは妙な眼つきをして人の顏を見て笑ふ。

中

翌日午前は法隆寺に行つて、午後は法起寺に行つた。これで今回官命の役目は一段落となるのである。法起寺は住職は不在で、年とつた方の所化も一寸出たとの事で、十五六になるのつそりした小僧が炭をふう〳〵吹いて灰だらけにした火鉢を持つて來て、ぬるい茶を汲んで來て主ぶりをする。取調の事は極めて簡單で直ちに結了する。塔の修覆が出來てからまだ見ぬので庭に出て見る。腰衣をつけた小僧サンもあとからついて來る。白い庭の上に余の影も小僧サンの影もくつきりと映る。うらゝかな春の日だ。三重の塔は法隆寺の塔を見た目には物足らぬが其でも蟇股や撥形の爭はれぬ推古式のところが面白い。余はふと此塔に登つて見度くなつた。

「小僧サン、塔に登りたいものですが……」

「塔にお登りやすの、きたのうおまつせ」

といひながら無造作に承諾してもう鍵を取りに行く。頭に手をやつて見たり、腰に手をやつて見たり自分の影法師を面白さうに見ながら悠々として庫裡の方に行つた。

眞下に立つて仰ぐと三重の塔でも中々高い。三重目の欄干のところに雀が群がつて飛んで居る。立札を讀むと特別保護建築物で一年餘を費して修理したとある。別に立札に內務省の下賜金が二萬何千圓とある。此地はもと聖德太子の御學問處で、昔はたいしたものであつたのだらうが、今は當時の建物として此塔許り殘つてゐて他は見すぼらしい堂宇許りだ。とても法隆寺などには比べものにはならん。

小僧サンが悠然として鍵を持つて來て、いきなり塔の扉に突ッ込む。ゴトンと音がして大きな扉ががた〳〵と開く。冷たい風が塔の中から吹く。安置されて居る佛體は手や足の無くなつてゐる古佛でこれも推古時代の彫刻かと思はれる。小僧サンはもう梯子を登つて居る。

此梯子は高さ一間半許りの幅のせまい勾配の急な梯子で一歩踏む度に少しゆらぐ。余は元來臆病な方だが今更止めるわけに行かぬので小僧サンのあとについて登る。戸をがらがらと開ける音がする。埃が落ちて來るので閉口しながら仰向いて見ると、天井に二尺角程の小さい穴があいて居る。小僧サンは今其穴に體半分を突込んで足を二本宙にぶら下げて居る。おや〳〵と思つて見

て居るうちに體操のやうな事をしてヒョイと上に飛び上る。余は恐る〳〵登つて其穴の處に達し漸く頭を突込んで上を見上ぐると驚いた。余は塔の中の構造も普通の家と同じに一階二階と其々天井のやうなものが出來てゐることゝ思つてゐたに、天井は一階のところに在る許りで、見上げると此上はもう頂上まで筒抜けで、中央の大きな柱が天にまで達するかと思ふやうに高い。小僧サンはもう第二の短い梯子を登つて右から左にかゝつてゐる木を輕業のやうに兩手をふつて渡つてゐる處だ。

余は穴に頭を突込んだまゝ、

「小僧サンもうよしませう」

といふ。小僧サンは不平さうに、

「折角こゝまで來たんやよつて上りなはれ」

と横木の上に立つたまゝ下を見下ろして居る。何だか此際小僧サンに無限の權威があるやうに思はれて仕方なしに上ることにする。小僧サンは今體操をするやうなことをして此の穴を上がつたが、其が已に余に取つて大困難だ。頭の上に斜に横たはつてゐる木に手をかけて見る。木が大きくて手のさきがかゝる許りだ。指さきに懸命の力を籠めて左の手を其木にかけ、右の腕でぺたりと天井の上を壓さへると埃だらけで紋附羽織がだいなしになる。漸く天井裏に登る。

其から第二の梯子は無造作に登れたが、小僧サンが手をふつて渡つてゐた横木の上に來て途方に暮れる。何かつかまへる者が無いと足がふるへて顚倒しさうだ。頭の處に併行した大きな木がある。兩手をぐつと上げて此木を握る。足の方も見ねばならず手の方も見ねばならず、上目を使つたり下目を使つたり一分きざみに渡つて居ると忽ちゴーといふ地鳴りのやうな音がする。何事かと思つて立どまつて見ると一陣の風が塔に吹き當る音であつた。ゆれはしないかと中央の大きな柱を見ると大船の帆柱よりも大きいのが寂然として立つて居る。漸く意を安んじて横木を渡つてしまふと、サア行き詰りになつてしまつてどうしてよいのかわからぬ。梯子もなく、別に連絡して居る他の木もない。俄かに恐しくなつて來てもう空目を使つて小僧サンを見る勇氣もない。

「小僧サン、これからどうしたらいゝんです」

小僧サンの聲は思はぬ方から聞える。

「其上の木にまたいで上りなはれ」

といふ。其がさう易々と出來る事なら何も小僧サンを呼びはしないのだが、これはいよ／＼窮地に陷つた事だと泣き度くなる。仕方なしに兩方の手で上の木に抱きつくやうにしてやつと這ひ上る。羽織の袖が何かにかゝつたらしいのを一生懸命で振り切る。一息ついて上を見上げると上はまだなか／＼遠い。下を見下ろすと下ももうなか／＼遠い。もう下りるのも上るのも同じく命が

けだと覺悟を極めて未練なく登ることにする。

小僧サンは立どまつてはふりかへり、ふりかへつては歴階して上つて居る。余もまけぬ氣になつて登る。

「こゝの欄干のところにしまひよか、露盤のところに出なはるか」

と小僧サンが上の方から呼ぶ。露盤の處から九輪の處に首を突出す事が出來るといふ事は曾て聞いた事もあつた。小僧サンは其處までも行く氣と見える。其處まで行くうちには余はもう手足の力を失つて途中から轉落するに極つてる。

「欄干のところで結構です」

「さうだつか。露盤のとこに出ると畝火の方がよく見えまんがなア」

畝火は宿屋の二階からでも見えぬことは無い。こちらは其どころでは無いのだ。小僧サンはどうするかと氣が氣でなく見て居ると、やつと露盤の方は斷念したと見えて、欄干の方に出る小さい窓を開けて居る。

小僧サンは其窓を大佛殿の柱くぐりといつたやうな風に這うて出る。余も漸く其窓に達して、今度こそすべり落ちたら百年目と度胸を据ゑて這うて出る。窓の外は三重目の小さい回廊で欄干を握つて立つと、ニチャ／＼と手につくものがある。見ると雀の糞だ。其邊眞白になつて居る。

さつき雀の飛んで居つたのが此處だなと思ふ。小僧さんに並んで欄干を掴まへて下を見下ろす。

自分の足下には二重目の屋根が出て居る。此處に立つて下を見下ろすのは想像してゐた程に恐しく無い。小僧サンに跟いて回廊傳ひに東の方に廻つて見る。宿屋の二階で見た菜の花畑はすぐ此塔の下までも續いて居る。梨子の棚もとび〳〵にある。麗かな春の日が一面に其上に當つて居る。今我等の登つてゐる塔の影は塔に近い一反ばかりの菜の花の上に落ちて居る。

「又來くさつたな。又二人で泣いてるな」

と小僧サンは獨り言をいふ。見ると其塔の影の中に一人の僧と一人の娘とが倚り添ふやうにして立話をして居る。女は僧の肩に凭れて泣いて居る。二人の半身は菜の花にかくれて居る。

「あの坊さん君知つてるのですか」

「あれなあ、私の兄弟子の了然や。學問も出來るし、和尚サンにもよく仕へるし、おとなしい男やけれど、思ひきりがわるい男でナー。あのお道といふ女の方がよつぽど男まさりだつせ。あのお道はナア、親にも孝行で、機もよう織つて、氣立もしつかりした女でナア、何でも了然が岡寺に居つた時分にナア、下市とか上市とかで茶屋酒を飲んだ事のある時分惚れ合つてナア、それから了然はこちらに移る、お道はうちへ歸るしゝてナア、今でもあんなことして泣いたり笑つたりしてますのや。ハ、、、、、」

と小僧サンは無頓着に笑ふ。お道は今朝から宿に居なかつたが今こゝでお道を見ようとは意外であつた。殊に其情夫が坊主であらうとは意外であつた。我等は塔の上からだまつて見下ろして居る。

何か二人は話してゐるらしいが言葉はすこしも聞えぬ。二人は塔の上に人があつて見下ろして居ようとは氣がつくわけも無く、了然はお道をひきよせるやうにして坊主頭を動かして居る。菜の花を摘み取つて髪に挿みながら聞いてゐたお道は急に頭を振つて包みに顔を推しあてて泣く。

「了然は馬鹿やナア。あの阿呆面見んかいナ。お道はいつやら途中で私に遇ひましてナー、こんなことというてました。了然はんがえらい坊さんにならはるのには自分が退くのが一番やといふ事は知てるけど、こちらからは思ひ切ることは出來ん。了然はんの方から棄てなはるのは勝手や。こちらは焦がれ死に〻死ぬまでも片思ひに思うて思ひ拔いて見せる。と斯んなこというてました。私お道好きや。私が了然やつたら坊主やめてしもてお道の亭主になつてやるのに。了然は思ひきりのわるい男や。ハ、、、、、」

と小僧サンは重たい口で洒落たことをいふ。塔の影が見るうちに移る。お道はいつの間にか塔の影の外に在つて菜の花の蒸すやうな中に春の日を正面に受けて居る。涙にぬれて居る顔が菜種の花の露よりも光つて美しい。我等が塔を下りようと彼の大佛の穴くゞりを再びもとへくゞり始め

た時分には了然も纔に半身に塔の影を止めて、半身にはお道の浴びて居る春光を同じく共に浴びてゐた。了然といふ坊主も美しい坊主であつた。

下

其夜晩酌に一二杯を過ごして毛布をかぶつたまゝ机に凭れてとろ〳〵とする。ふと目がさめて見るとうすら寒い。時計を見ると八時過ぎだ。二時間程もうたゝ寢をしたらしい。昨日に引きかへ今日は廣い宿ががらんとして居る。客は余一人ぎりと見える。靜かな夜だ。耳を澄ますと二處程で篠の音がして居る。

一つの方はカタン〳〵と冴えた篠の音がする。一つの方はボットン〳〵と沈んだ音がする。其二つの音がひつそりした淋しい夜を一層引き締めて物淋しく感ぜしめる。初め其篠の音は遠い樣に思つたがよく聞くと餘り遠くでは無い。余は夢の名殘りを急須の冷い茶で醒してぢつと其二つの音に耳をすます。

蛙の聲もする。はじめ氣がついた時は僅に蛙の聲かと聞き分くる位のひそみ音であつたが、篠の音と張り競ふのか、あまたのひそみ音の中に一匹大きな蛙の聲がぐわアとする。あれが蛙の聲かなと不審さるゝ程の大きな聲だ。晝間も燈心草の田で啼いてゐたがあんな大きな聲のはゐなかつた。夜になつて特に高く聞えるのかも知れぬ。一匹其大きなのが啼き出すと又一つ他で大きなのが鳴く。又一つ鳴く。しまひには七八匹の大きな聲がぐわア〳〵と折角の夜の寂寥を攪き亂すやうに鳴く。其でも蛙の聲だ。はじめひそみ音の中に突如として起こつた大きな聲を聞いた時は噪がしいやうにも覺えたが、其が少し引き續いて耳に慣れると矢張り淋しいひそみ音の方は一層淋しい。氣の勢か篠の音もどうやら此蛙の聲と競ひ氣味に高まつて來る。カタンカタンといふ音は一層明瞭に冴えて來る。ボットン〳〵といふ音は一層重々しく沈んで來る。

お神サンが床を延べに來る。

「旦那はん毛布なんかおかぶりやして、寒むおまつか」

「少しうたゝねをしたので寒い。それに今晩は馬鹿に靜かだね。お道さんは來ないのかい」

「今晩は來やはりまへん。そら今篠の音がしてますやろ、あれがお道はんだすがな」

「さうかあれがお道さんか」

と余は又篠の音に耳を澄ます。前の通り冴えた音と沈んだ音とが聞える。

「二處でしてゐるね。其に音が違ふぢやないか。お道さんの方はどちらだい」

「そらあの音の高い冴え〳〵した方な、あれがお道さんなのだす」

「どうしてあんなに違ふの、機が違ふの」

「機は同じ事つたすけれど、筬が違ひます。音のよろしいのを好く人は筬を別段に吟味しますのや」

余は再び耳を澄ます。今度は冴えた音の方にのみ耳を澄ます。カタン〳〵と引き續いた音が時時チョッと切れる事がある。絲でも切れたのを繋ぐのか、物思ふ手が一寸とまるのか。お神サンは敷布團を二枚重ねて其上に上敷きを延べながら、

「戰爭の時分はナア、一機の織り賃を七十錢もとりやはりましてナア、へえ繃帶にするのやさかい薄い程がよろしまんのや。其に早く織るものには御褒美を呉りやはつた。其時分は機もよろしうおましたけど、もう此頃はあきまへん。へーへあんたはん一機二十五錢でナア、一機といふのは十反かゝつてるので、なんぼ早うても二日はかゝります」

お神サンは聞かぬ事まで一人で喋舌る。突然筬の音に交つて唄が聞える。

『苦勞しとげた苦しい息が火吹竹から洩れて出る』

「お道さんかい」

と聞くと、

「さうだす。えゝ聲だすやろ」

とお神サンがいふ。余は聲のよしあしよりもお道サンが其唄をうたふ時の心持を思ひやる。

「あれでナア、筬の音もよろしいし唄が上手やとナア、よつぽど草臥れが違ひますといナ」

「あんな唄をうたふのを見るとお道サンもなか〳〵苦勞してゐるね」

「ありや旦那はん此邊の流行唄だすがナ、織子といふものはナア、男でも通るのを見るとすぐ惡口の唄をうたうたりナア、そやないと惚れたとかいふ唄ばつかりだす」

俄かに男女の聲が聞える。

「どこへ行きなはる」

「高野へお參り」

「ハヽア高野へ御參詣か。夜さり行きかけたらほんまにくせや」

「お父つはんはもう寢なはつたか」

「へー休みました」

高野へ參詣とは何の事かと聞いて見たら、

「はゞかりへ行くことをナア、此邊ではおどけてあないにいひまんのや」

とお神サンは笑つた。よく聞くと女の聲はお道サンの聲であつた。男の聲は誰ともわからぬ。長屋つゞきの誰かであるらしい。

筬の音が一層高まつて又唄が聞える。唄も調子もうきうきとして居る。

『鶏啼迄寝た枕元櫛の三日月落ちて居る』

お神サンは床を延べてしまつて、机のあたりを片づけて火鉢の灰をならして、もうラムプの火さへ小さくすればよいだけにして、

「お休みやす。あまりお道サンの唄に聞きほれて風邪引かぬやうにおしなはれ」

と引下る。

酒も醒めて目が冴える。筬の音を見棄てゝ此儘寝てしまふのも惜しいやうな氣がする。晝間書きさして置いた報告書の稿をつぐ。ふと氣がつくといつの間にやら筆をとゞめて、きのふのお道サンの喋舌つた事や、今日塔から見下ろした時の事やを回想しつゝ筬の音に耳を澄まして居る。又唄が聞える。

『大分世帶に染んでるらしい目立つ鹿の子の油垢』

調子は例によつてうき〳〵として居るが、夜が更けた故かどこやら身に入むやうに覺える。これではならぬと更に稿をつぐ。

終に暫くの間は筬の音も耳に入らぬやうになつて稿を終つた。今日で取調の件も終り、今夜で報告書も書き終つた。がつかりと俄かに草臥れた樣に覺える。

火を小さくして寝衣になつて布團の中に足を踏み延ばす。筬の音はまだ聞えて居る。忘れてゐたが沈んだ方のもまだ聞えて居る。

眠るのが惜しいやうな氣がしつゝうと〳〵とする。ふと下で鳴る十二時の時計の音が耳に入つたとき氣をつけて聞いて見たら、沈んだ方のはもう止んでゐたが、お道サンの筬の音はまだ冴ゑ冴えとして響いてゐた。

（明治四十年五月）

大内旅宿

大阪の人力車は塵取を立てたやうだ。上が開いて下がつぼんで奥行が淺い。殊に平常は幌が無くて後ろに赤や青の布團が縛りつけてあつて、其上毛布の膝掛けといふのが無くて小窓の日覆のやうな布切れが一寸かゝつてゐる許りだ。乘るが早いか狹い町をガラ〳〵〳〵と無暗に走り、下ろす時は梶棒を投げるやうに下ろす。余は五年前の内國博覽會の時に一月餘り此地に滯在してゐて厭や〳〵乍ら常に此車に乘つてゐた。其後西に行く用事があつても常に梅田を素通りして五年の間此地を踏んだ事が無かつた。今度暫く振りで來て見ると、前は厭や〳〵乘つてゐた此塵取車に今度は一種のなつかしい感じが加はつて、同じくあまりすきで無い大阪の町にもどこやら久濶を叙するやうな心持で二つ井戸の粟おこしの赤い梅鉢の紋もあざやかに目に映じた。

車夫は例によつて淀屋小路の大内（旅館）の前に梶棒を投げたので、下り乍ら上を見上げると以前の通り軒ラムプは眞赤に染めたガラスに、白く「大内旅宿」と拔いてある。前には「大内ツネ」とあつたやうに覺えて居たが其のツネが除かれて「大内旅宿」になつてゐる。

狹い路次のやうな處を敷石傳ひに奥に這入ると、其處に初めて玄關があつて沓ぬぎの上に粗末な女下駄が一足ぬぎ棄てゝある。左手の帳場には生れて五六ヶ月の子供をだいた乳母らしい女が一人居る。前は此の沓ぬぎの石は常に美しい水で洗はれて居て、帳場には番頭が筆を耳に挾んで景氣よく客に應接してゐたものだ。

「お客樣だつせー。彦ドーン」

と乳母はぢろ〳〵余の顔を見ながらのろい聲を出す。二階梯子の音がトン〳〵〳〵としたと思ふと見た事の無い若い番頭が、「おいでやす」と敷臺に前膝を突く。

「昨日電報を打つて置いたが」

「松山はんだつか。お待ち申してました」

と番頭は車夫から荷物を受取つてさきに立つ。二階の六疊の間には座布團が敷かれて、火鉢が置かれて、其火鉢には火もつがれてゐて傍に茶器まで置いてあつて誠に余を待受けてゐてくれたものらしい。

〻此宿の主人はもと余と同國のもので、余の兄からしてが常に定宿としてゐたので、余の子供の時分兄に連れられて大阪見物に來た時はじめて泊つて、其から國を出て京都に遊學して後ちも此

地に來る度には一二泊するのが常であつた。お神はいつでも余を「松山はんの坊ンち」と呼んでゐた。五年前に來た時は其の「松山はんの坊ンち」が初めて「松山はんの旦那」になつて、其の「松山はんの坊ンち」時代おかつぱサンであつた貰ひ娘のおたかチャンが新蝶々を結つた美しい娘盛りになつてゐた。此おたかチャンは鄕里の温泉宿の娘であつたのをお神が貰ひ受けたので、宿屋の事を一切仕込むで、行く〳〵は自分の男の子の女房にして跡を取らす積りであつたのだ。此前來た時は下女同樣座敷の事を働いて、着物も疊めば給仕もする、時には用事が濟んでも火鉢の向うに坐つて話し込むこともある。「どうだ、おつかさんはきついか」と聞くと、だまつて笑つてゐて返辭をせぬ。「お前の旦那樣になる人は何處に居るの」と聞くと、「きらひな人、又そんな事を聞いて」とついと立つて座敷を出てしまふ。三十日の間には女中頭のお梅ドンと三人で一度博覽會を見に行つた事もあつた。單衣を一枚縫うて貰つた事もあつた。十日程同宿した山田はおたかサンをお丸サンと呼んで、其お丸サンを相手に晩酌の德利を一本過ごすのが常であつた。山田の重くるしい口で洒落をいふのをお丸サンはキヤッ〳〵といつて興がつてゐた。さういふ時は美しい頰が愈〻光つて見えた。

其おたかチャンに就て余は近頃或風說を聞いた。其は一昨年お神が死んだ後、息子とおたかチャンを夫婦にせうとした處、息子がおたかチャンを嫌つてお光といふ他の女を女房にした。其で、

もおたかチャンが居ないと營業に困るので此頃はおたかチャンは帳場と臺所とを引き受けて働いては居るものゝ、ふさぎ込んでゐて一寸も客には顏を見せず、ひまのある時は隱れて裁縫許りして居るさうだ、只折節古い馴染客が行くと座敷に來る事もあるさうだ、可哀さうな身の上だ、と斯ういふ評判で、現に此話をした人も先日泊つた時、靑ザメた浮かぬ顏をしてゐたおたかチャンを一寸物かげで見た許りであつた、との事で、君は古い馴染だ、序があつたら是非一泊して慰めてやり玉へと熱心にいつた。

今度の旅行の目的は他の土地に在るのだが一寸此の地にも用事があるので五六泊する積りで立寄る。さういふ話を聞いて來て見ると軒ラムプにお神の名であつた「ツネ」といふ字が省かれてゐたのが第一目にとまり、次に玄關の落寞としてゐたのが心を牽き、子供を見てこれはお光に出來た子であらうと想像し、其の靑ザメた失戀のおたかチャンを一層哀れに覺えて早く遇ひ度いやうな氣がしながら座布團の上に坐つて煙草を吸ふ。其處へ障子を開けて顏を出したのは知らぬ下女（お藤どん）であつた。

「旦那はん東京だつか」

余は其には答へずに、

「お梅ドンはまだゐるか」
「居やはります。お梅ドン知つてやはりまんのか」
とお藤どんは余の羽織を疊みながら一寸余の顏を空目で見る。余は机に肱をもたせながら庭を見ると狹い庭の中心になつてゐる松の木が枯れて居る。
「松が枯れてゐるね」
「あれな旦那はん、妙な事があるもんだつせ。前の御寮人サンがおかくれになる前からそろ〳〵枯れかけて、おかくれになるのと一緒に枯れてしまひました。ほんまに不思議やおまへんか」
「さうか、其は不思議だな。いゝお神サンであつたが氣の毒な事をした」
といひながら尙ほ庭を見ると其枯れた松の木により添うて二三輪尙ほ花をとゞめた海棠が立つて居る。おたかサンを思ひ出す。
「おたかサンは機嫌かね」
「御寮人サンだつか」
「御寮人サンぢやないおたかサンサ」
「ホ、、、、」
「何がをかしいの、おたかサンがどうかしたの」

「いゝえ、別にお變りおまへん。いまも旦那の事を仰しやつてゐやはりました。ちひさい時分から知つてゐる方やて」
「實はおたかサンに逢ひ度くて來たのだ。此頃は色が惡いさうだが、別に病氣では無いのかね」
「ホ、、、、つや〳〵してゐやはりまんがな」
余は「はてな」と思ふ。
「お光サンとかいふのは別嬪かね」
「別嬪だつせ」
「おたかサンとどちらが別嬪だ」
「其りや好き〳〵だす、旦那はんなら御寮人サンの方が好きだすやろ」
「なぜ」
「なんでゞも、わざ〳〵逢ひに來やはつたんだすやろ」
不思議な事には御寮人サンといふのがお光で無くておたかサンらしい。どうも合點が行かぬので念の爲め聞いて見る。
「御寮人サンといふのはおたかサンの事か」
「いやな旦那はん。外に御寮人サンがありますかいな」

「こりや驚いた。下に子供が居たが、あれは誰の子だ」
「御寮人サンに去年の十月に出來やはつたのだす」
「驚いたナー、これは驚いた」
「何をそないにびつくりしやはるのだす。をかしい旦那はんや」
とお藤どんは笑ひながら出ていつてしまふ。
そんな筈では無かつたと思ふ。これで見るとおたかサンは失戀どころか子供迄出來て居る。東京で聞いた風聞は全く根無し草であつたのだらうか。をかしいなあと思つてゐる處へおたかサンの笑ひ聲が聞える。

今お藤どんの締めて行つた障子がすぐ又がらりと開く。
「お出でやす」
といふ勇ましい聲はおたかサンに相違無いが、面ざしは見違へるやうに變つて居る。大きな丸髷に赤いテガラが華やかで、齒を染めて居るのが色白の顏に照り映えて意氣だ。
「やア暫く」
「本當にお久し振り。山田の旦那はん御機嫌だつか。さうだす一昨年の春一寸來てくりやはりま

した。あんたはん此の前お出でやしたのは博覽會の時だすな。もう五年になりますな」
と敷居の處に膝を突いたまゝ、昔の通りいき〳〵としたものゝいひやうをする。噂に聞いた沈鬱な面影は少しも見えぬ。立派な大阪風の御寮人樣になりすまして、黑い襟のかかつた袷の下に喉をつめるやうに合はした襦袢の襟にも赤い色が澤山見えて派手だ。
「大變變つたのねえ、其にもう赤チャンが出來たさうだね。お目出度う」
おたかサンは「オホヽ」と笑ひ消して、
「あんたはんもお變りやした。なんでそないにお髯をはやしやはりましたんや」
余は顎髯を撫でながら暫くだまつてゐる。
「時にね、お母サンが御不幸であつたつてね、嘸……」
「有難うございます」
と口ではいつたがあまり心には留まらぬやうだ。
「お縫孃サンは御機嫌だつか」
「アヽ機嫌だよ。アレも去年の暮嫁入りしたヨ」
「さうだつか。それはお目出度うございます。矢張り東京の方へだつか。さうだつか。芳雄坊サンも大きくおなりやしたろ」

斯ういふ話の間も後ろを通る下女と話し合つて笑つたり、袂の中に手を突込んで何やら探したり、少しもしつとりした處がなうて、話にも實が入らぬ。

「まアこちらへお這入りな」

と余は座布團を火鉢の向う側に敷く。

「有難うございます。今度はどちらへお出でやすの。お國へお歸りだつか」

と少し膝を浮かし加減にして、

「さうだつか。お藤ドンお湯はまだか。さうか。すぐお風呂があきますさかい、どうぞ御ゆつくり」

と急がしさうに立つて行つてしまつた。給仕が濟んでも火鉢の向う側に坐つてをかしくも無い事ををかしがつてひまをつぶしてゐた人なつこい昔のおたかサンとはガラリと變つてしまつて居る。

湯殿も昔の通りであつたが湯がぬるかつた。轉がつて居つた石鹸箱の中の花王石鹸を一通り體に塗つて二十分許り湯槽の中につかつて漸く溫まつて出る。

部屋に歸つて茶を飲む。見るともなしに復た庭の枯松を見る。軈て其目を古びた障子に移して

此障子は此冬張替へなかつた許りで無く此前の冬も張替へなかつたのであらうかと考へてゐる時膳を運んで來たのはお梅ドンであつた。

お梅ドンは昔の通りのつそりとして居る。圖抜けて長い體に裄丈の短い着物を着て、縮れつ毛の狹い鬢に小さい丸髷をのつけて居る。

「御機嫌よう」

「お前も變りは無いかね」

余が此宿に來始めた時分にもう居た女中で初めて見た時から今日迄少しも變らぬ。いつも愛嬌の無い口數の少ないぶつきら棒だ。

「お神サンが居なくなつて淋しくなつたね」

「淋しうおまつせ」

「病氣は何やらだつたね」

「脊髓だした」

「永らく煩つたかね」

「三月許り」

といつて暫くしてから、

「別府の溫泉で死にやはりました」
といふ。根掘り葉掘り問うた末、漸く、藏の梯子から落ちて腰を打つて其から脊髓病になつて別府の溫泉に三月許り湯治をしてゐたが、終に歸ることも出來ぬ程の重體となつて其處で死んだといふ事がわかる。
「さういふわけだと其當時隨分あとが困つたらう。おたかサンはどうかね。お神サンのあとつぎが出來さうかね」
お梅ドンは笑つてゐて何ともいはぬ。
「此のお汁はまづいな。お神サンは料理が上手であつた。こんなまづいお汁なんかは食はさなかつた。これはおたかサンの料理かい。これはまづい」
と散々にくさしてやる。お梅ドンは相變らずだまつて居る。
「ねえお梅ドン。今ではおたかサンが帳場も臺所もやつてゐると聞いたがさうかね。おたかサンは商賣に熱心かね。熱心で無けりや困るわけだが實際熱心かね」
「はア熱心だす」
とお梅ドンは簡單な返辭をして、
「おぶかけまつか」

と片手に茶碗を乘せた盆を持つて、片手に土瓶を上げてのろりと人の顏を見る。
「夫婦中はどうかね。亭主は僕は見た事が無いがおとなしい人かね。おたかサンは幾つやらになつたね。こーつと此前來た時が十八であつたのだから。さうか二十三か。亭主の方はいくつ?」
と茶漬を掻き込みながら疊みかけて聞く。お梅ドンは相變らずだまつてゐる許りで取り合はぬ。
「實はねお梅ドン、斯ういふ事を東京で聞いたのだ」
と委細を話して、
「是非行つて慰めてやり玉へ、とまでいはれたので、其爲わざ〳〵來たやうなわけだが、扨て來て見ると非常な相違で少々つまゝれ氣味なのだ。全體どうした間違ひなのだらう。何かさういふ事が少しでもあつたのかね。第一おたかサンが色を青くして鬱ぎ込んでゐるのを見たといつたのだが」
「其は身もちであつた爲だすやろ」
とお梅ドンは初めて明快な答へを與へる。
翌日は朝八時頃迄朝寢をして、お藤ドン（下女）のお給仕で朝飯を掻き込みながら此地の用事をいろ〳〵考へ出す。飯が濟むと早速車を命じて表に出る。出がけにおたかサンは居ないかと帳

場を見る。居ない。亭主らしい男も居ない。昨日見た若い番頭が頭を兩手で支へて新聞を讀んで居る。今朝顔を洗ふ時から氣をつけて居るがおたかサンは影も見えぬ。聲も聞えぬ。此日は夜遲く歸ると帳場にはお梅ドンが眠むさうな目をして待つてゐてくれた。

三日目もおたかサンの姿が見えぬ。

廊下を隔てゝ余の部屋と向ひ合つてゐる部屋は客室では無いやうだ。手を拍いても返辭が無いので重ねて荒々しく手を拍いたら此部屋から人が出る氣配がして、其草履の音が梯子段の下に消えたと思つたら程なくお藤ドンがやつて來た。

「お梅ドンが見えぬがどうかしたのかね」

「臺所をしてゐやはります」

「ハヽアお梅ドンがお料理の方をするのかそれで御寮人サンは」

「齒がいたいというてもう一週間も寢てゐやはります」

「それでも此間一寸來たぜ」

「あの時は齒醫者に行く序だしたんや」

「子供は」

「お乳母サン任せだす」

「氣樂だナア、隨分客があるやうだが寢てゐられりや結構だ」

お藤ドンはまだ何かいひたさうな口を無理につぐんで歸つて行つた。

向うの部屋では碁が始まつてゐるやうだ。其に時々若々しい女の笑ひ聲も聞える。此日は殊に此部屋に人の出這入りが多いやうだ。

晝前に出かけて夜に入つて歸る。寢ながらけふお藤ドンの話した事を思ひ出す。いくら齒がいたくても一週間も寢てゐるのは呑氣過ぎると思ふ。お梅ドンが料理をするのであつたら此間お汁の惡口をあんなにお梅ドンの前でいふのでは無かつたと氣の毒に思ふ。

翌朝異樣な物音で目が覺めた。何物かゞ段梯子から落つこちた音で同時に皿や茶碗の壞れた音がする。つゞいて人々が驅けつける氣配である。

「お藤ドンか、怪我せえへなんだか」

「氣分が惡いか、水を酌んで來てあげうか」

「えらい音やつたナ、お藤ドンの大きな體が落ちたんやさかい其りや其筈や」

「サア立ち〳〵。立てんか。腰をうつたか」

「そら打つたやろ、何でも大分上から落ちたやうな音やつた」
「うつかりして上つてるとひよつと踏み外づすものや。氣をつけんとえらい怪我をしまつせ」
「皿や茶碗の粉けを踏まんやうにしなはれ、又其れを踏んで怪我すると事や」
お藤ドンはウン〳〵と唸つて居るやうだ。其れを取り圍んで番頭や他の女中や客人などは呑氣な事をいつて居る。
「彦ドン、お藤ドンを起こしてやりなはれ。いつまでもそこにゐたてゝ仕様がない、あちらへいて少し休みなはれ」
これはお梅ドンの聲だ。
「サアお藤ドン立ち、わたいの肩につかまり。そや〳〵、ア、重いこつちやー
これは番頭の聲だ。
「お藤ドンが笑ろてる」
と一人の女中が頓狂な聲を出すと皆ドッと笑ふ。
「ひどい怪我やなうて好かつた。あれなら向ふ臑を磨りむいただけやろ」
「お梅ドン此あとを早く掃除せんとあぶないで。茶碗がこまかう〳〵粉けてるがな」
多勢のものはお藤ドンについて行つたらしくあとには二人許りの客人の聲がした許りであつた

が、其も其々部屋に歸つたらしい。其あとで瀬戸物の壞れたのを掃き集める音がする。お梅ドンの襷をかけて長い腕を出して掃除をしてゐる樣が想像される。
向うの部屋は朝の間は靜かであつたが程なく又騷々しくなる。今日は彦ドンの聲もする。碁の音も昨日の通り聞える。其隣の部屋を掃除してゐる一人の女中が、
「彦ドン、朝から八番に這入つて何してゐなはる。ラムプ掃除もせいでづぼらしてゐてもえゝのか」
態と大きな聲をしてドタ〳〵と箒を使つて居る。彦ドンは始終此部屋で縫物をしてゐるらしい他の一人の女中と聲を合はしてくす〳〵と笑つて居る。
「彦ドン、僕の靴磨いといてンか」
「いつお出なはる。ラムプ掃除がすんだらすぐ磨きまほ」
「ア、急ぎやしない、今日はどうしても松木君におごらさんならん、どうや松木君、今度は中押(なか)やらう」
此の日もおたかサンの聲を聞かなんだ。
翌日は向うの部屋も珍らしく靜かでよく喋舌る隣の部屋の客人も立つてしまつた。隣の客許り

でなく此間からの暴風模様に乘船を見合はして逗留して居つた客が皆今日の天氣に立つてしまつたやうだ。晝飯の給仕にお梅ドンが來てゆつくりと腰を据ゑて話し込む。其話で斯ういふ事がわかる。

東京で聞いた噂は全く根が無い事でも無かつたのだ。といふのは元來此うちには息子が二人あるので、其二人の女房にする積りで死んだ神サンがおたかサンとお光サンの二人を貰ひ受けて世話して居つた。お光サンはおたかサンより五ツも年下だから無論兄の方におたかサン、弟の方にお光サンといふ心積りであつたが、お神サンが死んで後、兄の方はおたかサンを嫌つてお光サンの方で無けりや厭やだといひ出した。此兄の方は道樂ものでおたかサンもお光サンも嫌つて居つたのだからおたかサンは却て仕合せなのだが災難はお光サンだ。餘程厭やらしかつたがもと〳〵素直な娘であつたので終に結婚をした。そこで嫂であるべき筈であつたおたかサンの方が却て弟嫁となつて、其弟夫婦が此商賣の方をやつて兄夫婦は神戸で別の商賣をやつてゐる。それでお光サンの方にも一人子供が出來、おたかサンの方にも一人出來、今では兩方共中よく暮らして居る。斯ういふわけであつたのが誤り傳へられて、東京で聞いたやうな噂になつたらしい。

「そこで其弟といふのは兄サンと違つて大人しいのかね」

「大人しうおます」

「年はおたかサンより下なのか」

「一つ下だす」

「それでは噂天下といふわけだな。おたかサン萬歳だな」

お梅ドンは笑つて居る。

「そこで親爺サンはどうしたかね」

「お神サンが亡うなつた年の暮若い〳〵のを貰やはつたんだつせ」

「ハヽアそして此處にはゐないのか」

「別にゐやはります」

「さうすると此處はおたかサン夫婦のものだね」

「やつぱりおとつさんのもので、今の處借りて遣つてやはるやうなものだす」

何だか混雜した家庭らしい。序にお梅ドンに向うの部屋には誰が居るのかと聞いて見たら、お梅ドンは御座敷の明いて居る時だけうちのものが居ますと簡單に答へた。

翌朝お藤ドンが來た。

「怪我はどうだつた」

と聞くと顔を赤くしてだまつてゐる。余は新聞を受取つて題目だけをひろひ讀みしながら、

「今日は大變靜かだね」

といふと、

「今朝は十二番サンも立ちやはつたので旦那お一人ぎりだす」

といふ。

「それでは暇だね。マア話して行きたまへ」

「おほきに」

と茶盆を引き寄せて新らしく茶を入れてくれる。

「きのふお前の怪我をした時にも御寮人様の聲がしなかつたやうだが、まだ寢てゐるの」

「ハア」

「大變な齒痛と見えるね。其とも不精でなまけてゐるのかね」

お藤ドンは意味ありげに余の顔を見て、

「お梅ドンが何ぞこぼしてゐやはりましたか」

と聞く。お梅ドンの口からは何も不平を聞かぬ。併し余は、

「ウン」

と首を縱に振つて見せる。

「さうだすやろ。お梅ドンがあるので此家は持つてゐるのだつせ」

「さうだらうとも」

「外の女中衆もお梅ドンがあるので辛抱して居るのだつせ。御寮人サンは齒ばつかりやおまへん。何とかいうては朝寢をしたり出歩いたりしてちつとも商賣に身が入りませんのん。其でちつとも傭人に情が無いのですもの。私がこれで三年許り續けて居る許りで、他の女中衆は皆半年とは續きやしまへん。旦那だつか。旦那も毎日やらこい着物を着てぞべ〳〵と出歩いて許りゐやはりますがな。ほんまだつせ。只お梅ドンがナア、あんなに無愛想でゐて心がやさしいわかつた人やさかいに陰日向になつて私等もかばつてくりやはるし、自分の事のやうにして働かはるので此家の爲にもなりますし、お梅ドンが無かつたら疾うにもう廢業してる處だつせ」

とお藤ドンはだん〳〵毒舌を振つて來る。お梅ドンは二十年一日の如く忠實に働いてゐるので已に其人柄はわかつてゐたが、そんなに此家の柱石であるといふ事ははじめて知る。

「それでもナア旦那、お梅ドンにも一寸面白い話がありまんのや」

「どんな話が？」

「あんたはんお梅ドンにいやはるからやめや」

「いつていけなけりやいはない」
「それでも止めまひよ」
「そんな人の惡い奴があるか、いひかけて置いてじらすのはひどい」
「そんならいひまんがナ、きつとお梅ドンにはいひなはんな」
といつてニヤ〳〵笑ひながら、
「前の御寮人サンが死なはつてから親旦那の後添ひサンの話が起つた時、お梅ドンにナアちつとは氣がありましたんです。それが今の御寮人サンが出來てから一時はナアお梅ドンの機嫌が惡うて、お暇を貰ふやうにいうてゐやはつたが、此頃はもうそんな事は少しも根にもたいでもとの通り親切に働いてやはります」
としまひには又眞面目な顏をしてお梅ドンをほめる。
あのお梅ドンにそんな色話があるのは失笑を禁じ得ない。併しすぐ其怨を忘れてもとの忠實な老婢に戻つたのは感心だと思ふ。

松の木の枯れた、障子の古びた、玄關の沓脫ぎに水の打つて無い、帳場に老實な番頭の見えぬ、向うの部屋のだらしが無く騷々しい此宿の消息が、どうやら日を追うて判明して來る。齒痛で一

週間も寢て居るおたかサンの境遇も曲折の多いものゝやうに考へられて來る。
翌日はもう此地の用事は無くなつたが雨で立つ勇氣もない。お梅ドンに文樂座に行かうといふとだまつて居る。おたかサンも齒痛がまぎれるかも知れん、三人で一緒に行かうぢやないかといふと、客の居ない隣の部屋の襖を開け放してそちらへ掃除に行く。行かうとも行かぬともいはぬ。例の通りのつそりしたものだ。昨日のお藤ドンの話を思ひ出して竹細工のやうなお梅ドンの長い手足を見て居ると興が深い。
お梅ドンはゆつくりと隣の間を掃除してしまつてから、
「一寸たんねて來ますわ」
と初めて挨拶をして下りて行つた。暫くしてお藤ドンが來て、お梅ドンは支度をして下で待つてゐます、といふ。
余も羽織を引つかけて下りて行つて見るとお梅ドンは矢張り桁丈のつまつた小さつぱりした着物を着て玄關に立つて居る。縱から見ても横から見ても宿屋の女中に相違無い。
「おたかサンは」
と聞くと、
「まだ齒痛が癒ほらんさかい」

といつて濟まして居る。おたかサンに話したら齒痛が癒ほらんからよう行かぬといつたのか、まだ齒痛が癒ほらんから話しても無駄だと思つて話さなかつたのか、其邊が少しも要領を得ぬ。此前三人で博覽會に行つた時とは大變趣を異にして居る。

文樂座で忠臣藏を聽く。四段目の津太夫に聽き惚れて紋十郎の由良之助に見惚れて居ると、後ろですゝり泣く聲がする。お梅ドンが泣いて居るのだ。

「お前義太夫が好きかい」

と聞くと、

「はあ好きだす」

といふ。五段目も六段目も七段目もお梅ドンは泣き通しだ。茶屋場の掛合が濟んでから表に出て直ぐ近處の天麩羅屋で晩飯を食ふ。お梅ドンの前の盃はいつ見ても空だ、なかなかいける口と見える。それでも十杯許りで目の緣を少し赤くしてもう飲まぬと盃をふせてしまふ。併しいつもよりは少し能辯で、問はず語りに斯んな話をして聽かす。

若い後添ひを貰つて別居してゐる親爺は何もせずに只遊んで居る。其れで此頃は二三十萬の金持になつて福々として居る。其わけはどういふわけだか充分にわからぬが何でも或後家サンか何かの世話をして居つた處、其後家サンが中風になつて、口もきけねば手も動かん、外に身内が無

いので其財産をすつかり親爺の手に預つたのだといふ評判ださうな。何にせよ二三十萬の俄分限になつたのは事實で、神戸の長男夫婦は固よりこちらの次男夫婦もこれを知つて居る爲かあまり仕事に勉强しない。宿屋も止めるわけにも行かぬからまアやつて居る位のことで、おたかサン夫婦とも少しの熱心も無い。自分ももとのお神サンの七年が濟んだら暇を貰ふ積りで居る。といふやうな話であつた。

何故おたかサンなどが商賣に氣乘りがせぬのかといふ事がこれですつかりわかつた。おたかサンなどは恐ろしい渦の上に乘つて居る椿の花のやうな境遇であるわい、と醉の廻つた頭にも哀れを覺える。

枯れた松の木、古びた障子、取散らした沓脫ぎ、人の居ない帳場、もう其等許りでは無い、破れた上草履、用を爲さん電鈴、返辭の遲い下女、粗末な茶、粗末な菓子、何も彼も一々合點が行く。一々明瞭な意味が讀める。

翌日はいゝ天氣だ。此のなつかしかつた、さうして今はなつかしいといふよりも寧ろもの哀れに覺える此宿を今日愈ゝ見棄てる事にする。

彼の赤い軒ラムプの下で簡單な荷物を股に夾んで例の塵取のやうな車に乘る。お梅ドンもお藤

ドンも彦ドンも他の女中も皆車を取卷いて、
「左様なら」
「御機嫌よう」
と口々に挨拶する。車夫が梶棒を上げた時カラ〳〵と下駄の齒を鳴らして驅けて來たのはおたかサンだ。
「旦那お歸りだつか。御機嫌よう」
と生き〳〵とした顏に黑く染めた美しい齒を光らして梶棒のすぐ傍に立つ。車夫がかまはずに引き出した時、
「お縫孃サンに宜しう」
と後ろから追ふやうに附け加へた。塵取車はかまはずにがらがらと驅ける。

（明治四十年七月）

女易者

今は夜が更け客も殘り少なくなつて少し心細くなりたれど、白賁子はなほぐびり〳〵と飲み乍ら、「時に君はきつと長生きをするよ」とだしぬけにいふ。それは何ういふわけかと聞けば、「ほうれいが深くつて眉が眼より長いものは長生をするに極つてゐる。ほうれいの深いばかり、又眉の眼より長いばかりでは、或は長命或は短命どちらともつかぬが兩方揃うたものは疑ひなしである。但しほうれいとばかりにては君にわかるまい。ほうれいとは鼻の横の筋の事さ」
「君は中々人相學者だ」と感心すれば、「なに僕は學者といふわけでは無い。唯平常から多少心掛けてゐるが百人が九十九人迄的中するね。其の證據には遊就館に行つて、打死した軍人の澤山の肖像があるのを見玉へ。悉くほうれいが淺くつて眉が短い」
「成程〳〵」と感心すれば、「まだある」と白賁子は愈〻得意にて、「頭の禿げた人は辛抱强い、眉のくつゝいた人は氣が短い」「成程」「耳の大きい人は運が善い」「成程〳〵」「頭の……」といつ果つべしとも見えざれば、「よし〳〵君の人相は悉く的中する、それは悉く的中するとして置

いて、時に何時かも話した、何所かの易者に何か見て貰ひに行くことゝしてはどうであらう」と話を轉ずれば、「成程そいつも面白からう、サア行かう〳〵」と白賁子は早や立上る。

いつもの辻の賣卜先生は髯の埃迄見慣れてをかしくなければ、あの路地の入口に周易の看板の出てゐる所と尋ね行く。「もし〳〵易者さんはこの奥ですか」と路地口の煙草屋で聞けば、「ハイそれを這入つて左側の一番奥のうちです」と美しき娘の教へ呉るゝに嬉しく白賁子はいりもせぬ煙草を買ふ。扨て其路地に這入れば街燈一つ點れるにもあらず、時は已に十時を過ぎたれば兩側の家悉く雨戸を鎖して光の漏るゝうちも無く、眞暗らにて何が何やらわからず、泥溝板を踏み外したる物音に何處かの犬の吠え出したる心細さ。此時右側の家の雨戸一尺程開きて光を背に細君らしき人こなたを覗ひ、「何處をお尋ねなさるのですか」と親切なる口つきに、「實は易者さんのうちを尋ねてゐまする、何處かこのあたりでは」と聞けば、「右へ筋向うの家がさうですが唯今風呂に入らつしやいました」とのこと。

「どうも有難う、誠にお邪魔樣でした」と表へ出て、少し間の抜けた調子、寒い風に醉も醒めさうなり。「おゝ寒い風今晩の辻占は宜しくないさうな」と兩人佇める所へ、「おや白賁さんに小來さんぢやありませんか」とはいつものおばさんなり。「おやおばさんよい所へ、何處か此邊に易者はありませんか」と聞けばおばさんは眼を丸くして返辭なし。實はかう〳〵いふわけでと委細

を解き明かせば、「相變らず物好きな白賁さんや小來さんぢやこと、まアうちへお出でなさい」と直ぐ近所の家へ伴はれて長火鉢を取り圍み酌んで呉れる濃茶に喉を濕しつゝ、「どこかこの近所にありませぬか」と疊みかけて聞けばすぐその横町に女易者があるとのこと、「それは愈〻妙だ、サア行かう〳〵」と白賁子の鼻息あらく、「おばさんも是非一緒に行つて下さらぬか」とすこしあきれ貌なるを無理に誘ひ出して行く。

「おやもう爰も寢てゐる。もし〳〵一寸物をお尋ね申しまする。占をなさるおうちは御宅では御座りませぬか」と優しきおばさんの聲にてトン〳〵と表を叩けば、「ハイ」と五十位の女の聲して「ハイ直ぐ明けます」と樞を外す音。

「どうもおやすみの所を」といへば、「なにまだ起きてゐます。どうぞお上りなすつて」と戸を開けたる人は五十過ぎと見ゆ、使つてゐる婆樣にもや。

四疊の上り口にかしこまれば、直ぐ其處の敷居を隔てゝ机あり、其傍に算木あり、其の後ろに引き廻したる屏風には數多の張り交ぜあるが中に「雲鶴、松塘釣史」と書かれたる行書殊に目立ちて見ゆ。右側の壁の下には黄金丹といふ藥の看板もたしかけありて其處には簞笥と並び置かれたる本箱あり、其蓋に T. Oishi と羅馬字にて認めあり。

例の婆樣は三人の前に火鉢一つ出したれど火の氣なく其の角にマッチ載せあり。

この時オホン〳〵と咳拂ひ二つして、髪は束髪にて被布を著たる、顏の色青白く痩せて細長き、三十前後と見ゆる女屏風のうちより現れ出で悠然と机の前に坐る。「お二人とも私の心安い方で」とおばさんの引合せすんで兩人お辭儀をすれば、輕く會釋して、「前へおすゝみなさい」

此の一言に白賁子と余とは「まア君すゝみ玉へ」「マア君すゝみ玉へ」と大にしよげる。

白賁子終におそる〳〵出てかしこまる。

「身の上ですか」

「一つ緣談を」

「年は」

「三十五」

机の抽斗を開けて暦の古いやうなものを取り出して見る。「ハヽア三十五は丑歳ですな。女の方は」

白賁子すこしまごつきて、「女の方はわからないのです、……はつきりわからないのです」

「マア略〻いくつ位」

「二十四五だといふのですけれど」

恭しく筮竹をひねる。机の上には一冊の周易も置かず、唯算木許りなり。終つて又例の机の抽

斗を開け暦の古いやうなものを取出し見る。「爻は雷が水中に住むといふので、心の住居は定まらぬ形である。併し當年春からこのかたむきは宜しい方である。緣談はよろしい。新暦で來年一月一杯に整へた方がよい。併し女の年は二十四五では善くない。六七ならばよい」

「廿四五がいけなければ其れから下になると何んなものでせう、十九か廿一あたりでは何んなものでせうか」

「十九、二十、廿一廿二はよろしい。廿四五のうちで無ければ直ぐお極めになつて宜しい。……あなたは身内に緣が薄い、又住居に取つて難みがあるやうですが、何か急に緣談の極まらぬ事でも」

「お話の通り私は早速極めたいと思つてゐましても少し親族中に故障が出來まして」

女易者は少し微笑を含みて、「早速にお極めなすつてよろしい」

「成程、へー、それでは早速。……そこで最一つお願ひ申したいのは唯今遣りかけた仕事が一つあるのですが、それが旨く纏まるか纏まらぬかをどうか」女易者は再び筮竹を捻る。例の暦の如きものを見る。

「結果は宜しけれども長びく形である。百姓ならば雨乞をして居る形である。併し充分お進みになつて宜しい。年も月も宜しい。唯結果は時を待たんければ仕方が無い。あなたの運氣は昨年か

ら今年へかけて宜しい方であります」

これにて白貴子は丁寧に辭儀をして下る。余はお次の番だよと前へ出る。

「私は今朝物が無くなつたのですがな」

「ハヽァうせものですな」

「今朝手水をつかふ迄は本箱の上にたしかにあつたのが、其後食事をして座敷へ來て見ますとも う無くなつて居たのです。何うも不思議でたまらずいろ〳〵探しましても何處にも見當りません ので」

「年はいくつ」

「二十六」

「戌の年ですな」

サラ〳〵〳〵パチ〳〵〳〵

「其品物は艮の方に當つて有る。敷居より外へは出ぬ形である。何か艮の方に心覺えはありませ んか」

「艮の方に丁度押入れがありますので其處は今朝もいろ〳〵探しましたが」

「尙ほ克く探して御覽なさい。正しく敷居より外へは出ぬ形である。……若し他人に關係がある

ならば廿八九歳の女であるが、併し十に九迄は他人の手には渡つてゐない形である。何か女に心 當りはありませんか」

「十四五の下女は一人居りますが、其他には」

「他人の手には渡つてゐない形であります。艮の方は床より下の方をよく探して御覽なさい」

余も一禮して下る。「おばさんお序に如何です」といへば、「お序に一つ見て貰ひませうか。や つとこな」と前に出る。

「あなたは」

「身の上を一つ」

「年は」

「五十八」

ガチャ〳〵パチ〳〵〳〵

「運氣は惡くないが、新規の事に進むのは惡いです」

「新しく下女を一人入れようかと存じてゐますが、それは如何なもので御座いませう。それが爲 うちがもめるやうなことは」

「左樣なことはありません」

「相性はどんなものでせうか。オホ、、この年になつて相性でもありますまいが」。
「男の方は」
「七十二になります」
この時子供の泣聲するに皆興醒めてあれば、誕生許りなる子と覺しく、胎毒のしたゝか吹き出でたるが屏風の後より這ひ出づ。「アーン〈〈〈〈」「七十二に五十八なれば……」「アーン〈〈」
「一白に四綠」「アーン〈〈〈〈」「騷々しいですよ」
「一白に四綠で別に惡いことはありません」
「アーン〈〈〈〈」
「騷々しいです」
一座甚だしらけて見えたれば、おばさんも是迄なりと、「どうも有難う」と引き下る。「代はいくらほど」と尋ぬるに、「一件拾錢」とのことなり。四拾錢だけ火鉢の傍に置いて、「まことに夜更けて上りまして」と挨拶してまからうとすれば、「これは先祖代々當家にて配劑し廣く世上に施し居る黃金丹の功能書きであります。一枚づつ御持ち歸りあつてよろしい」と印刷したる物三枚くれるを受取りて表へ出づ。最前迄曇つてゐたる空全く晴れて星きら〈〈と光るを、おう寒い寒いと通りへ出る。「ママ白賣さんや小來さんのよくまア あんなにしらばつくれて、あたしやをかしくつて辛抱がしきれなんだ」とおばさんも笑へば皆も笑ひ、「全體あれは何うした女です」と聞けば、「あの五十許りの女の人はあの人のお母さんで、亭主はどこかに勤めてゐる人ぢやさうな。我儘者で朝寢坊で、お母さんを下女みたやうに使ふといふ事ぢや。あの子がまだ生れぬ時分、大きなお腹をしてこゝの風呂へ來て、大勢人のゐるまん中でつるりと眞仰けに轉ろんだことがありましたつけ。ホ、、、」「ハ、、、、」「ハ、、、、」と笑ひて、白賣子「どうもさういふ人相だとおもつた」

（明治三十二年十一月）

百八の鐘

上野の百八の鐘が鳴る間歩いて來ようと内を出た。

お茶の水を渡つて、順天堂の前を通る時ゴーンと一つ打つた。余はヨイショと一歩高く地を踏んで少し仰向いて星のきら〳〵する空を見上げて明治三十二年といふ老人が大地中に葬むられ、明治卅三年といふ青年が大空から降りて來るこの瞬間の光景を見ようと勉めた。

病院は流石にひつそりしてゐる。竹町あたりの空には燈火の光りがうつつてゐる。うしろから車が一臺來た。すこし阪になつてゐるので車夫は體を俯伏すやうにして、肱を後ろに突き出すやうにして喘ぎ〳〵車を挽いてゐる。車上の客は書生のやうだ。「オイ車屋まだ床屋は起きてゐるだらうか」「起きてゐますとも旦那、今夜は夜ッぴてでサア」これが余の耳に響いた明治卅三年の始めての聲である。

江知勝や若竹あたりはまだ晝の如しで、下駄屋の前には澤山の下駄の臺木を積み重ねて其れに其家號を書いた澤山の提灯を突きさしてゐる。店には六組程の客がゐる。ラムプの明るい光りで

亭主の圓らな白眼勝ちの眼がキョロ〳〵と恐ろしく見える。吾妻コートを著た品のよい素敵な美人が「毎度有難う」といふ聲に送られて今出て行つた。

若竹は門の片方を開けて大きな若竹と書いた臺提灯を出してゐる。蕎麥屋の男が一人、夥しい蕎麥を荷つて今其處に這入つた。

其蕎麥屋を目送してゐた交番の巡査はこの時片方の靴の踵でキリ、ッと回轉して、交番の中にゐる巡査に笑ひかけて何か話をした。

粟餅屋の前に並んでゐる露店は皆古著屋である。古著屋では「おいくらか我慢して下さい、今日の事ですから」と古著をひつくりかへし乍ら主の女は客の顏を熱心に見つめてゐる。客といふのは六十過ぎの肥え太つた婆樣で、皺涸聲の恐ろしい見幕である。「充分にふんでゐるよ、今夜のお金はおめー常たァ違はァネ、まからなきやァよす分の事サ」「それぢやァお神さん札が切れるからネ、もう一貫だけ我慢して下さい」其隣りの古著屋では「紋は縫紋です。一寸御召しになつた許りです。へー」などとぼろ〳〵になつた縮緬の羽織を丸髷の神さんにすゝめてゐる。

又其隣りでは二十二三の職人體の男が懷手のまゝ腹卷きから金を握り出して「あした惡かつても仕方が無いや」と壹圓何がしの拂をすると、顏の光つた亭主は澄ました者で、「あした惡い樣なものは賣りません。どなたがお見なすッても袖はケンチウ、胴はメンネル、襟は八丈とチャー

ンと極つてゐます」などと無駄をいつてゐる。

書生の時分懇意であつた菊坂の質屋を思ひ出して、今夜の質屋の光景は定めて面白いであらうと這入つて見た。ランプを明るく點して多くの番頭は各三四人の客を引受けて居る。其處に山の如く積んである澁紙包みは今夜の入質であらう。

時計は今零時四十分である。百八の鐘はまだ鳴つて居る。

「三兩の帶を出してお呉れな」「これで一兩二分借して呉んな」「七圓だけ借して呉れ玉へ、君ア殘酷でいかん。君の方がえゝ。君七圓借して呉れ玉へな」「あのチョイト番頭さん、いつかの指輪は五圓で入れましたつけね、あれでもう三圓借して下さいな。八圓の値打はありまさァネ」「屹度流しやしない。藪入迄にやア屹度出す。二圓だけ是非借して貰はにやア困る」などと口々に罵つて居る。

此時表の戸がガラリと開いて暫く首だけ突込んで樣子を窺つて居る細君がある。番頭が氣を利かして「何かお出しになるんですか」と高く呼んだので、「マア大變な人ネ、もつとして來ようかしら」と言ひ乍ら這入つて來た廿七八の細君は身分のある人らしい。「若しお出しになるんなら早く伺ふときませんと、大分時間が取れますから」「サウ、あとの月の帶ネ、あれとこの春の腹合せ帶も出して下さいナ。それから七子の羽織も著物も。……男帶はいゝのヨ。……それぢや

ア何時頃に來ればいゝの」「二時半頃にどうか」「それぢやア、どうかネ」と逃げるが如く去つた。表へ出て足音が二人になつたのは大方大きな包を持つてゐる下女が戸口に待つてゐたので、二時半頃に下女は再び此荷物を持つて爰所迄奥樣に屆いて來るのであらう、而して其大きな包はあとの月の帶と腹合せの帶と七子の羽織と著物との身代りになるのであらう。

出質に斯の如く時間が取れるのは大概の質屋は其品物を更に他の大きな質屋へ預けて比較的安い利で金を借りるので、いはゞ利子の鞘を取るわけなので、客が質を出しに來ると小僧は裏門から大きな質店へ其品物を取りに行くのである。時間が取れるのは其の爲だ。

細君に引き違へて這入つて來た二人連の書生はいきなり其羽織を脫いで、「オイ借して呉れ」「おいくらです」「いくら借すんだ」「壹圓五拾錢が高々です」「それでいい」と、忽ち壹圓五拾錢を握つて出ていつた。

「また來たヨ」と頓狂な聲をして這入つて來たのは半纏で子供を負つた、四十過ぎの女である。其の負ぶつてゐる子供はダラリと首を横に垂れて眠つてゐる。「これで三十錢借しておくれな」「三十錢は駄目だ、二十錢位なものだ」「ソンナ事言はないでお借しよう、……さつき無いと言つた通ひはあつたよ、簞笥の向うに落ちて居たよ」と帶の間から通帳を出し乍ら、「サアこれにさつきの三十錢と、今度も三十錢とお附よう。いゝぢや無いカネ、お前さん、いつか三十錢附け

た事があるヂャ無いカネ」

「壹圓五十錢渡邊サン、おつけなすつて下さい。……女帶二つ」「大包の近所に在る行李を持つてお出で」といふ番頭の聲と、銀貨をものに打ち附けるチーンといふ音とが耳立つて聞えるやうになつて、客は大方歸り去つて、跡に殘つてゐるのは僅に二人となつた。それ等は皆一時間許りも例の出質を待つて居て、まだ小僧が歸つて來ぬので退屈してゐる連中である。「ア、退屈だ、まだ三四十分も間がある、弱つてしもうナー、勸工場でも一廻りして來ようか」と其中の一人は出て行つた。靜かになつた爲め鐘の音が聞こえる。百八の鐘はまだ鳴つてゐるのだ。時計は一時だ。「オイ番頭さん、客は何時頃迄あるかネ」と聞くと、「左樣さネ、昨年迄の經驗では三時から三時半迄ですネ、それから店をメめて今日の勘定をして、勘定が濟むのが明日の朝の八時頃になります。それから湯に入つて歸つてお雜煮を祝つてやつと寢るのが十時頃ですが、間が惡いとお禮客に來られて寢る事が出來ないこともあります」

「一體暮には出質が多いか、入質が多いカネ」と又聞くと「左樣サネ、これも昨年迄の經驗では出質の方が多かつたのですが、今年はどうも入質の方が多いやうです」といふ。「サウカ、それは全體何ういふわけであらう」「左樣サネ……」と同じ冒頭で說明にかゝらうとした時、五六人同時にどや〳〵と客が這入つて來て、又續け樣に四五人這入つて來て再び混雜を始めて來た。余

は質屋を出た。

鐘はまだ鳴つてゐる。

勸工場の前の屋臺は「Forien restaurant 手輕西洋料理、巴里軒」と怪しい字で書いてある。三四人の書生が首を突込んで居る。

勸工場に這入つて見た。客はまだぞろ〳〵と出這入りしてゐる。ある店の番人はラムプの油を見て、「油をつがんならんでせうな。今が一時位のものでせうな」と隣の店の番人に話しかけた。「去年はつがなかつたが、三時にはまだ二時間ありますから今年はつがんならんでせう」と隣の店の番人は返辭をした。

勸工場を出た。

元富士見町の兩側はずらりと露店だ。皿屋がある。五枚三錢といふ馬鹿に廉い皿を二錢にねぎつて居る客がある。皿屋は十枚四錢五厘迄にまけて大まけにまけて仕舞はうといふ。客が「貴樣も中々賣り上手だ」といへば、皿屋は「あなたも中々買ひ上手だ」と鸚鵡返しをいふ。「五枚二錢にして置け、それなら十枚買つてやらう」といつて客が行き過ぎようとするのを、皿屋は「まけとけ〳〵〳〵」と騷々しくまける。先刻からこの二人の談判を傍觀してゐた官員樣の細君らしいお高祖頭巾を著た若い奧樣「ほんとうに調法ネー」と下女を顧みる。下女は眠むさうな目附き

をして「さうですネー」といふ。「私もそれぢやア五枚だけ買つて置きませう」と奥様は帶の間から財布を出して二錢を拂つて行つた。

花屋がある。梅の植木鉢を二十五錢に値ぎつた客がある。「エーイ仕舞だ、まけとけ」と花屋は手を打つてゐる。客の伴れは「そいつは廉い、たゞより廉い、禮をいはんだけやすいや」とすこし醉つてゐるやうである。

手袋屋がある。靴を穿いて藍色のモンパの首卷をしてゐる田舍者が「これはいくら」と或手袋の値を聞いた。手袋屋は「三十錢です」と返答をした。「あがりましたナー」と田舍者は驚いてゐた。

尺八屋もある。古道具屋もある。餅屋もある。飾りや門松を賣つてゐる店もある。帽子屋もある。古著屋もある。

湯島の天神への曲り角の床屋の時計が今丁度一時半である。鐘はまだ鳴つてゐる。

湯島の天神は流石に淋しい。「奉納、三遊亭圓遊」と書かれた街燈が纔に鍔口の紐を照らしてゐる許りでいかにも淋しい。其横手の共同椅子には二重廻しを著た人が二人腰かけてゐる。他の一つの腰掛には双子織りの羽織を著た職人體の男が前後も知らぬ様に寢てゐる。

犬がのそ〳〵と暗闇の中を行き過ぎた。

下町の火の番の拍子木の音が手に取る様に聞こえる。

上野の電氣燈や、鈴木の時計臺の火や杉山勸工場の球燈などが見える。

淺草あたりにもところ〴〵に火が見える。併し流石は二時前だ。天地は自ら寂寥としてゐる。

男坂を下りて五軒町へ出て、ある酒屋の時計を見ると二時に十五分前である。寒さが身に入むやうである。後から清元をうたひつゝ來た車夫は「旦那まゐりませうか」と聲をかけた。余が應じなかつたので又清元をうたひ出した。

風呂屋には客がこんで居るやうである。

榛原の前に出て居る提灯の數はチョッと數へ切れぬ程である。

目鏡へ出た。ふと氣がつくともう鐘が鳴らぬ。丁度二時位であつたらう。

（明治三十三年一月）

牛肉屋

「いらつしやい」といふ下足番の筒の大きい聲を始めとして、「御新規お二人さん、なまで御酒だい」といふ尻の長い高調子「有難う、おはき物」「三十八番さんのお銚子おとまりになります」「お立ち、四十六番さん」「どうぞ又いらつして下さい」「毎度有難う」などいふ種々雜多の聲が錯綜して、チョッと聞くと電話の混線のやうだ。

もう夜の十一時前で長針が九時の所に居る。其時計の下に五六人の一團體がゐて皆餘程醉が廻つてゐるやうだ。

「山高水長」といふ額のかゝつてゐる下には三人の一團がある。「諏訪町の野郎えらいことをいやァがつたナ篦棒め、遠慮といふことを知らネーナ」「併し爰所で青筋立てゝもつまらネーヂャネーカ、マア一杯飲みネー」「一杯飲みネータッテ一杯有つた事ァねえぢアねえか。ウントつぎネー」

「此ハンケチを貰つて來たョ」と彼所には書生の一組がある。十七許りの澁皮のむけた女中は左の手の甲を腰に當てゝ腹が痛いといふやうな顏附きをし乍ら「ソー」と極めて無愛想な返辭をして、二三人集まつてゐる女中の溜りへ來て、「いけすか無い野郎だ」と舌打をする。

「オイ姉さん〳〵」パチ〳〵〳〵と一時に手が鳴る。「これを頂戴」「早くわり下を呉れ無いか、葱が黑焦げにならァネ」「正宗だョ〳〵」「是非お酌をして戴き度いネ」と妙な手つきをしてゐる客もある。

柱時計はいつの間にか十二時になつてゐる。「オヤもう十二時に五分前だ」「オイ姉さんお名殘惜いが會計だ」などいふ聲と、「有難うおはき物」「お立ちお三人樣」「五十二番さんですョ」などいふ聲が耳立つて聞えて來て、さうして其等の聲は悉く眠むさうな調子を帶びて來た。彼方にも此方にも正宗の瓶が林立して其中にビールの瓶が交つてゐたり、飯の殘つてゐるお櫃の上に牛鍋が下されて居たり、箸や、盃や、ビールのコップや、コヒーの茶碗や新香の皿やが散らばつてゐたりする。其れを眠むさうな女中は、チャラン、グワタンと今にも壞れさうな音をさして片づけ乍ら「チョッ人を馬鹿にして居らァ」と横眼でやゝ年のいつてゐる朋輩を睨みつけてゐる。此方に火鉢を拭うてゐる女中は鬢のほつれ毛をうるささうに搔き上げ乍ら「兒島さんもあんまりだワネーお妻さん、人の心も知らないでサ」「どうも御馳走樣」と客の居ぬ方の瓦斯を消してゐる女中は嫉ましさうに「アー〳〵あつちも只の一度でいゝからそんな事言つて見たいワ」座布團

16269

を積み重ねてゐる女中は「オヤお妻さん、そんな事は言はさないヨ、ソレ菅沼さんが呼んで居るヨ」菅沼さんといふのは、客が大方歸つた後で尙ほ悠然と生肉(なまみ)の一人前を誂へてゐる六十過ぎの爺さんである。お妻と呼ばれた女中が「いやなこッた」と身振ひするのを面白がつて、他の女中は一同にハッハ、、、、と笑つてゐる。耳の遠い菅沼さんは、彼等が何を笑つてゐるかを解し得ないで、大きな口を開けて牛肉の一切を大事さうに舌の上にのせ乍ら、やさしい眼で此方を見て

「お妻さんわり下をお呉れな」

(明治三十三年一月)

北清島町

上野の森の上に磨き上げたやうな秋の空が晴れ渡つて、白い堅い雲がところ〴〵にすこし許りある。廣小路から上野の山へさしかゝつた時はまだ一時に二十分前であつた。其處らあたりを見まはすと、蝙蝠傘をさした信玄袋を提げた四十近い神さんの三人連れが一人の汚ない子供を取卷いてゐるのがある。

其汚ない子供といふのは鼻の低い額の廣い鯨のやうな眼つきをしてゐる、五つか六つ位の男の子で、垢染みた双子の袷の筒ッポを著て、足ははだしでゐる。其小さい踵がいたいけに石ころを踏んで、

「一文やつて下さい」

と、ろくに廻らぬ舌を振りまはしてゐる所は一寸見にあはれ氣である。首から紐を下げて紐の尖に小さい木魚を二つぶら下げてゐる。

神さんの一人は、蝙蝠傘の柄を顎にはさんで、信玄袋の中から財布を出して、小錢を撰り出し

て、其乞食の子の小さいてのひらの中へ入れてやつた。三人の神さんが等しく笑貌で、この罪の無ささうな子供がどんな嬉しい貌をするであらうかと、待もうけて居たに係らず、子供は錢を握るや否や、いきなりこちらへ驅けて來た。

此時余より二三間離れた處で、

「おい俊坊、早くおいでよう……いくら貰つた〳〵」

といふ聲がした。見ると白雲頭の二つ位な兒をおぶつてゐる十三四許りの女の子で、まだ古びた「もうくは」の單衣を著て、帶も金巾のかたつきの、見るからが貧し氣な身なりではあるが、垢づいた貌の色も白く、髷にかけた赤いものも引立つて見える、どことなくまんざらの乞食ではなささうな。

俊坊は筒袖で横ッこすりをして、

「姉やん、おいら腹が空いちやッた。早く鰯えらうよう」

と姉の貌を見上げて、握つて居た小錢を突き出した。

「うるさい餓鬼だネー、腹がすいた〳〵ばッかり言つてやがらァ」

と其錢を受取つて、今石段を上りかけうとする双子の短い羽織を著た男に逸早く眼をつけた。

「それ、あすこへ」

といふ姉の言葉の終らぬ内に俊坊はとつとゝ驅け出していつた。

四つ許りの小さい乞食には一寸くれてやる氣になると見えて、其男も臺口を開けた。俊坊は錢を握るや否や、もとの如くすた〳〵と驅けて來た。

見ると俊坊姉弟は雁鍋の方へ下りかけてゐる。余は此儘に別れるのが惜いやうな氣がして跟いて行つた。

丁度今雁鍋から出て來た二人連れの男がある。

「一文やつて下さい、旦那一文……」

と俊坊は二人の貌を見上げ乍ら足にもつれるやうに二三間歩く。

「うるさい乞食だ」

「踏むぞ〳〵」

この二人は醉つてゐるので俊坊を相手にしさうにもない。其時一人の男の袂からはら〳〵と卷煙草が二三本飜れたのを俊坊は逸早く拾つてかけ出した。

二人は又連立つて停車場の方へ歩きかけた。二人の足は中々早い。姉の方はすた〳〵〳〵歩く、俊坊はすこし後れては小走りで追ひつく。いつしか停車場の前も通り過ぎて車坂町の方へ出た。余は四五間遲れて跟いて行きながら、あの人になぜ「一文やつて」をやらないのか、と思

ふやうな人に四五人行き會つたに係らず、彼等はもうそれ等に頓著なく、すた〳〵〳〵歩く。姉の背におぶさつてゐる坊主頭は、龜井戸の人形のやうに、兩方へ突き出してゐる手を、姉が歩く度にぶら〳〵させ乍ら、一方の手には俊坊が拾つた卷煙草を握つてゐる。

上野館といふ旅人宿の前の水菓子屋の店前に俊坊は立止つた。二厘錢を突き出して小さい柿を一つ買つた。俊坊がいきなり其に嚙りついた時、姉は早十間許り先を歩いて居て、余が跟いて行くのを不思議さうに振りかへつて見た。

姉が鐵道馬車のレールに添うて右へ曲つたのも知らずに俊坊は柿を食ひ乍らそろ〳〵と歩いてゐる。まだ頭はおかつぱさんで、二三日前後ろだけ剃りかけた月代が其儘にしてある。

柿を食つてしまつた俊坊は姉に走りついた。二人は今馬車道にそうて淺草の方へ行きつゝあるのである。姉は時々余が氣にかゝるので振りむく、余は相變らずついて歩いてゐる。二人の足はます〳〵早くなつた。俊坊は殆ど走つてゐるのである。

暫く行くと二人は柿店の前へ立どまつた。この柿店には椎の實の袋に入れたのも並べてあるので、姉は柿にせうか、椎の實にせうかと暫くためらつた樣子であつたが、終に一山五厘の柿に決めたらしい。

三つの柿の一つは俊坊へ、一つは姉の口へいきなり這入つたが、姉の肩越しに手を突き出して

ゐた坊主つ子も、今迄握つてゐた卷煙草を棄てゝ殘る一つの柿を受取つたのである。

又暫く行つて其處にかりん糖の店があるので、二人はいひ合はしたやうに立どまつた。併し今度は買はずに行き過ぎた。

電信棒に淺草區北清島町といふ札の打つてある處から彼等は左へまがつた。余も跟いて左へ曲ると驚いた。俊坊のやうな、俊坊の姉のやうなのが、多くは背に坊主頭をくゝりつけて、彼れ是れ打交り三十人許りの子供が集まつてゐる。其中に編笠を被つて男帶をしめて脚袴をはいて月琴をだいて、それをピン〳〵ひき乍ら書生節をうたつてゐる十五六の女の子の傍に白粉をつけた黑の紋附を著た十許りの男の子がやたらに跨をひろげたり手をあげたりして踊つてゐるのがある。三十人許りの子供はがや〳〵騒いでこの二人をとりまいてゐるのである。

俊坊も姉もいつの間にかこの群集の中に交つてしまつた。俊坊と姉とは今は見物の群集の中に這入つてしまつて、書生節の二人が新たに舞臺に上つたのである。二人は今一どぜう汁どぜう鍋」と障子に書いた店先に立つてやつてゐる。

「敵の大將隆盛は、古今無双の英雄で、これに從ふ兵は、桐野、篠原、村田など、中にも邊見十郎太……」

俊坊は時々どぜう汁屋の暖簾の間から薄暗い内を覗き込むやうにしてゐる。内には車屋であら

う、二三人腰かけてどぶ六をひつかけてゐるのもある、飯を食つてゐるのもある。中にも其内の一人が濕紙のやうな顔を酒に光らして白い齒をむき出して笑つてゐるのが殊に目立つて見える。其どぜう汁の匂ひが湯氣と共に暖簾の中からぷん〳〵と匂うて來るのを、俊坊はじめ多くの子供は旨さうに嗅いでゐるのである。

鰌汁屋のかみさんが一厘錢をくれたので、書生節はやつとお隣へ移つた。子供の一群は其を取卷き乍ら、

「これに――從ふ――つはものは――」

と口眞似をするのもある。後ろから小さい石をなげるのもある。

俊坊の姉は、この時、もうよもや余は居まいと振りかへつて見たのであらうが、余が姿所までも尙ついて來てゐるのを見て、急に眼をそらしてしまつた。余は通りがゝりのものであるやうに裝はうとしたが、ひとり俊坊の姉ばかりではない、こゝらあたりの神さん達も何だか不思議さうに余の顏をじろ〳〵見てゐる。

書生節はお隣りの薪屋で斷わられて、其向ひの正德寺といふ寺へ這入つたので、子供のむれも皆最前の如くがや〳〵騷ぎ乍ら這入つて行つた。俊坊も姉に手を引かれ乍ら這入つて行くのが見える。余はいつか門前に取り殘されてしまつた。

余のしやがんだ前は一間幅ばかりの汚ない溝川である。其溝には木切れや竹切れや古下駄や、時としてブリッキの古鑵などが澤山に埋まつてゐて、其間からぶく〳〵と泡が絶えず吹き出てゐる。さうして鐵氣色をした水が其上をくねりくねつて流れてゐる、其底には子子が赤い苔のやうにくつゝいてゐる。

余の隣には「ラオノスゲカヘ」の爺さんが其處へ荷を下して溝の方向いて腰を据ゑてゐる。齒の無い口をぱくつかせてゐるのはゆで栗を食つてゐるのである。やがて栗を食つてしまふと、紫色の舌を出して唇を二三遍舐めまはして腰から煙草入をぬき出して、扨て一服と悠長に煙管をくはへた。

溝を隔てゝ彼方は正法寺の境内であつて墓原の一方が石炭屑や砂利の置場となつてゐるのが壞れた垣の間から見える。墓原と砂利置場との間に赤い鷄頭が二三本立つてゐるのが殊に美しう目に立つ。

彼方から子安觀音がやつて來た。前にぶら下げてゐる鉦を右の手でゴーン〳〵と叩き乍ら、左のてのひらで頰りに顎髯を撫でつゝ余のうしろを過ぎて、正法寺の門前をもたゞで通り過ぎた。まだ彼の書生節や俊坊は寺から出て來ない。

「ラオノスゲカヘ」の爺さんはやがて煙草入を腰にをさめ、どつこいしよと立上つて、荷物を肩

にして、再び唇をなめづつて、其處を立去つた。

正法寺の向ひ側は彼のどぜう屋、薪屋の棟つゞきの長屋であるので、薪屋の隣が八百屋、駄菓子店、奉公人口入所、按摩按腹、屑屋、葬具商、木版石版印刷所と、これで長屋はおしまひで、其等の長屋の二階には大概著物や布團の汚ないのが乾してあつて、木版印刷所の二階の窓から首を突き出してゐる色の青い四十過ぎの男は病人であらう、頭重さうに鉢卷をして往來を眺めてゐる。

長屋の前に一つの最合井戸がある。これが此長屋中の用を足すのであらう。其處に木の古びた札が立てゝあつて其れに紙が粘りつけて斯う書いてある。

本日中此ところせんたく無用

どういふわけであるかはわからぬが、爰處ら一面にじく〳〵してゐて、菜屑藁切れのちらばつた上を、びつこの鷄が餌をあさつて歩いてゐる。彼の二階の病人はこの鷄を眺めてゐるのである。

いくら待つても俊坊は出て來ぬ。さつきからぽつ〳〵と彼れ是れ十人許りの子供は出て來たやうであるが俊坊や姉は其中に居なかつた。第一彼の書生節は今迄何をしてゐるのであらうかと再び正法寺の前へ來て内を覗いて見ると、ひつそりとして子供の聲も聞こえぬ。余は正法寺の中へ這入つて見た。門を入ると左右共に古びた石塔が並んでゐて青い檜の立つてゐるのもある、線香

の煙つてゐるのもある。一つの小さい石の地藏には赤いよだれかけが掛けてある。突き當りが本堂左側が庫裡であつて、庫裡の後ろには古びた棟割長屋の端のうちが一軒見える。きたない袷が乾してある下に朝顔の鉢が並べてある。扨ては此内には長屋があつたのだな、もし裏へ抜道でもあるのかと、庫裡の前を通り過ぎて長屋の前へ出ようとした時、

「何ンか御用ですかい」

と庫裡の内からさびた聲が聞こえた。

「なに別に……これから裏へぬける道はありませんですか」

「あります」

其處に出て來たのは骨體の逞ましい四十過ぎの坊さんで、若しぐづ〳〵でもしてゐたら忽ち泥棒あつかひにされさうな恐ろしい劍幕である。

長屋の前へ出て見ると一間幅ばかりの路地があつて、裏道へ出られるやうになつてゐる。長屋は彼れ此れ十軒許りもあるやうで、いづれも同じ汚なさで、この汚なさに比べると表通はまだまだ立派な住居である。一種の臭ひがぷんと鼻に來てゐたゝまれない。余はそこ〳〵に表へ出てほつと息をついた。

余は俊坊を見失つてしまつたのである。俊坊のうちはこの汚ない、臭い長屋のうちにあるのか

も知れぬ。それとも書生節と共に裏道へぬけ出たものか。兎に角要領を得ずにしまつた。

（明治三十三年十二月）

汽車待つ間

川越線の或淋しい停車場へ著いたのはもう五時であつた。上り列車は十分許り前に出た處ださうで狹い停車場には一人の人影もない。次の發車迄には二時間たらずの間がある。余は其前の待合茶屋に腰を下した。

この停車場迄來る路は片傍が余の背よりも丈高い薄の川べりで、片傍は樫や楓のあまり深くもない林であつた。さうして其林の中で時々音がするのは不思議だと思ひながら爰迄來たのであつたが、其は花火であることがわかつた。

爰から見ると樫林を外れて彼方にこんもりと木の茂つた處がある。花火は其木立の中から上つてゐるので、其煙が消えてしまつた時分にかすかな音が聞こえるのである。さうして茶店に休んでゐた男（熊さんとかいふ）に聞くと、隣の村の何とかいふ寺の本堂が新しく建立された其供養の爲の花火であるとの事であつた。

園爐裏の傍で片胡坐かいて茶碗酒をあほりつゝあつた話ずきの熊さんは忽ち余を談敵にして問

はぬ事迄話してくれるのである。

何でもお寺から十軒許り手前の地藏樣の前から道ばたの藪や榎に燈籠をともし連らねて其下には水菓子屋駄菓子屋などが並んでゐる事。買手より商賣人の方が多い事。あすから二日間は芝居があるので今日は談義がある事。談義といふのは鉦や太鼓で調子を合はして都々逸よりア六ケ敷いこと。下手にやると何處の鍛冶屋かなどと笑はれること。ちつといゝ聲だと女がほれる事。十二なら十二の鉦がいつしよに鳴ると太鼓が曲撥を使つてくる〳〵〳〵〳〵とまはしてドンとうつ事。太鼓がうまく行くと鉦なんか屁の子だといふ事。女がまた其太鼓のうちやうに惚れる事。なんでも女は斯ういふ事に惚れるものだよといふ事。其店の小娘に、お前は惚れてはいかぬよといふ事など。しまひには小娘をからかつて罪もなく笑つてゐるのである。

尙熊さんの外にこの茶店に休んでゐる二人の男がある。何れも桑や繭の仲買ひと見えて、やれ市兵衞がどうだの十文字がどうだの、百目三兩で買つてもうかつたとか、五宿の佐太郎もすつた仲間だとか、府中の何屋がべらぼうに買込むとか、國分寺の新七さんがいゝ顏になつたとか、いい顏になつた代りもうからなくなつてしまつたとか、これも喋り續けながらちび〳〵際限もなく店の片隅でやつてゐる。

熊さんはぐつと後ろ手をついて、「旦那方川越かね」と聞くと二人は入間川だと答へる。これ

を手ほどきに熊さんは直ちに又二人を捕へて、

「わつしらのやうな家業でも、酒飲みの德はおめえ、朝飛び起きて飯も食はぬ內に五里や六里の道は平氣でかけられるが、下戶で御覽、朝飯食はねえ內は半里も六ケ敷いや、意氣地がねえやな。まア其處いらが酒の德だね」

アハヽヽヽヽと三人で愉快さうに笑ふ。

余も茄子と燒豆腐の煮染めにくさやの乾物を肴にして水くさいコップの酒を舐りながら時間のたつのを待つてゐるのである。

門前の路傍に小さい石の地藏樣が立つて御座る。其下に白い野菊や紫の薊の花などが草の中に咲いてゐる、其に黃色い蝶がとんでゐるのが誠に秋の夕暮のいゝ感じだ。こちらの方では小さいくり〳〵した犬ころが梨の皮をかんでゐる。こゝいらの犬は梨迄食ふと見える。どこかで水車の音が聞こえる。最前ある村で見た製絲場を思ひ出す。水車がのろい音をしてまはつてゐると其傍の小屋の中では若い大勢の女の勇ましい歌と絲とり器械の音が聞こえたのは面白かつたが、こゝの水車も製絲に使つてゐるのではあるまいか、などゝ思つてゐるうち日がとつぷりと暮れて來た。

また花火の音がする。夜の花火があがり始めたのであらう。

小娘は出たり這入つたりして花火を見てゐる。

繭商人は二人とも荷物を枕に寝入つてしまつた。すばらしい鼾の音が聞こえる。小娘を相手の話も種切れになつたか熊さんは大きな欠びをしてゐる。小娘は表に出て花火の揚るのを待つてゐる。

四十前後の神さんが通帳をさげてどこからか歸つて來た。

神さんも小娘もこの片田舍には珍らしいきりゝとした身なりをしてゐた。且つ言葉もどこか垢ぬけがしてゐてこの邊の土音ではない。亭主らしい男が見えぬのは不思議だと思つてゐると、表の緣臺に腰かけてゐた一人の車夫は今しも圍爐裏の傍に腰かけて長い煙管の雁首で煙草入を引き寄せてスパ〳〵と吹かし始めた。紺の新しいパッチに腹かけ、小さつぱりした身なりである。神さんに對する口つきから想像するとこれが正しく亭主であるやうだ。さう思つて見ると今こそ頭も禿げてをれ、又車ひく外能がない亭主でもすこし清元が出來るのが神さんの大變な御自慢とでもいふのではあるまいか、以前は東京の場末で格子戸作りの小意氣なうちに住んだこともあるのであらうなどゝ下らぬ事を想像してゐると、果たして妙な口喧嘩が始まつた。

何でもそれは熊さんが、どこかの店前で或料理屋の女將が癪がおこつて苦しんでゐたのを昨日介抱してやつたといふ話がもとなので、それを亭主が小さい聲で、

「又底なしに飲んだくれたからサ」

といつたのがもとである。

「癪がおこつたのをなぜ飲んだくれたからだとお判じだえ、よくそんな事がわかるねえ。癪といふものはどこでおこるかわかりやァしねえ。悲しいといつてはおこり、嬉しいといつてはおこりさ。この人は自分が酒がきらひだからつてすこし酒を飲む人は女の敵のやうにおいひだ。女將さんはそりやお酒はすきさね。お酒が好きだからつて、癪のおこるのは何も飲んだくれに極まつた事ァありやァしねえ。ねえ熊さん、わたしがすこしお酒をいたゞくので何かにつけての當てッこすりさ。外聞が惡いやね。癪がおこるのがのんだくれだからだとさ。ヘン人を馬鹿にしてゐやがらあ。そんな下らねえ事を眞面目においひかえ、あてずつぽうな事はよしておくれ」

亭主は一言もない樣子である。熊さんが口を出す。

「神さんのいふ通り癪てえやつは不思議なやつさ。いつかどこかの女が身持で柿を食つて蟲が病んで來た處へ、癪の藥を飲んだものだからサア大變、腹の中がめちやくちやになつてしまつた。すぐ醫者を呼んで來てもらつたが、なんでもどれが癪やらどれが蟲やら、もうわけがわからなくなつてしまつてたてえことだ」

皆一どにどつと笑つた。

汽車が來た。余は熊さんの威勢のよい聲をあとにして汽車に乘込んだ。小娘は余を汽車迄送つ

てくれた。闇の彼方の小村では尙淋しげに花火が揚つてゐる。

（明治三十四年十月）

天文臺

今日は日曜で非常な好天氣である。午前から宅を出て駒込淺嘉町に四方太を訪うた。途中で某某の知人に遇うた。皆早稲田大學の開校式に臨むのであるさうな。留守であらうと思うた四方太はうちに居た。暫く雜談の後連立つて子規居士の墓參に出掛けた。動坂を下りると稲田があつて赤蜻蛉がうら〳〵と飛んでゐる。道艸に蓼の赤いのもなつかしい。これからもう田端村で、相似た杉垣、いづれも門の內にはいろ〳〵の鉢を並べた植木屋の門を過ぎて大龍寺へと歩みを運ぶ。途で五城夫妻に逢ふ。墓參の歸り路であるさうな。

大龍寺の門を入ると山茶花が美しく咲いて居る。子規居士の墓前に進む。

墓表は早いくらか古びが見える。五城が供へたものか一束の線香が赤い紙と共に燃つてゐる。花生けに餘つた榿は亂雜に兩側の土に突き挿してある。砥部燒の白い茶椀に水が供へてある。名刺が五六枚散らばつてゐる。墓の後ろの木に眞赤な美しい烏瓜のぶら下つてゐるのが目につく。

大龍寺を出て余は四方太と分れ道灌山を通つて根岸へ出た。根岸庵では令妹は松山に歸省中で

北堂が獨り淋しく喪を守つて居られる。佛前に線香を立てゝ暫く雑談する。佛様に供へられた握鮓の殘りを食ふ。烏瓜の話をすると二三日前來た誰彼も其話をしてゐたなど話される。

お隣りの鵜南先生を訪ひ、轉じて碧梧桐の留守宅を見舞ひ、上野の山を越え廣小路に出た頃は秋の日の暮れやすく早街燈に灯をともして居る。

眼鏡迄馬車に乘つて神田の小川町に出る。一體この邊に人立が多いのは何事であらうかと疑ひながら或ビーヤホールに上りて晩飯を食ふ。樓上もいつにない人込である。殊に多くの客は表の見える椅子を占領してゐる。漸く其は早稲田大學の提灯行列を見物する爲であるといふ事がわかつた。

客の半數以上は既に食を終へてゐるらしいに係らず容易に椅子を離れない。窓から表に首を突き出して今か〳〵と町を眺めてゐる。

遠方で花火の上る音は聞こえるがまだ中々行列は來さうもない。余は今夜は麻布の天文臺へ行つて彗星を見せて貰ふ約束がしてあるので、あまりぐづ〳〵してはゐられぬ。殘念ながら此處を出て其賑やかな通りをあとに神田橋の方へ歩を運んだ。

神田橋から人力に乘る。人力が和田倉門に這入らうとする時ふりかへつて見ると、大きなまんまるい赤い月が電話交換局の家根の上に出てゐる。

二重橋外にも三々五々人立がある。其等がぼんやりと月の明りに見える。何れも提灯行列を爰に待合はすのであらう。天文臺についた頃は彼是七時が近かつたらう。門を這入ると芝生があつて其向うに眠つたやうな建物が見える。何處が玄關だか其さへ充分にわからぬ。門番小屋らしいものがあるので二三度御免なさいと呼ぶ。洋服を著た小使が出て來る事と豫想してゐると、飯を食ひつゝあつたのか、口をもぐ〳〵させながら三十過ぎの女が何ですかと顔を出す。斯く〳〵と來意を通ずると提灯をつけて余を小使部屋に導いて呉れる。

「もし〳〵居ますか」

と二度許り呼んだが返事が無い。余を表へ待たせて置いて一人奥へ這入る。

暫くして今度は洋服を著た小使が余を應接室に導いて呉れる。平山學士は今觀測中だから暫時待つて居よとの事である。

應接室は中々廣い。中央にある大きなテーブルの上には、地球儀や寫眞ブックなどが亂雑に置かれてある。周圍の壁には隙間もなく額がかけてある。或は日蝕の寫眞であらうと思ふやうなもの、月球の寫眞であらうかと想像されるものが幾種類となく排列されてある。裏の方では四五人の人聲が聞こえる。

ほどなく平山氏が見えた。平山氏は更に田代氏を余に紹介された。平山氏は丁度觀測中で手が

ぬけ兼ぬるから田代氏に案内を依頼するのであつた。

田代氏に導かれて余は裏庭へ出た。裏庭は月光をあびた廣々とした芝生であつて其芝生の上に望遠鏡が三個置かれてある。其二個は三四人の人がとり卷いてゐるが一個は淋しくとり殘されてゐる。田代氏は、

「一つ箒星を入れて見ませう」

と其望遠鏡を西南隅の天にむけて距離をはかつて居る。

其傍に小さい板圍ひがある。其中でも誰かゞ望遠鏡を見てゐるらしい。やがて田代氏は、

「箒星が導いりました」

と云はるゝので余は中腰になつて望遠鏡を覗く。ぼんやりした箒星が見える。

「見えはしますが、何だかぼんやりしてゐますね」

「月が出たから大變イメーヂが惡くなりました。月の出る前ははつきりよく見えました」

「もすこし早く來ればよかつたに、殘念しましたな」

「星の觀測には月は非常な邪魔物です」

「其板圍ひの中では何をしてゐるのですか」

「これは箒星の光の強度を觀測してゐるのです」

夜の更けるのに連れて箒星はだん〳〵地平線に沈むのみならず、月が上つて來るにつれていよいよイメーヂが惡くなるので、板圍ひの中の觀測は中止された。其爲め幸にも余は其大きな望遠鏡を占領して木星、土星、月等を見る事が出來るやうになつた。

田代氏はかはる〳〵其等の天體を望遠鏡に入れて呉れられた。肉眼で見ると唯針頭一點の光に過ぎぬ木星は、直徑一寸以上の立派な天體となつて其周圍に四個の小遊星を有して居る事がはつきりわかる。土星は、光りを放つた一條のリングが星體の周圍をとりまいて、恰も獨樂の如き形を爲し浮くが如く斜に天空にかゝつてゐる。月は望遠鏡をはみだしさうにうつる。光りが強くてまぶしいやうである。

其から更に田代氏に案内されて子午儀、子午環儀、赤道儀等の大じかけの器械を見た。子午儀といふのは時をはかる器械である事、中央に据ゑられた大きな望遠鏡で子午線を通過する星を觀測する事、何時何分何秒に何といふ星が子午線を通過するといふ事が皆て測量されて明白になつてゐるので正確な時を計る事が出來る事、午砲、中央氣象臺、郵便局へは毎日正確な時間を此處から報ずるのである事、午砲は午前十一時にベルを推して報ずると先方の時計をチャント正しく置く、其から其時計の十二時になつた時にどんを打つ事、郵便局へは正午三分前にベルを鳴らして報ずる、さうすると日本全國の電信技師は悉く電信事務を中止し郵便局の時計の前に集り時計

を直す事、北海道の果てから臺灣の果て迄郵便局の時計は必ず正確なものである事等、見るもの聞くもの珍らしく面白い。

最後に導かれたのが天頂儀といふ器械である。獨り淋しげに其器械で觀測してゐるのが平山氏であつた。

天頂儀は前の三つに比べて遙に小さい器械である。其は緯度をはかるのであるさうな。中央に矢張り望遠鏡がある。平山氏はある書籍を見て又時計を見て、

「一つ星を入れて見ませう」

と望遠鏡を或方向に裝置して余に與へられた。眼前にあらはれた鏡裏の天空に今は何物も無い。平山氏は時計を見て、

「まだ星はやつて來ませぬか」

余は「まだ」と答へんとするうちに星は鏡裏にあらはれた。上から下に徐々に進行する。終に又鏡外に進行し去る。

凡そ望遠鏡裏にて見得る限りの星には悉く番號が附してあつて、何番の星は何時何分に天頂を通過するといふことは天文學者間に明白になつて居る。だから書籍と正確なる時計さへあれば如何なる星でも鏡裏に入れる事が出來るとのことである。

「私は三年の間此器械を毎日いぢつてゐます」

平山氏が此室に籠るのは毎日午後六時から十一時頃迄であるさうな。

平山、田代二氏と共に余は再び應接室にかへつた。其から天體の種々の寫眞を見ながら、コロナの話、黑點の話、クラスターの話、ネビュラの話、マルギュランダー氏の話、アイザックロバート氏の話などかはる〴〵兩氏より聞く。

實に余は箒星を見るのが目的で今宵此天文臺に來たのであつたが、此處へ來て話を聞いて見ると、箒星などいふものは天文學者に取つては敢て珍らしいものではなく、望遠鏡裏に現はれる箒星は一年にいくらもあるさうな。

併し箒星でも馬鹿にはならぬ。箒星は皆地球よりは遙に小さい天體であるとのみ思うてゐるが、殊にハルレーといふ箒星は、地球の中心と月の中心とを結びつけた直線を半徑として描いた圓よりも、大きいといふ事である。時計は既に十時を過ぎたので兩氏に謝して天文臺を出た。

（十月十九日記事）（明治三十五年十二月）

幻住庵の跡

余は一人の男を案内者に傭ひ勢田川を後ろにして石山の裏手に這入る。此道は清水の奥の院牛尾山に出る道で、國分山は其途中から右へそれるのぢやと案内者がいふ。

道は爪尖上りに上つて、段々高になつてゐる山田には中稻晩稻が眞黃色に稔つて居る。道傍に散在して居る楓林は大方落葉して團栗が下駄の齒に當つて鳴る。頭の上に大きな飯櫃を載せて片手に土瓶を提げた二人連れの若い女が稻の中を此方へ來る。小原女のやうに紺の著物に赤い襷を懸けて居るのが美しい。

處々に畑もある。靈豆の這入つて居る笊を抱へた小さい女の子が穴の中に種を卸して行く。其あとから母親らしいのが土をかぶせて行く。案内者は、

「えらうきばつといやすなあ。降らんとえゝが」

と挨拶をして行く。

まだ牛尾山道かと聞くと、もう道はいつの間にか右に折れて居るので、其處に見えるのが國分

山であるといふ。こんもりと茂つた松山で、外の山々を離れて田の中に突き出て居る。見ると其茂つた松の中に石段らしいものがあつて麓に石の鳥居が立つて居る。あの社はと聞くと、近津尾神社といふ。懐にしてゐた「幻住庵記」を取り出して見る。「八幡宮立たせたまふ」とあるのに符合せぬのが不審ぢや。

案内者は突然、

「旦那、ほんまに濟みまへんが、あんた此道を右へ取つて行きますと橋がありますさかい、其を渡つて鳥居の處へ出とくれやす。其間に私は一寸あこへ寄つてあつちからまはつて行きますわ」

と余の風呂敷包みを提げたまゝで左手の徑を走つて行く。稻の上に見えて居た頭がすぐ木立の蔭に隱れてしまふ。

余は獨り右手の道を行く。今朝から怪しかつた空は終にぽつ〳〵と降り出す。杖にして居つた蝙蝠傘をさす。果たして橋がある。「麓に細き流れを渡り」とあるのが思ひ合される。其橋の上に立つて上手を見るとぢやぶ〳〵と川を渡つて來る男がある。手には余の風呂敷包みを提げて居る。しかし前きの案内者とは人が違つて居る。近よつて見ると稍〻年輩の親爺で、

「あの男は昨日身内のもんが死んだので體が潰れてるさかい、神樣の前を通るのは勿體無い事つちやよつて、私に代りに行つとくれと云ひますで。へい御案内しませう」

と先に立つ。

鳥居をくゞると勾配の急な坂になる。社の名を又此親爺に聞いて見る。今では近津尾神社といふが十七八年前迄は八幡宮と呼んで居つた事が判然する。

雨は左右の木から雫が落ちる程に降り出す。親爺は布子の狹い袖で余の風呂敷包みを蔽ふ樣にして抱へて居る。時々蝙蝠傘の上にぽた〳〵と落ちる物がある。其は木の實である。昔芭蕉も雨の日此處を斯く登つた事もあつたらう、と思ふと懷かしい。

神社の前に出る。今では國分村の氏神であるさうなが、木の葉が深く道を埋めて、「日頃は人の詣でざりければ」とある昔の景色を留めて居る。親爺は其神社の左手の葬の中に立つて嚔く。雨は益ゝ降り出す。蝙蝠傘では凌ぎ兼ねるので毛布を頭から被る。

「折角來て貰ひましたけれども、斯んなひどいとこで仕樣がおへん」

と親爺はいふ。小松や茱萸や齒朶や熊笹などが亂雜に生ひ茂つて居る中に、「芭蕉翁幻住庵舊蹟」「芭蕉翁經塚」といふ二つの建石と「先づ賴む」の句碑が立つて居る。

「いとゞ神寂び物靜かなる傍に住み捨てし草の戸あり」とあるのは正しく此處に相違あるまい。

「蓬根笹軒を圍み屋根漏り壁落て狐狸臥床を得たり」とある當年の面影はなか〳〵に此雜木原を見るにつけても思ひ浮べる事が出來る。偖て眺望はと見ると、東西南北共に山や木立に遮られて

僅に比良や比叡の一角を杉の梢に見る許りである。「魂は吳楚東南に走り身は瀟湘洞庭に立つ」といふ四方の眺めは思ひもよらぬ。假令地は此處であるにしても、今は四邊に樹木が生ひ茂つて、當時の眺めを此處で擅にする事が出來ぬのは物足らぬ。

「惜しい事に雨や無かつたら、此後ろの松ッ茸山は私のぢやで、莫蓙でもひいて、瓢簞でも持つていて、旦那にゆつくり遊んで貰ふのに。其處へ上るとそらえゝ景色というたら。天氣さへ好かつたら堅田も唐崎もつい其處に見える。けど其處迄行かいでも、もう半町程上ると山の背へ出る、其處へ出るとすつかり見えますが、これから上は道も無うて、この雨では迚も旦那には上れまへんやらう」

といふ。後ろの森でけたゝましく百舌鳥の鳴く聲が聞える。親爺は、其處に在る松の枝をほきと折つて木々の露を拂ひながら先に立つて上つて行く。余は傘を疊んで、齒朶を握り躑躅につかまり後に續いて行く。「尙眺望隈無からんと後の峰に這ひ上り」といふ趣ぢや。親爺は松の枝で齒朶を別けて、

一旦那松ッ茸がおす一

といふ。見ると大きな傘の稍ゝ古びたのが松の枯葉を頂いて土を拔いて居る。

漸くの事で所謂山の背に上る。忽ち一望空濶。琵琶湖を眼下に見下す許りか、勢田の流れも手

に取る様に見える。「松の棚作り藁の圓座を敷いて猿の腰掛と名づく」とあるのは或は此邊であつたらう。親爺は傘を開いて余にさしかけて呉れる。余は再び「幻住庵記」を取出して見る。「日枝の山比良の高嶺より辛崎は霞罩めて」とあるあたりは今日は疊々と雨雲の鎖す處となつて居るが、明神崎はかしこ山田矢走はそこと、近き景色は一々親爺の指顧のうちにある。

「もう三十年も昔やつたら、あこにお城が見えて、そら〳〵えゝ景色やつたのに、それを旦那に見せる事が出けんのは惜しいこつちや」

と膳所城址を指す。「笠とりに通ふ木樵の聲」とある笠とりはと聞くと、あの山の後ろぢやと左手に聳えて居る峠を仰ぐ。「田の上山に古人を數ふ」とあるを聞くと、勢田川を隔てゝ右手の山を指し、田の上山十八ヶ村というて其の麓に十八の村があるといふ。「さゝほが嶽、千丈が峰、袴腰」はと聞くと、田の上山の彼方此方に續く彼の峰此の森を指す。「黒津の里はいと黒う茂りて」とあるは大日山の事であらう、あの木の茂つて居る裾の方に白く土を取つたあとのある山ぢやと教へる。「たま〳〵心まめなる時は谷の清水を汲で自ら炊ぐ。とく〳〵の雫を佗びて一爐の備へいと輕し。はた昔住けん人は殊に心高く住なし侍りてたくみ置ける物好きもなし。持佛一間を隔て夜の物おさむべき處などいささかしつらへり」と余は讀むともなしに見て行く。親爺は、

「けふはほんまに拍子の悪い日でお氣の毒や。天氣さへ好かつたら大津の鎭臺さんで稽古してるのもよう見えますが」

と獨り言のやうにいふ。

「倩年月の移り來し拙き身の科を思ふに、或時は仕官懸命の地を羨み、一度は佛籬祖室の扉に入らむとせしも、便り無き風雲に身を責め花鳥に情を勞して、暫く生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此一筋に繋る。樂天は五臟の神を破り老杜は瘦たり。賢愚文質の等しからざるも何れか幻の栖ならずやと思ひ捨て臥しぬ」と卷を置くと、雨は尙小止みなく降つて居る。親爺はぼんやりと蝙蝠傘をさしかけて呉れて居る。麓の村で鷄の鳴く聲が續け様に二聲許り天地の寂寞を破る。

松の雫で濡れた「幻住庵記」を懷にする。親爺は、

「此處らの山の名は皆其本に書いてありますか。旦那は私よりもよう知つといやす」

と笑ふ。

雨雲はいつか三井寺の森迄包んで、湖水も唯一隅に明るみが殘つてゐる許り、其明るみの中に稗蒔の鉢を沈めたやうなのは山田の沖の魚である。大津を出た汽船は忽ち雲の中に影を隱して、柴船であらうか四五艘の小舟は瀨田川近く點在して居る。雨は益〻降り出す。毛布は漸く重みを覺える程に濡れて袂や裾は絞る許りである。寒さが俄に膚に入む。親爺を先にして山を下る。

滑る足を踏みしめ〳〵社の前にかゝると、下から子供を負つた四十餘りの女が傘を持つて上つて來る。

「旦那さんにむさくろしいとこやけど、御茶でもあげたいによつて、寄つてお呉れやす様に頼んで見ておくれやす」

と親爺に傘を渡しながらいふ。

（明治三十七年十二月）

麓茶屋

奇峰、奇遇、梅塘、右衛門、紫金桃、余六人を載せた馬車は今鹽尻峠の下に著いた。唯一軒の茶店はまだ寢て居る。

「何時だらう」

と先づ寒さうな聲を出したのは梅塘である。

「五時を少し過ぎた許りだ。何にせよ茶屋を叩き起こさうぢやないか」

「叩きますべえ」

と馬丁は手袋をはめた大きな拳固で叩く。暫くひつそりとして耳をすましても返事がない。馬の尻尾の提灯を打つ音が聞こえる許り。

「起きてくんねえかよ。頼むよう姉(あね)さん」

と又叩く。余は家の横手に廻る。冷たい風が峠の上から吹き下して來る。外套を通して、四枚の綿入を透して、眞綿のチョッキ、フランネルの繻絆、メリヤスのシャツを通して身に入む。

茶屋は漸く起きて寢亂れ髪の燻つた神さんが今ともした薄暗い釣りランプの下でまご〳〵して居る。馬丁は圍爐裏にもう榾を燃しつけてゐる。大きな榾にとりつかうとする火は消えては燻り消えては燻る。馬丁は其度に柴をくべて又ぱつと燃やし立てる。煙は薄暗い部屋一面に籠つて目がいたい、鼻がいたい、咳さへ出る。しかも寒さに震へ上つた六人は草鞋のまゝ疊を踏んで圍爐裏を取り圍む。

榾明りで見ると、外套の頭巾を被つた奇峰は口髯に露の玉を滴らして居る。紫金桃は宿屋に帽子を忘れて來たといふので禿頭を手拭で包んで居る。梅塘は色の燒けた二重まはしの中から眞赤な手を出して火にかざして居る。少しかゞみ加減の奇遇、髯武者の右衞門、榾の煙は殊に右衞門の顏のあたりで渦卷く。馬丁は濡れた皮足袋で榾の火を直かに踏んで居る。炎は足を包んで裾に燃えつきさうである。

宿屋で作つて呉れた辨當を食ふ事にする。竹の皮を開けると大きな握飯が三つ。

「この邊で猪は取れないかね」

「取れない事もありましねえ。きのふも與太爺が此の山向うで撃つたがね。こゝの兄はね、去年伊那境で狼を撃つたでね、今度は大方狐でも撃つて來るだあ。ねえ姉さん」

「狐といへば桔梗が原に何とかいふ名高いやつが居るね」

と右衞門は奇峰の貌を見る。

「玄蕃丞さ」

「玄蕃丞とは面白い名ですね」

「何でも川中島の戰爭などもよく知つて居るといふ古狐で、旅僧を化かしたとか、或六部の女に戀したとかいろ〳〵の歴史を持つて居る奴ですが、そいつが又汽車を化かしたといふ話がありますよ」

「汽車を化かしたといふのは」

「丁度鹽尻迄鐵道が敷けた時分の事で、玄蕃丞が汽車を化かしたといふのは名高い話でありました。越後の親類狐とかゞ遊びに來てゐて、レールの油を嘗めて居た處へ汽車が通りかゝつて轢き殺した。其處で玄蕃丞が怒つて汽車のやつふてえやつだ、一つ敵を取つてやらう、と其から俄に停車場の無い處に停車場を作つたり、向うから汽車が來るやうに見せたりしたといふのです」

余は握飯の中から出て來た香こをがり〳〵と嚙む。

「六部に戀したといふのも一寸面白い話でしたが詳しい事は忘れました」

「それは何でも二三百年前のことださうです」

最前から握飯の中に黒いものがあるのを除けては食ひ除けては食ふ。嚙むとがじ〳〵と音がす

る。いくら除けてもあるのは道理、これは滑の煤だ。

外面はまだ暗い。提灯をつけた男が一人這入つて來る。これは神さんが呼んで來てくれた荷物持ちの男である。

「これから鹽尻の停車場迄いくらかゝるかね」

「さうだねえ。あなた方が歩くのなら二時間もかゝるかね」

「大に見くびつたね。一時間半なら行けるだらう」

「八時四十分に乘るだね」

「さうさ」

「それなら二時間半かゝつてもでえ丈夫だよ。そろそろ行きますべえ」

「もうすぐお茶が沸きますから」

と神さんはまだ寢卷姿でへつゝひの下を燻して居る。

「忘れものはねえかね」

と馬丁は馬の口を持つて馬車を少し後ろによせる。（一月三十日の事）

（明治三十八年五月）

玄女節

「お花チャン一緒に行かないの」

といふと笑ひながら跟いて來る。お花チャンといふのは十一許りの、今日は寢坊をして學校に行かなかつたといふ、むじな湯の養女で、後々は湯女になるといふ兒である。

兩岸の山には切炭のやうな岩が聳え立つて、畫で見た耶馬溪が聯想される。山腹一面を黃色く色どつて居るのは山吹である。川岸の荊棘の中にも咲き擴ごつて居る。靜かな景色だ。この邊から川谷あたりまでの樵の歌ふ唄に玄女節（げんぢょ）といふのがある、木を樵りながら、峰を傳ひながら謠ふこともあり、さなくとも所望すれば謠つて聞かす、と或人の話した事を心に留めて、我等三人は其唄を聽かんが爲に川上に上つて行く。

二人の女の樵が高話しをし乍ら來る。

「姉さん玄女節歌つて聞かさないか」

と知白が早速所望をする。二人共、

「ハ、ハー」
と笑つてとり合はぬ。鐵漿をつけた齒があざやかに見える。
山裾を一つめぐるとすこし許り草原があつて、其處に老人と娘がゐる。
「玄女節聞かして呉れないか」
と娘の前に立つていふ。これも笑つてゐて取り合はぬ。
「姉さんの取つてゐるのは何」
「桜の芽だシ」
と草むらから顔をあげてこちらを見る。日には焦げてゐるが尋常な目鼻立ちだ。
「どうして食ふの」
「ゆでて胡麻よごしにすッつァい」
「あそこにゐるのはお前の御亭か」
と知白は腰を下ろして卷煙草を出す。
「おれのぢい樣。玄女節が上手だから賴んでみッつァい」
とぢい樣の方を見て笑ふ。ぢい樣は苦い顔をしながら大きな雁首をはたいて立上る。
「ぢい樣のよりお前のが聞き度いのだ」

と腰の鎌がキラ〳〵と木隱れるのを目送して知白は又娘にいふ。
「其桜の芽くれないか」
と余は所望をする。
「あげますべェ」
と草むらから現はれて一握りのとげ〳〵しいのをくれる。脚には「はゞき」をはいてゐる。
「それつぱかしぢやお菜にならない。もつと採つてくれ。取り乍ら玄女節を歌つてくれ」
と放江はいふ。
「おりやうたへないといつたらよう。桜の芽は今に取つて來てやッべェ」
娘は後ろの叢の中に這入る。程なくぼき〳〵と音のするのは桜の芽を摘んでゐるらしい。
三人は草の上に團坐して放江が持つて來た瓶の酒を飲みはじめる。花チャンは川岸の山吹を折つては束にして居る。何處かで鶯が啼く。
見上げると屏風のやうな支那風の山が我等を壓して聳えて居る。其の低みの岨道を四五人の樵が柴を背負うて下りつゝある。も一度見直すと早木立隱れに見えなくなつて居る。
娘はいつの間にか歸つてゐて一抱への桜の芽に寒竹の子をも取り添へてくれる。包む風呂敷が無いのに困つて居ると花チャンは走つて來て袂から絹のハンケチを出して借す。放江は、コップ

を娘にさす。
「おりや飲まんニェー」
と手を振つて逃げようとする。
「まァ飲むサ。ぢい様の居ないうちに一杯引つかけるサ」
と無理に強ひる。娘は頬被りを取つて肩にかけたまゝ草の上にかしこまつて膝をつく。花チャンは兩手を瓶に添へて注ぐ。
娘はしぶ〳〵一口二口飲んで、
「モー飲まんニェー。お前飲まつしやい」
と飲みさしを放江に突きかへす。
「それなら玄女節をうたふか」
其處へぢい様は柴の高荷を負うて林の中から歸つて來る。
「ぢい様、おりやハァとんだめに合つてるだ」
とコップを花チャンにおしつけて逃げて行く。ぢい様は仰向けに倒れるやうにして柴を下し先きの通り苦い顔をしながら手拭で額の汗を拭く。花チャンが、
「これぢいさんに上げませうか」

「さうだ。二三杯ひつかけて玄女節を謠つて貰はう」
横目で一寸コップを見て雁首を取り出し、いつの間にか機嫌が直ほつて居る。花チャンが注ぐ。
『玄女踊は飯より好きだ。わけたお飯は食はで來た』
「いゝ聲だなァ」
「ハ、、、、。も一つ聞かしてあげべえ。……『玄女見たさに朝水汲めば、玄女隱しの霧が降る』……おまへ達覺えて歸つて東京ではやらかす積りなべえ。……『梭のめどほど、通はせ置いて、糊があまいせェか、切れたがる』」
ぢい様大分醉が廻つて來たらしい。
「お前たち此さきの屏風岩まで行つて來サェ。景色のえゝとこだ」
とよい機嫌で、すこしひよろつきながらさきの柴を背負つて川下へ下つて行く。
「今度はお前の番だ」
「ソウいはッチヤ、とても改まつて歌はんニヤエ」
と娘も亦柴を背負つてぢいさんのあとを追はうとする。
「逃げちやいかない。一つうたは無きや逃がすことでは無い」
娘は突立つたまゝ、

「おれも行きながら歌ふべェ。それで勘忍してくッつァイ」
娘は重い柴をづしり〳〵と背負ひつゝ川添道を下つて行く。柴の下から「はゞき」を穿いた内がまの足が小刻みに刻みつゝ遠ざかる。
『可愛いおぢさんと初對面で、後に遇ふやら遇はぬやら』
甲高な聲が山にひゞいて、流石に艶に聞かれる。
『郡山よりも、本宮よりも、此は會津の東山』
柴許りが草隱れに見えて居つたのも終に山かげになつてしまふ。
お花チャンは山吹の花束を持つたまゝ退屈さうに待つてゐた。
此夜の御馳走は桜の芽の胡麻よごしに寒竹の子と豆腐とのおつゆであつた。

（三十八年五月十五日の事）（明治三十八年七月）

八文字

或寒い眞暗な晩であつた。清水近傍の料理屋で送別會があつた。其歸りは大分散り〳〵になつて余は二人連れで祇園新地を通つて聖護院の下宿に歸り掛けた。祇園のどの邊であつたか忘れたが何でも大通りであつた。もうどの妓樓も皆戸を閉ぢて、殊に凍るやうな寒い晩で、然も闇夜で一人の人通りも無い。我等兩人は外套代りに毛布を頭から被つて互に肩をくつつけてせつせと歩いてゐた。すると忽然向うに小さく一點の火が見え出した。大方提灯であらうが眞暗な中に只一點の火であるから頗る注意を牽いた。こちらへ來るのか向うへ行くのか解らぬが、何れにせよあれに追ひ附いてやらうと二人は前の通り肩をくつつけて大地を睨めたまゝヘヴィをかけてぐん〳〵ぐん〳〵歩いた。いくら歩いても彼火は近よらぬ、近よらぬどころか暫くしてふと消えて無くなつてしまつた。どこかの家に這入つたのか横町に曲つたのか何にしても只一つの灯が無くなつたのでがつかりしてしまつた。もう前程の勇氣は無いが寒いのと暗いのでぐづ〳〵してゐる事も出來ず矢張り足早に歩いた。とある四つ角へ來た。左手から寒い風がどつと吹いて來る。覺えず顔

を上げて其方を見ると驚いた、五六間先きに灯が見える。しかも大きな提灯だ。人も一人では無い三四人居るやうだ。はつきりはわからぬが兎に角只の通行人では無いらしい。二人は不思議に思うて其を見に行つた。近よつて見て愈〻驚いた。其は花魁であつた。頭に澤山の簪を挿した、顔の白い、金襴のやうな著物を著た、この寒いのに素足で高い塗木履を履いた花魁であつた。さ、うして、其花魁は只歩いてゐるのでは無い、妙な足つきをしてとと〳〵しい歩きやうをして居る。なんでも一度突出した足を先づ内側へひねつて、次に外へひねつて、カラ〳〵と木履の片側をひきずつて靜かに圓形を描き乍ら前へ出すといふやうな歩き様だ。普に聞いてゐた八文字といふのがこれであらうと余は始めて合點が行つた。大きな箱提灯を持つてゐるのは四十許りの男である。も一人花魁の後ろに男がゐるが箱提灯の光が其處迄充分に達せぬので幾つ位の男であつたか其はつきりわからなかつた。只其男が後ろに手を廻して柄の長い大きな傘を花魁にさしかけて居つた事だけは認められた。二人は毛布から眼許り出して熱心に花魁の顔を見た。おいらんはチャンと正面をきつて、片頬に細波ほどの微笑を湛へたほか、顔の筋一つ動かさぬ。其白い美しい顔はゴフンで塗つた佛様の顔よりも神々しく見られた。我等が餘り執念く著き纏ふのがをかしかつたか、金色に塗られた唇をかすかに開いて黑く染めた齒をちらと見せたのもなつかしかつた。我等のほか犬一匹通らぬ闇の眞夜中にも彼は儀容を崩さずに堂々と八文字を踏んで居るのであつた。

此の眞暗な闇を額縁にした簡單な美しい浮世繪は今もあざやかに目に見る事が出來る。是は十二年前の話だ。

（明治三十九年十月）

雜魚網

夕方宿屋の座敷から波止場を見下ろして居ると澤山船の繋いである間で雜魚網を曳いて居るのが見える。裏庭から蛭子神社の前を通つて高い石段を下りると海岸に出て其から波止場迄は一町足らずだ。浴衣のまゝでぶら〳〵と出懸けて見る。

網はもう七分方曳いたところであつた。網を手繰る男女の掛け聲が大變急調になつて居る。裸の子供が長い棹を持つて海中に這入りパタリ〳〵と重さうに波上を打つて居る。これは魚を網の中に追ひ込む爲ださうだ。赤い褌をした痩せた男が傍に繋いである船の上に立つて皆が波止場に手繰りためる網の綱を又其船の上に手繰り寄せて居る。さうして、

「しつかりせんかい。萬坊やい」

と暗黑な顏に白い眼を光らせてギロリと棹を持つて居る子供を睨める。萬坊は前よりも稍〻急がしげに波上を打ちはじめる。

「あの船に乘つて居る男が網主ださうです」

「道理で中々ゐばつてゐますね」

「獲物は先づ半分を網主が取り其の殘つた半分を此の網を曳いて居る多くの人々がわけて取るとかいふ事ですよ」

「澤山取れますでせうか」

「え〻、先刻曳いた時に四斗樽に三杯取れました」

など〻避暑客らしい二人の人は面白さうに見物して居る。余も其後ろに立つて見た。

網はだん〳〵曳かれて來る。始めは荒い繩であつたのが細かい繩に變り、それから目の荒い麻の網になり終には袋のやうな目の細かい網になる。此袋のやうな網が見えはじめると漁師共の掛け聲は一層急になる。彼の赤褌も船から飛び下りて來て網曳きに加はる。皆一歩々々と海中に這入つて行つて乳あたりまで波に浸けて周圍から網を取り圍むやうにする。

袋が波止場の上に引き上げられる。萬坊は棹を捨てゝ大きな笊を持つて來る。一人の女が其笊を袋の中に突込むと銀色をした雜魚が山と盛り上げられて四斗樽に運ばれる。四斗樽の中には白い泡が湧き立つて其泡は樽を傳うて周圍にこぼれる。

今度の獲物も四斗樽に二杯足らずあつた。等分に盛り分けられた片方の樽は赤褌と今一人の男とが直ちに何處かへ運び去つてしまふ。

殘る片方の樽の前に突立つて、
「八公容れ物はよ？」
と大きな聲を出して居る女が一人ある。其はさきに笊を袋の中に突込んで雜魚を酌み出した女だ。一體の容子から此女が網主の母らしく思はれる。髪をぼんのくぼあたりで結つて居る五十恰好の目に劍のある女だ。坊主頭の八公といふ大男は一つの桶を持つて彼の女の前に立つと女は樽の中から笊に一杯の雜魚を酌み出して其桶の中に入れてやる。八公は無恰好に其桶を兩手で抱へて何處かへ行つてしまふ。
八公を手始めに續いて萬坊、それから誰、彼と皆彼の女を取り圍んで其々に分け前を貰ふので暫くは混雜した。
余は晩酌の肴に欲しいと思つて見物の中を割り出して前へ出て、
「其雜魚賣らないのかい」
と聞いて見る。すると彼女は、
「賣つてもようございます」
といふ。浴衣一枚で金入れも持たねば入れ物は固より無い。
「それでは面倒だが菊屋まで持つて來て呉れ無いか」

だまつてゐるので、
「使ひ賃は無論出していゝから」
と附加へる。すると其返辭が意外であつた。
「菊屋なら御免ぢや。あすこは犬が吠えつくから厭やぢや」
急に言葉つきまで横柄になつてけんもほろゝの挨拶をする。
「犬が吠えるのが厭やなら石段の下までゞもいゝ。あそこ迄持つて來てくれりや向うは己が持つて行く」
と余は鎌倉の由井ケ濱で買つた鰯の事などが思ひ出されてどうしても晩酌の膳に上せたいので更に嘆願して見たがもう彼女は取り合はぬ。
「菊屋の犬は喰らひつく。あんな性の惡い犬が何處にあるかい。菊屋の親爺みたやうな犬ぢや。大方菊屋の奴が己等に喰らひつかすのぢやあろ。己等でも人間ぢや。あんな畜生に吠えつかれたり喰らひつかれたりしてたまるかい。おのれ今度吠えて見い。もう勘忍するものか。なぐり殺すぞ。畜生め」
余は大にまごついた。余は菊屋の客ぢやないか。菊屋の犬とは時々ビスケットをやる位の外沒交渉だ。其に僕が菊屋の犬か何ぞのやうに罵倒されるのは少々心外だ。而も此際俄に此場を外す

わけには行かぬ。默つて毒舌を聽聞するより外に致し方が無い。余の傍に立つて居た人々のうちには笑ひ乍ら行つてしまつた人もあつたが、多くは面白半分に聞いてゐた。中にはしば〳〵僕の顏を見て僕がどういふ返答をするか其が聞き度さうな顏附きの人もあつた。

そこへ分配洩れのお藤サンとかいふ婆サンが來て合槌をうち始めた。

「お近サンのいふ通りあの犬は本當に惡い犬ぢや。己れの子供が蛭子樣に詣りに行たらあの犬が吠えやがつて石段から落ちて怪我をした。人の子を怪我さして、其で知らん風をして居るから腹が立つ。あの犬が居り出してから蛭子樣は流行らんやうになつた」

蛭子は漁の神だ。菊屋が彼處に出來る迄はあの岩の上には蛭子神社がある許りで、漁師は舟を岩の下につけて自由に參詣したものださうだ。其が菊屋が出來てから菊屋の裏門がすぐ蛭子神社の鳥居前で、ボス（菊屋の犬）は其蛭子神社も自分の警備區域に加へて漁師が參詣に來れば必ず吠えつくのだから、漁師に取つて不平なのは尤もだ。

默つて今迄船を洗つてゐた一人の男漁師は、

「何處へ持つて來いといふのぞい」

「菊屋よう。誰が菊屋へ行くものかのう」

「さうよ。其れもお錢次第よ。お錢さへ澤山くれりや何處へでも持つて行くわい」

「何んぼお錢をくれても己は厭やぢや〳〵。菊屋の奴はべら〳〵した著物を著て毎日うまいものを食やアがつて、遊んで暮らして居くさる。こちとらはの、汗水垂らして働らいて居るのぢや。何んぢや。帶を背中に載せて來い、帶さへ載せてくりや犬は吠えんぢや。馬鹿な事いふない。帶を背中へ載せて居る奴は樂して飯食ふことを考へとる泥棒ぢやわい」

男漁師はもう何ともいはなくなつてしまつた。それから輕く鼻唄を謠うて船板をごし〳〵と洗ひはじめた。お近サンは尙ほ分配殘りの雜魚の終りの一杯を笊にすくひ上げて、

「サア早く來んかー。もう誰が取らんのぞー。お辻サンかよー」

「アーい」

と若々しい聲がして今迄網の片づけを手傳つてゐた十七八の娘が船から下りて來た。色は黑いが頰つぺたに赤味を帶びた穩やかな顏立ちの娘だ。

「お辻サンもいつやら菊屋の犬に喰らひつかれたのー。今度吠えたらぶち殺してやるがえゝ」

「村の評議にでもかけてどうかして貰はんと困るのー」

ふり返つて菊屋の建物を見ると、三層樓が巍々として蛭子神社の老松と高サを競うて日除けの幕が夕風にはためいて居る。

お近サンは四斗樽の底を叩いて殘つた少し許りの雜魚を笊の中にうつし乍ら、

「己等にの、七子の羽織や羽二重の著物が無いと思ふとるのか。ヘン憚りながらチャンと箪笥にのけてあるわい。著ようと思やいつでも出して著られるわい。ナアお辻サン」

人柄らしいお辻サンはだまつて笑つてゐる許りだ。お近サンは尙ほ毒舌をつゞける。

「旦那衆のやうに、青白い顏をして、べら〳〵した著物を著て、ピカ〳〵光るものを見せびらかして、それでえらさうに人を呼びずてにして、用もないのに此邊をうろついて何してけつがるのぢや。此處は昔から己等の漁場だぞ。仕事の邪魔しくさつたら巡査でも承知せんぞう。旦那衆のやうな人が來るので菊屋のやつが威張るのぢや。あんな大きな家を建てやがつて姪子樣まで取込みやがつてえらさうにしてけつかる。姪子樣は己等の神樣ぢや。己等の神樣に己等が詣るのに犬が吠えるちう法があるか。帶を背中に載せにや詣れぬちう法があるか。菊屋の娘が何處が別嬪ぢや。色が白い許りぢや。色が黑うてもお辻サンの方が別嬪ぢや。旦那衆ナンか菊屋の娘に惚れるより、惚れるならお辻サンに惚れるがえゝ、ナアお辻サンさうぢやないか。ハ、、、あのなま白いところに惚れて菊屋の强つくばりの畏にかゝらんやうにするがえゝ」

お辻サンは顏をそむけた。漁師は皆笑つた。見物人も面白さうに笑つた。余も一緒に笑つた。併し何となく不愉快であつた。

向うの島の肩に銅盤の樣な赤い夕日が落ちかゝつてゐて海も波止場も見る〳〵一面に夕燒けが

し始めた。波止場に一人の旅客が宿屋の浴衣を著て間が拔けたやうな顏をして突立つて居ると、ぼんのくぼに髷を結つた五十餘りの女が其男の前に立つて口尖をとがらして居る。其傍や後ろには男女の漁師が澤山往來して居る。浴衣を著た旅客の後ろにも數多くの人が立つて居る。夕潮が滿ちて來る。大きな舟が一艘大きな白帆を下ろし乍ら數多の船のもやつて居る波止場の中に割り込んで來る。此光景が凡て金色で塗られて居る。振り返つて見ると彼の高臺の菊屋の三層樓も同じく夕燒けの空中に聳え立つてゐる。

（明治四十年九月）

病兒

澤子の病氣が今日はすこしよい。熱は夜中から醒めて今朝はすや〳〵と眠る許りだ。ラムプを消して雨戸を開けると曉の白い光線が殆ど血の氣の無い顏の上に落ちる。

澤子は今年五つだ。生れた年に百日咳にかゝつたのがもとで、其から非常に病身な子になつて、肺炎をやる、腹はしよつ中惡くする、一年の半分は病床で暮して居る。子供ながら病氣になれて、藥はいつも大人しく飲むべきもの、體溫器を見れば腋に挿むべきもの、吸入器の音がすると口を開けねばならぬものと心得て居る。熱があつて苦しい時も老人のやうに靜かにして、醫師の命令、看護人の指圖には一つも違はず言ふ事を聞く。

澤子の兄弟は今年十になる姉と八つになる兄とまだ乳呑子の弟とがある。白井の家族は此四人の子に親夫婦、其に下女が二人、都合八人の暮しで、澤子が壯健な（とまでは行かずとも先づ無事でゐる）時は家庭は馬鹿に賑かで夕飯の時などは主人の勉（つとむ）は一本の酒に醉うて子供をからかひ始める。先づ姉の子の御飯をたべて居るのをぢつと見て居ると思ふと、急に兩方の手を自分の顏

の前に持つて行つて前で大きな輪をこしらへる。それから又一本の箸を大きな握り拳で握つて頭の天邊に載せる。其意味は今數子（姉の子の名）が湯に入つて歸つたところで、おさげを無造作に束ねて頭の上でつぐねたのを母の簪で止めて居る、其風がをかしいといふので眞似をして見せるのである。數子は、

「いゝのよ。私は口が大きくつてよ」

とツンとして「いゝわ〳〵〳〵」と茶碗で顏の下半分を隱くして、眼をパチクリ〳〵させながら白眼をして父を睨めつける。其剽輕な顏がをかしいので皆が一度にどつと笑ふ。

「お父さん、僕の口は小さいでせう」

と明（あきら）（男の子）は眞面目な顏をして口を突き出す。

「お前は父さんに似てゐるから小さいけれど、姉さんは母さんに似てゐるので大きいのさ」

といふと明は又熱心に母の顏を見て、

「お母さんの口は大きい許りで無く唇が厚ぼつたいのね」

と何處迄も眞面目だ。

「餘計な事をいはずに早くお食（あが）りなさい。まだ一膳も代らんぢやありませんか」

と細君は明を叱つて、「お父さんからしてあんな事を仰しやるものだから子が親を馬鹿にするのだわ」とおなかの中で怒つてゐる。勉は徳利の底の酒を盃につぎながらニタ〳〵と笑つてゐる。斯んなたあいの無い事をして皆が樂しい晩餐をたべる。澤子も斯ういふ時は姉に並んでお行儀に坐つて、初めからむッつりと一言もいはず、父の顔を見たり、又母の顔を見たり、鶏の肉の柔い白い處が特別に選り出して澤子の前の皿に入れてあるのに、ろくに箸もつけずに、漸く輕く二膳ほどのお茶漬を食べる。

「澤子の殘したの、僕貰つていゝ？」

と明は、澤子が箸を置くや否や直ちに皿の中の白い肉に眼をやりながらいふ。姉の數子は弟に先鞭をつけられて「しまつた」といふやうな顔をして、これも其剽輕な眼をくるりつと廻して其皿の肉を視てから明の顔を見る。鶏を煮て食べる時澤子はいつでも白いところのよい肉を貰ふ。數子も明も白いところは滅多に貰へない。「おまへ達は元氣だから赤いところでおこらへなさい、澤子は御病氣だからね」と因果をふくめられて、不平ながらも二人の姉弟は赤いところで耐へて居る。さうして澤子の食べ殘す白い肉を二人はいつも熱心に待設けて居るのである。明は、

「ねえ、僕貰つていゝ？」

と姉に故障を申し込まれぬ先にと急いでもう其皿に手を挂けようとすると、

「いやだよう。私のを取つちやいけない」

と澤子はもう泣きさうになつて大きな聲を出す。明は驚いて手をひつこめる。此澤子の泣聲ほど明に取つて恐ろしいものは無いのである。明は一日に二三遍は姉と喧嘩する。多い時は四五遍もする。其度いつも叱られる事は叱られるが先づ姉と五分々々だ。自分が無理を言うて喧嘩になる時の方が寧ろ多いのであるが、それでも、

「姉さんでゐて、何といふ事です。いゝえ明がいけなくつても、其をこらへて居ないのが惡いです」

と姉の叱られる場合が多い。斯ういふ時などは大に意を強うする。併し一旦澤子との觸接になるとどんな場合でも明が頭ごなしに叱られる。「澤子は病氣だからいぢめてはなりません」といふ事は明け暮れ聞かされて合點してゐるけれど、いぢめるのでも何でも無い、澤子が無理を言ふ事がある、其で一寸反抗せうとすると、澤子はすぐ泣き聲を振り立てゝ父母の援助を待つ。果たして父か母の聲がして、

「なぜさう澤子をいぢめます。明、こゝへ御出で。お前はもう學校の一年生ぢやないか。自分の妹をいぢめていゝと先生が仰しやいましたか」

などゝ手きびしい談判を受ける。一寸理窟はわからぬが、其では蟲が承知せぬので、

「だつて澤子が……」
といひかけると、
「だつてがいけません。いつでもお前はだつて〳〵いふ。少々澤子が無理を言つてもお前は兄さんぢやありませんか。其は澤子は御病氣なのだから、ね、此間のやうにお熱がして苦しんでゐるのを見ると可哀さうでせう。ね、だから可愛がつてやらなけりやなりませぬぞ」
と仕舞にはしみ〴〵と母がいふ。明も澤子の熱のして居る時は可哀さうに思ふ。それでウン〳〵と點頭して聞いて居ると、
「ね、わかつたでせう。わかつたらいゝ子だ〳〵」
と母は無理に明をいゝ子にしてしまふ。どこやら腑に落ちぬところはあるけれど、要するに澤子に逆らはず、澤子の言ふなりにして置くといゝ子なので、つまり澤子の方が自分よりえらいもののやうな氣がして明は觀念する。
此時も其の力强き泣き聲を立てられたので明は仕方なしに手を引くと、澤子は皿を自分の方に引き寄せて所有權を一層確實にする。それで食べるのかと見て居ると食べるのでは無い。只兄や姉にやるのが厭なのであるらしい。父や母は其を見てゐて、「澤子は妙にねぢけたところがあるよ」と心の中で嘆息するのであるが、其病身な事を考へると只可哀想になつて叱る事が出來ず、

知らぬ風をして澤子の我儘を通させて置く。御膳が濟んで後此兄弟三人で爭つた白い肉はお皿のまゝ空しく臺所に運ばれてしまふのである。
其でもこれは澤子が兎も角元氣な時なので、喧嘩をしたり、叱られたり、泣いたりしても、一家族が何處となく陽氣だ。お文（子守）お德（お三どん）なども、御飯の長い間二郎（乳呑兒）をおぶつたり、お給仕をしたりしても其時の方はたゞ不平なだけで陰氣で無いから辛抱が出來るが、一旦澤子が病氣したとなるとサア大變だ。家內中が悉くにがり切つた顏になつてしまふ。其は一番に主人の勉が晩酌もせず一圖に介抱にかゝつて、細君や下女が氣が利かぬことを口ぎたなく罵り始める。
「第一あれ程よくなつてゐたのが又惡くなつたのはお常（細君）の不注意からだ。何故此寒いのに三時過ぎに表に出した。こんなに皮膚の弱つてゐる子を今日のやうな風の吹く日表へ出すといふのが抑〻間違ひだ。何、醫者がすこしは出さ無いと益〻弱くなるといつた。それは當り前だ。それをいけないといふのでは無い。今日のやうな日に出すのをいけないといふのだ。それも三時前の日のよく當つてゐる時ならまだしもだ。日暮迄出して置くなんて、怪しからんぢやないか。お文もいかん。奥さんはつい二郎を見て居ると油斷する。さういふ時分はお前が氣をつけてくれなくつちやあ困る」

など〻際限も無く愚痴を並べる。次の間で數子と明とが何かを奪ひ合つて喧嘩する。勉は聲を荒らゝげて二人を叱り飛ばす。併し熱のして居る澤子が恐ろしさうに眼を開けて父の顏を見ると急に優しい顏になつて、

「どうだ苦しいか。い〻子だ〳〵。今お醫者樣が來て下さるから大人しくして待つてゐるのだよ」

といひ乍ら額に手を當て〻見る。よほど熱がありさうだ。

「體溫器はどうした、體溫器は。又置き場處がわから無いのか。不始末千萬な話だ」

とうろ〳〵する細君を頭から叱りつける。一家中戰々兢々として急に灰色の天氣になつたやうな氣持だ。

細君は二郎に手を離すことが出來ぬ。澤子の介抱は自然勉の責任になる。又實際澤子を今日迄生存せしめたのは自分の看護の力一つにあることだと勉は自信して居る。澤子も亦母よりも父になつついて居る。朝會社に出る時澤子は、

「お父さん何處へ行らつしやるの？」

と聞くのが常である。

「會社」

と勉は答へる。

「さう」

と澤子は淋しさうにいつて默つてしまふ。勉は後ろ髪を引かれるやうに思つて出勤するのである。それから玄關に靴を脫ぐ音が聞こえると澤子は、起きて居る時ならば玄關の障子をあけて淋しい顏に笑を湛へて父を迎へる。病氣で寢て居る時などは殊に耳を峙て〻其靴音の聞こえるのを待兼ねるのである。勉のポッケットからは西洋人形がぱくりと眼を開けて現れ出る事も珍らしく無い。

澤子の病氣の事になると勉の神經は驚くべく過敏になつて居る。夜遲く外から歸る時などは、今夜は熱もせずに寢て居るであらうか、又熱が出て苦悶して居るであらうか、といふ事を彼は常に考へつ〻歩く。實際澤子は晝間までは機嫌よく遊んでゐても夜になつて急に發熱したり、寢る時は何事もなかつたのが夜中から俄に苦しみ出したりすることが多い。今夜歸つて見て澤子が無事でゐて呉れ〻ばよいがなアといふ事は、夜遲く歸る時などは殊に勉の氣に挂るのである。さうして不思議なことは自分の家の有る暗い横町に這入ると其瞬間に彼は澤子が今夜病氣であるか無いかといふ事を直覺する。横町に這入ると一番に林といふ家の軒ラムプが見える、其軒ラムプのガラスが時によると妙に曇つて居る事があつたり、又横町に這入るとすぐ道の中央に水道の鐵板

がはめてある其を踏むと時にいやな音がして身に入むやうに覺える事があつたり、犬が十匹許り行列を作つて行手をふさぐ事があつたり、又二十日過ぎの形の惡い赤い月が丁度往來の正面の坂の上に誰のやうに大きく出て居る事があつたりする。さういふ時に、ァ、脈やだナァと勉は身内が震へるやうに感ずる。「嗚呼澤子は今晩また苦しんでゐるな、又熱が出たらしいな」と脈やな氣持になつてしまふ。さうすると水枕をすけて頰を少し赤くして（平常は青白いのが熱がする時許り少し赤くなる）うと〳〵と眠るでも無く起きて居るでも無く、敷き流してある勉の寢床の傍に淋しく寢て居る澤子の姿が目の前にちらつく。勉は大急ぎで自宅に歸るのである。

現に此の二三日前の夜も遲くなつて歸つて來て、自分の家の門を開けると玄關に薄暗く灯がともつて居る、其灯が馬鹿に陰氣で暗い。脈やだナァと思ひ乍ら迎へに出たお文に聞くと、

「又お孃樣が少しお熱が出ましたやうです」

と恐る〳〵いふ。座敷に行つて見ると細君は眠むさうな顏をして澤子の枕許に坐つて氷囊で頭を冷やして居る。

「どうしたのだ」

と勉の顏色はもう變つて居る。

「どうもしないのに、今日晩の御飯を食べて機嫌よく遊んでゐたんですが、只無暗とお茶を飲み

たがつて、『澤山おぶ飲むでせう』と自分でもいつてたんですが、其内何だかごろ〳〵し始めたものですから額を壓さへて見ると又少し熱があるでせう。其から驚いて臥かしたんですが、本當にどうしたんでせうねえ。斯う弱くつては仕樣が無いぢやありませんか」

と細君は今更のやうに嘆息する。斯う出られると勉の方が受身になる。

「本當に困つてしまふ。いくら注意してもやつぱり駄目かなァ」

と澤子の顏を見ながら、

「此子は實に不仕合せな子だナァ、一年の半以上病氣して苦しんで居なけりやならんとは、どうしたといふんだらう」

と細君と同じやうな事を言ふ。

「本當にねえ、あんなに痩せてしまつてゐる」

と細君の眼はもううるんで居る。

「醫者に見せたかい」

「えゝ、八時頃でしたらう來て下すつて、まだ今のところぢやはつきりわからんが矢つ張りインフリュエンザらしいと仰しやいました。それで此頃のインフリュエンザは肺炎になるのが多いから氣を附けぬといけないと仰しやいました。インフリュエンザの肺炎は腦につくさうですからね」

「咳をするね」
と澤子が寢てゐながら咳をするので勉は脈やな顏をする。
「咳は今が初めてゞすよ」
「さつきからしてゐたのが氣が附かなかつたんだらう。己が歸る迄居睡りでもしてゐたんぢやないか」
「又あんな事」
と細君は鼻をつまらせて默つてしまふ。暫く二人とも默つて澤子を見て居る。其眼はいつか向うに枕を並べて寢て居る他の三兒に及ぶ。
此時「アー〳〵斯んな多勢の子持になつたのかなア」といふやうな感じが二人の胸に同時に浮ぶ。姉の數子は大きなリボンをかけたまゝ枕を外づして例の大きな口を開けて寢て居る。少女界を讀みながら寢たのであらう右の手には雜誌を持つたまゝである。明は兩方の手をウンと延ばして蒲團の上に投げ出して居る。
「明は今日深見さんのうちで運動會があるとかいひましてね。學校から歸るとすぐ出かけていつて暗くなつてから歸つて來たんですよ。それでね、駈つくらに二等賞とかだつておもちやのメタルを貰つて大喜びで歸つて來ました」

「此前學校の運動會の時にも二等賞か何かであつたぢやないか」
「あれは綱引か何かで勝つたんでせう」
「さうだつたかな」
「何でもやり出すと熱心ですから、此間頃は毎日のやうに駈つくら許りしてゐましたつけ。何にでも熱心な點は感心ですね」
「さうサ。其點は己等よりえらいよ」
「數子にあの熱心なところは無いですけれど、學校の事は矢つ張り好きらしいですよ。一年頃には不出來だつた算術が此頃は大變よく出來るやうになりましたよ。まア、あの寢相はどうでせう」
「兎に角二人共元氣なのが何よりだ」
といつて勉は又ぢつと澤子を覗き込む。もう下女は前きに寢かして十二時頃迄二人は澤子の枕頭に坐つて交る〳〵氷囊で頭を冷やしてやつてゐる。二郎が泣き出したので細君は蒲團の中に這入り添乳しながら目を開けたり塞いだりしてゐるうちもう小さい鼾をかいて寢てしまふ。勉は細君の寢顏を見て脈やな顏をする。女といふものは暢氣なものだナア、といつも斯ういふ時には思ふのである。さうしてもつとしつかりした、責任を重んずる立派な細君が欲しいやうな心持がする。再びずらりと枕を並べてゐる子を見渡して大きな溜息を洩らす。併し母の乳房を小さい兩手で壓

さへて時に思ひ出したやうに夢心地で飲んでゐる二郎の、其小さい手をぢつと見入つた時は何事をも忘れてほゝゑまれる。

氷を取替へて又澤子の頭を冷やす。時計が一時を打つ。頭がぼんやりして來る。體温器を挿んで熱を計つて見る。最前細君は醫者の來た頃は九度五分もあつたといつたのが今は八度二分程に下つてゐる。

尙暫く氷嚢を握つてゐたがだん〳〵頭が重くなつて來て覺えず居睡りをする。八度二分位に下つたら水枕だけでもよからう、と考へて氷嚢は傍への盆の上に置いて著のみ著のまゝで自分の蒲團の中に這入る。さつき細君が自分を見ながらやつたのと同じやうに澤子の方を見ながら暫くの間開けたり塞いだりしてゐた目がいつの間にか堅く閉ぢてしまふ。

翌朝起きて見ると澤子はまだ熱が高い。昨夜氷嚢で冷やしてやらなかつたのが何だか心殘りなやうな可哀想なやうな氣持になる。其日は會社を休んで病人に附きつきりにしてゐた。其日もまだ熱が下がらん、其夜も居睡りながら何や彼やと介抱をする。其夜又下女や子供を寢かして後夫婦の間に斯んな會話がある。

「今度の正月著は數子の古いのを澤子に下ろして、數子の方に新しいのを買つてやり度いと思ひますが」

勉はぢつと澤子の方を見ながら、

「澤子の方に新しいのを買つてやらんか」

「なぜですか」

「ウヽ」

と勉は口籠つてゐたが、

「こいつは到底駄目だぞ。もう正月も今度だけかも知れんから新しいいゝものを著せてやらうぢやないか」

といふ。細君は、

「マア、そんな事。あなたは何んでもさう思ひ切りがよすぎるから……」

といつて、

「まさかそんな事は無いでせう」

と澤子の顏を見る。目に涙が一杯たまつて居る。

「サア、ありはすまいが……」

と勉も口ごもつて二人は暫くだまつて居る。

其夜も前夜と同じやうに細君は二郎が泣くのを機會に寢床に這入り、勉は著のみ著のまゝで夜

中から朝までぐつすり寢る。

本篇の初めに澤子の病氣がすこしよくなつたといつたのは其翌朝の事だ。夜中から熱が醒めた爲め今朝は只疲勞して呼吸も聞えぬ程に安眠して居る。勉は此日は會社に出勤する。

歸つて見ると澤子は厚著をした上に更に小さいドテラのやうなものを著て蒲團の上に坐つて居る。勉が此室に這入るとき開けた襖のかげから裏庭が少し見えたのを面白さうに體を斜にして覗き、

「お庭が見えたよ」

と珍らしさうにいふ。勉は氣がのび〳〵して、自然家人に對してもやさしい口を利き愉快さうな顏をするので家族中が又色めき始める。姉の數子は次の間でお箏を溫へて居る。コロ、コロ、テツ、テツ、と響くのが晴れて雀の物語といつたやうに勉の頭に響く。

「今日は大變元氣もよろしうございます」

と細君がいふ。しかし小さい箱からリボンを出したり入れたりして、すこし草臥れると後ろに積んである蒲團に凭れて小さい首をかしげて目を塞いでゐる。其の有樣を見ると哀れにも衰へて居る。

「あなた、澤子の唇を見てやつて下さい」

と細君がいふ。勉は初めて氣がついて唇を見ると、大方細君が色の惡いのを哀れに覺えて附けてやつたのであらう、臙脂が濃くついて居る。何だか顏の色がいつもより一層青白いと思つたのは其臙脂の所爲であつたのだらう。

「お父さん、植物園に伴れてつてね。今度はだましては厭やよ」

と澤子は父を見上げていふ。此前の病氣の時、病氣が癒つたら植物園に行く約束をして置いたのであつたが、其後勉の暇な日には天氣が惡かつたり、此日曜に行くといつてゐると急に勉に用事が出來たりして行きそびれてゐるうちに又今度の病氣になつたのであつた。

「ア、今度はきつと行かうね」

と答へて、天氣の暖かない〻日があつたら會社を休んでも伴れて行つてやらうと思ふ。

「まだおきいき癒らないの。あしたは癒るのね」

と澤子はいふ。

表に子供の遊ぶ聲がする。窓のガラス障子のところに澤子をだいて行つて見せる。澤山の同じやうな子供の中に澤子とおない年のお隣の貞代さんが特に澤子の眼にとまる。大きなお母さんの下駄を履いて、頰つぺたを眞赤にして、轉んでは起き〳〵勇ましく寒風の中を走つて居る。勉は其元氣旺盛な貞代さんを美ましく妬ましく思ふやうな心持がするが、同時に獅子つ鼻のおでこの

下品な顏立を賤しむやうな心持もする。
「あんな下等な生れつきだから元氣なのだ」
といつたやうな負惜みが心の底で起る。澤子は何よりも貞代さんの下駄を履いてゐるのが美ましくて仕樣が無い。
「表に行き度い」
といふ。
「そんなわからん事をいつてはいかん。御病氣が本當に癒るまでは駄目です。癒つたらいつでも行つて貞代さんなんかとお遊びなさい」
「お下駄も履いて？」
「ア、お下駄も履いて！」
澤子は下駄が大好きだ。現に枕頭に赤い鼻緒のついた新しい下駄が並べてある。これは昨日買つて貰つたのだ。それから澤子は急に下駄が履き度くなつて、疊の上で其下駄を履いて暫く遊んでゐたが、すぐ草臥れて又蒲團の中に這入る。
それから澤子は日に增し少しづゝよい。細君は或日二郎をお文におぶせて一寸一走り行つて來るから留守居をせよと命じて置いて三越の賣出しに行つて友禪を一反買つて來た。これが數子の

春著になるので、矢張り細君の原案通り數子の古いのが澤子のになることになつた。もう斯う癒りかけて見ると、此間枕頭で夫婦が話したやうな心細い事は考へなくなる。一家が何となく陽氣だ。
さうすると明は又澤子に屢ゝ大きな泣き聲を立てられて閉口して居る。「だつて澤子が……」といひ度くなるのを辛抱して而も內々は、「父さんでも母さんでも澤子ばかり可愛いがつて僕はすこしも可愛がつて呉れない」と不平に思つて居る。明ほどは澤子と交渉の無い數子も此間、
「私は死んでしまつたつていゝのよ、私が死んだつて澤子が居ればいゝぢやありませんか」
と細君に言つて居た。細君は、
「マア、あんな事をいふよ」
といつもの通り厚い唇を尖らして驚いてゐた。或晩又少し澤子に熱があるやうだ、と勉が留守だものだから細君は一方ならず騷いで、例の體溫器を挿んで見たが幸に熱は無かつた。一家が又灰のやうな空氣にならうとしたが漸く事無くして濟んだ。けれども其から二三日して澤子は又少しづつ下痢を始めて、元來十分で無い食慾が更に減じたやうに見える。只醫者が來て見て今度はたいした事もあるまいといふので皆僅に心を休めて居る。
勉は續けて會社に出勤して居る。暇な時はゆつくり晩酌をして又子供を相手にして居るが澤子

が少し加減が悪くて食卓に列せぬ日は甚だ意氣が昂らぬ。夜遲く例の横町に這入つて林のうちの軒ラムプを見たり水道の鐵板を踏んだりして氣を紛らして居る事も少しも前と變らぬが、其林の向ひ側になつてゐる方の古家がすつかり壞たれて、今度新しい借家が建つ事になつたので、何だか此横町が明るいやうな氣持がし出した。同じ軒ラムプも同じ鐵板も以前とは少し違つた感じになつて、澤子の健康もこれを界に恢復するかも知れぬと思つて見たりして勉は自ら慰めて居る。

（明治四十一年一月）

田舍今川

城下から一里許りある海水浴場にもう彼れ是れ二十日許りも滯在してゐた。或日他人の打つ碁も見飽いたから又一つ潮でも浴びようかと手摺りに凭れて外を眺めて居ると恰も今潮を浴びて歸つたらしい婦人が二人の子供の手を引いて余の前を通る。ふと見ると知つた顏だ。向うも氣がついて「おや」と聲を掛ける。こちらも「あゝ棚橋の未亡人か」と驚いて挨拶する。

それから二人の子供は未亡人の連れらしいまだ十六七の娘の人が向うへ連れて行つたので未亡人は立つたまゝ暫く話す。「本當にお久しぶりでした事ね」と細帶だけ締めてだらし無く開いて居つた胸を搔き合せるやうにして余の顏を見る。「早雄さんがお亡なりになつてからもう何年になりますかね」「あの下の子が生れた年でしたからもう六年になります」「さうですか早いものですね。あれから間も無く此地へお歸りになつたのでしたかね」「さうでございますよ」と未亡人は手摺りの上に兩手を突いたまゝぢつと海面を見る。棚橋早雄は內務省の高等官になつて間も無く死亡し、未亡人は他鄕の人ではあるが棚橋の故鄕の此地へ退いて二人の子供を養育するに餘

念が無いと、斯ういふ噂は東京で聞いて居たが、余は棚橋氏の葬式の時に未亡人に逢つて以來疎遠に過ぎてゐた。「それで今は何處にお住居ですか」「お舅さんのうちでお世話になつてゐます」「さうですか」と余は覺えず同情する。此棚橋氏の嚴君は椿山先生といつて此地方では有名な漢學者で今も尙小さい髷を貯へてゐる。其に棚橋氏と此未亡人とはもと戀中であつて父母の許しも受けず結婚したといふのが尠なからず嚴君の機嫌を損じたのであるが、其でも棚橋氏の歿後は氣が折れて未亡人と二孫とを此地へ呼び迎へることゝなり未亡人も非常なる決心を以て其に應じたのである。「先生のお膝許ではさぞ……」と余は言ひかけると未亡人は彼の連れらしい娘の人や其他四邊に氣を兼ねるらしく勉めて話を外らす。「あの宅に居りました花といふ女中が其後貴方のお宅へ上つたと聞きましたが本當でございますか」「えゝ、宅へ來まして二年も居りましたが國へ歸りました。何でも結婚したらしいです」と余は返辭をし乍ら此のお花の口から聞いた未亡人の噂を思ひ出す。其はいつでもお花が口癖のやうに「それは〳〵奥樣と旦那樣とお中がよろしいのでございますよ。よくおふざけなさるのでございますよ」といふのが常で或時は斯ういふ話をした事もある。「竹坊さまの麻疹をなすつた時でも、もう少し奥樣が氣を附けてお上げなさるといゝと思ひましても矢張りお役所へお出掛けなさる迄は旦那樣につきつきり、おひけになつてからもつきつきりで、竹坊さまの御介抱は私一人で致しました位ですよ」などと大袈裟なことを

いつた事もある。半分に聞いても夫婦中のよかつた事は想像されるし、殊に未亡人はもと貞淑といふよりは一體の擧措が華やかで寧ろはしやいだ方の人であつた。さう思つて見るともう三十を一つか二つは越したらうと思はれるが其でゐてまだ若々しい處がある。大柄な貸浴衣をぞんざいに引掛けてゐる處など流石に艶である。それがよくまあ嚴格な棚橋先生の膝下で六年間も辛抱をして來たものだ。けれどもまた未亡人にもなか〳〵確りした處があるらしい。棚橋氏が死んだといふ通知を受けた翌早朝赤十字社病院に行つて見ると、棚橋氏の死骸は一夜死亡室に置かれて親戚の人は皆通夜をしたらしい。棚橋氏の令弟の喬君が僕に向つて「どうも死亡室なぞいふものは實に不愉快なものだ。何だか昨夜は氣味が惡くておそはれるやうな心持がした」といつた。すると細君が「そんなに恐くつて？　私はちつとも恐くなかつたわ」と確りした聲でいつた。お花は「御夫婦で緣日などへ行らしつたお歸り暗い路を通る時、犬か猫かゞごとりとさしても奥樣は仰山にびつくらなすつて旦那樣におすがりなさるし、夜分なぞ十時を過ぎて旦那樣がお歸りにならんと恐い〳〵仰しやつて私をお傍からお離しなさらんのですよ」といつた事があつた。其に比べてあの時の事を思ひ出すとまるで別人のやうな感がする。棚橋氏の屍を守つた一夜が未亡人の心のうちに如何なる變化を起こさしめたかは想像の外に在る。忘れもせぬ矢張り其朝竹坊が何かわからぬ事をいつて地團太を踏んで怒る。他の人は皆いろ〳〵にいつて慰めるが更に效が無い。

其時未亡人はと見ると當歳の下の子を抱いた儘ぢつと竹坊の騒ぐのを見つめてうつとりと考へてゐた。余は其顔を哀れと見て今に忘れぬ。多くの婦人は夫を亡くした時初めて一人前の人間になるものだといつた人があるがさうかも知れぬ。などと考へてゐると未亡人は突然、「私の住まつてゐました弓町の家は今でも其儘でございますか」と聞く。「えゝ矢張りあの儘ですよ。いつか通つた時は三島とかいふ表札が出て居ました。あの邊は一體に變らないです。さう〳〵お隣りの山根といふうちも矢張り其儘ゐるやうでした」「さうですか、其からお向うの藤野さんはどうなすつたでせう。あのよくお琴を彈いてらしつたお嬢さんはもうおかたづきになつたでせうねえ」と獨り言のやうに言つて涼しい風の吹き崩す鬢を掻き上げる。其から東京の何處がどんなに變つたとか彼處に斯ういふ建物が出來たとかいふ話をすると未亡人は熱心に其を聞いて、「まあ大變な變りやうでございますことね。あゝ暫く振りで東京のお話を聞いて面白うございましたこと」といふ。一度引締めた浴衣の襟を又風が吹き擴げて白い膚を見せる。未亡人は其に構はず兩手をあげて束髪のピンを抜いては差し抜いては差す。白い腕も露はに氣も心も延び〳〵とした樣に見える。「貴女此處へは度々いらつしやいますか」「いゝえ」と未亡人は思ひも寄らぬやうな口振りで「此地(こちら)へ歸つてからまだ二三度ほか參りません。今年も今日初めて參つたんですよ」といふ。「さうですか、それではあまり外出もなさらんですか」「はい、用事の外は滅多に出た事は

ありません。今日は珍らしく親類の方に誘はれまして……斯ういふ處へ來ますと氣が延び〳〵とする上に圖らず東京のお話なんか伺つて……」といつてぢつと余の顔を見る。氣がつくと余は褌一つの眞裸だ。裸の男とゆるく浴衣を纏うた婦人との對話も斯ういふ場處であればこそいゝやうなものゝ少しはいかゞはしいと四邊に氣を配つて見ると男女皆思ひ〳〵に勝手な行動をして居て更に我等に意を留める者も無い。未亡人は美しい眼に尙ぢつと余の顔を凝視して、「あなたが奥樣をお貰ひなすつたのはたしか宅が亡くなります一年程前でございましたのね」「さうです」「お子さんはもうお幾人りでゐらつしやいます」「もう三人です」「おやさうですか」といつて少し潤ひを帶びた眼を一層瞠つて余の顔を見る。女にしては稍ゝ濃過ぎるかと思はるゝ程の濃い眉からなつかしい匂ひが溢れるやうな心持がする。大きな白帆が順風を孕んで輕く飛ぶやうに松林にかくれる。其白帆の過ぎ去つた後に小さい石炭船が二艇艫を合せて漕ぐ。船頭は體を曲げ腕を延ばして漕ぐが船脚が重さうで纔に波の上を軋つて居る。余は其船を見て居ると未亡人は獨り言のやうに「私も最後は東京で住み度いと思つてゐるのですが、……」といひ掛けて力なく默る。余は「竹雄君が高等學校へでも這入る位になつたら、どうです東京へいらしつては」といふ。此時「おつかさん」と手を引き合つて走つて來た兄弟を見ると兄の竹雄の方もまだ八つか九つの幼兒である。此兒が高等學校に這入る迄にはまだ十年の歳月がある。未亡人は「斯ういふ處で無けれ

ば斯んなお話も出來ませんでした。本當にいゝ處でお目にかゝりました。連れもありますから」と漸く手摺りを離れ乍らいふ。余は頭に卷いて居つた手拭を取つて「どうも失禮しました。いづれ又」といふと、未亡人は「本當にいゝ處でお目にかゝりましたこと」と同じ言葉に力を入れて繰り返し微笑を殘して去つた。

（明治四十一年八月）

興福寺の寫眞

此間長女が斯ういふ事を聞いた。

「お父さんは興福寺の寫眞は持つてらつしやらないの」

「興福寺の寫眞も一二枚は持つて居る。法隆寺のなら澤山持つて居るが」

「法隆寺はまだ詳しく習はないの。あのお寺は聖德太子がお建てになつたんですつてね」

「さうだよ。法隆寺を斑鳩寺ともいふし、聖德太子を斑鳩王子ともいふ。斑鳩といふのはあの邊の地名なのさ」と長女が別に聞きもせぬ事まで言つて余はなつかしい此古寺の記憶——曾遊の記憶を胸に喚び起こした。それからまた斯んな事まで話した。

「法隆寺は千三百年前に建つたお寺で、同じ時代に出來たお寺は外にも幾らかあるが、其時分の建物が其儘に殘つて居るのは此お寺だけなのだ。千三四百年といふと、まあ三十年に一代更ると すると三四の十二、三三が九、さうだねえ、概算四十三代程前に建つたお寺だ」

長女は耳を欹てゝ聞いて居たが斯んな年代の勘定などたいした興味も無さゝうであつた。其時

傍で聞いてゐた妻が、

「千三四百年といふと大變昔のやうですが、代にすると僅か五十代足らずのものですかねえ」と暢氣らしい調子で口を挿んだ。

「興福寺の寫眞をどうかするのかい」と余は話を戻して聞いた。

「寫眞でも繪葉書でも有るものは持つて來いと先生が仰しやつたの。其一枚か二枚あるのを學校へ持つてつてはいけない？」と長女は今年十二の年相應に媚びた調子で斯う言つた。長女の頭の中では其一二枚の寫眞を教場へ持つて行つて、自分の家でも斯く所持して居つたといふこと、並に其命令を忠實に遵奉した事を教師の前で聊か誇とせうといふやうな考が主な部分を占めて居るやうであつたが、余は今日に於て余の長女――まだほんの子供と思つて居た長女と共に興福寺とか法隆寺とかに就ての談話――例へ極めて單純な談話でも――を交換せうといふことは豫期しなかつたので、幽かな驚きと、淋しいやうな懐しいやうな一種の興味を呼び起こして覺えず熱心に話すのであつた。

「持つてつてもいゝさ。お前奈良あたりへ行つて見度いか」

「あゝ行つて見度いわ。伴れてつて下さいな」

「いつ」

「今度の夏休に」

余は此長女が今少し年を取つて後ち、余が屍は此地に埋め度いとまで常に戀ひつゝある大和路を伴つて歩いて、荒廢した古寺や苔に包まれた古宮や彼方の舊蹟此方の名所を指し示してこれ等のものに據つて余の心の中に湧かす抑へ難き感情を話す時、長女の心も余の心と共に動き共に躍る事を想像すると、其處に名狀し難い一種の滿足と一種の哀愁を覺えるのであつた。詳しく言へば余の確實なる後繼者――余の肉體のみならず精神をも傳へたる後繼者――後繼者といふよりも寧ろ余の分身といふ方が適切なものを有するといふ滿足と、斯る分身を有するに至りて余の身體及精神は漸くにして灰滅に近づきつゝあると感ずる哀愁とを覺えるのであつた。

此時余は料らずも昨年の秋長兄が國許から上京した時、「これをお前に土産に持つて來た」と言つて余に呉れた父の遺筆の事を思ひ出した。其は父が維新前に君侯に隨伴して京都にあつた時、少閑を得るに從つて西山、東山を跋渉し、或時は叡山を越えて坂本に出で其から唐崎、三井寺を經、石山に遊んで歸つた事などを詳細に認めて、國許の老母――余の爲には祖母――に送つた文章であつた。

余の父は余が十八歳の時六十六歳で歿した。余は父の晩年の子で、長兄と余とは二十歳も年數に相違があるのであるが、長兄は此紀行文に就て斯んな話をした。

「何でもまだ己が十四五の時分の事で、お父さんから此文章が手紙の中に這入つて來たのをお婆さんが眼鏡を挂けて讀んでおゐでたことを子供心に覺えとる。もう隨分古い話よ」兄は其時分の光景を古びては居ながらも印刷の鮮明な畫でも見るやうに頭の中に描き出すのであつた。余は其古畫には興が薄かつたが、此紀行文を讀んで見て、其當時父が所謂荒廢した古寺や苔に包まれた古宮や名所や舊蹟やに就て湧かした血汐と同じ血汐を余は此十年來屢〻其地を踏む度に湧かしつつあつた事に氣がついて、父の身體は已に朽廢しても其骨肉は尙余等の體となつて存して居り、父の胸に躍つた血汐は尙余等の胸に躍りつゝあると考へて、余は少なからざる興味を喚び起こしたのであつた。

其時の事を回想して暫く無言であつたが急に氣がついて余は長女に斯う答へた。

「あゝ伴れてつてあげよう。だけれどもう少し大きくならねば……」

「いくつになつたら」

「さうだねえ、女學校でも卒業してからがよからう」

「あらあ詰まらないわ。まだ容易ぢやないのね。私明日でもいゝのだけれど……」

此日の問答はもうこれ限りでお終ひになつた。余は此機會に今少し余の熱情を此十二の少女の胸に吹き込んで遣り度いやうな心持がせぬでもなかつたが、止み難き所用があつたので中止し終

日繁忙な仕事に携はつて其日は過ぎた。それから今日迄十餘日になるが匆忙としてゆつくり此事を思ひ出す暇もなかつた。

今日は日曜であつた。學校が休みの爲め子供達もいつもよりは朝寢をした。余も今朝は原稿を書く必要も無く社も休みなのでいつもの朝寢を大ビラでした。それから家族中で食卓に就いて飯が濟んだから余は今朝床の中で見た新聞の見殘しを又見た。長女は母の命令で襷掛をして小さい腕を出して臺所の手傳ひをした。

それから一時間許りの間は何をするといふ事もなく經つた。余は倚机の前にも坐らずぼんやりして居ると次女が余の耳元に來て囁くやうに斯んな事を言つた。

「姉さんがねえ、さつきの續きはどうですか?」これは今日長女が次女を伴れて千駄ケ谷の某氏の家へ遊びに行つて來るがいゝかと今朝食卓に就いた時余に尋ねたのを、余は生返辭をして其儘にして置いたのを、今次女を以て更に要求に及んだのである。

「電車が込むと危いからお前等二人限りではいけない」と言つて余は一應排斥したが、此千駄ケ谷行きは既に半月以上宿題になつてゐるので、此儘握りつぶすのも可哀想であるところから、

「それでは父さんが送り迎へをしてやらう」といふ事にして遂に要求を容れる事にした。

それから長女は固より今年七つになる次女も、髪を結つたりリボンを挂けたり著物を著替へた

り、お辨當のお鮓を買ひに行つたりして暫く大騒ぎとなつた。余は此騒ぎを眺め乍ら相變らずぼんやりとして何となく暢氣な日曜日の空氣に嘯いてゐた。

それから仕度が濟んで三人で土手傳ひに市ケ谷見附へと志した。二人の娘は蝙蝠傘をさして嬉嬉として余より先に立つて行つた。余は鮓の折詰を抱へて恰もお供の書生の如く粗末な紋附羽織を著て其後に從つた。

市ケ谷見附から甲武線に乘つて代々木の停車場に下りてそれから二三町を歩いて某氏の家へ著いて二人を托して置いて余はすぐ引返して歸つた。市ケ谷見附から宅迄の間の例の土手傳ひの路は僅の間にもう日影が無くなつてゐた。

歸ると間も無く晝飯であつた。晝飯を少し食ひ過ぎて又ぼんやりしてゐると眠氣を催した。妻が赤ん坊を抱いてゐる間に其小さい寢床を占領して横になつたと思ふとぐつすりと寢た。時々物音が耳に這入つた事もあつたが知らぬ風をして寢た。赤ん坊はと氣になつて小さく目を開けて見ると別に寢床が取つて寢かしてあつたので安心して又寢た。それで漸く目が覺めたのが四時であつた。ふと氣が附くともう二人の娘を迎へに行かねばならぬ時刻であつた。

それから顏を洗つて茶を飲んで又表に出て例の土手傳ひに市ケ谷見附へと志した。さつき歸りに全く無くなつてゐた日影が今度は反對の側に少し出來てゐた。余は晝寢をした後は氣分がすが

すがしくて心が頗る平靜なのを覺ゆるのが常であつた。此時もそのすが〳〵した頭に此土手傳ひの單調な道を今日は已にこれで三遍通るのだなと靜かに考へた。而かも其用向きといふのは二人の少女を千駄ケ谷迄送り迎へをするといふ極めて單純な暢氣な事件であるといふ事を意識した。此時余の歩調は極めて整つて而かも道の中央を眞直ぐに歩いてゐた。さうして此歩き振りは頗る亡き父の晩年の歩き振りに似てゐたといふことにふと氣が附いた。余が十歳前後から父はよく余を伴れて二三里の遠足を試みた。風早へ行つた事も一度や二度では無かつた。柳神社へ參詣したことも五六度を超えた。父は極めて靜かなむらの無い歩調をして道の中央を歩いた。余は其父の足跡を後から小刻みに踏んで歩くのが常であつた。さうして父がよく話して聞かせた東海道の道中も父は矢張り斯んな歩調で歩いたのであらうといつも後ろから其踵を見ながら想像した。――余が京都の第三高等學校に入學した一番最初の春休みに一人修學旅行に加はらず東海道を旅行して東京に上つたのも實に此街道に殘した父の足跡がなつかしさの餘りであつた。――余は今市ケ谷見附附近の土手ぶちを歩きつゝあるのであるといふ事を明かに承知しながらも何處となく東海道の松並木の中を父と共に歩きつゝあるやうな心持がするのであつた。斯くして今の時代が五十年前に逆戻りをして廣重の道中繪で見るやうな街道の光景を想像して見ることは堪へ難き迄に愉快であつた。けれども其は長くは續かなかつた。其廣重の繪の中を歩きつゝある父の面影はすぐ

消えて、土手の上の粗らな老松と、書生のやうな粗末な紋附羽織を著て二女を迎へに千駄ヶ谷へと志しつゝある自分とを餘す許りとなつた。が、余は此時久しく忘れてゐた彼の十餘日前の長女との問答を回想せずには居られなかつた。父と余と伴立つて五十年前の東海道を歩く光景の代りに、二十歳前後になつた長女と共に大和路を歩きつゝ、五十代前の祖先の遺跡を見て余が胸底に湧き立たす血汐を其まゝ長女の胸に湧き立たしめんとする希望が矢の如く頭の中に閃いた。

斯くして余は二度某氏を訪ねると二人の娘は時の移るのも知らずまだ遊んでゐた。余は彼等が摘んだ草花の束、芹のうでゝ濱納豆の空罐に詰められたの、それにお土産の二鉢の草花、其等を前きの鮓の折詰同様に提げて又二人のお供の如く後に跟いて歸途に就いた。例の土手傳ひの道の日影は幅が廣くなつて二人のさしてゐる各々の蝙蝠傘の半分を隱くしたり遁げたりした。家へ歸つたのは五時半を過ぎてゐた。それから湯に這入つて晩飯を食つた。

明日からは又終日休む間も無く生活上の奮鬪をせなければならぬ。此心持を思ひ出す機會も亦何日來るやら。今夜は机に凭れてゐても晝寢をしたおかげで眠くならぬのを幸に其儘を書き留めて見ようと此文章を綴つた。隣の間で音がしてゐるのは長女が明日の學校の下しらべをしてゐるらしい。あれから興福寺の寫眞の事を何とも言はぬのは何故であらう。彼ももうあの事は忘れてしまつてゐるのであらうか。

（明治四十二年六月）

古川の奥さん

麻布の狸穴町のとある處に三軒續きの一棟の長屋があつて、其の並びに別棟の二階家が一軒ある。此四軒の貸家の持主といふのは評判の因業親爺で共同栓一つ拵へることをせぬので借家人一同古い一つの掘井戸で用を足さねばならぬ。別棟になつてゐる二階家のうちの土方（ひぢかた）だけ前の借家人から造作として買ひ取つた水道があるので、此三棟長屋のうちの櫻田に大井といふ二棟は飲料水だけは土方の水道を貰ひに行く。土方の細君は今一棟の古川といふうちの細君に「皆さんいらつしやるのですから、あなたところも御入用ならばどうぞ御心配無く」と一二度言つた事があるが、古川だけ決して汲みに來ない。其古井戸の水で萬事を間に合はして居る。

古川の主人といふのは六十近い老人で內務省あたりの下級の判任官を二十年餘りも勤續したのがつい三四年前に免職となつて現在は或小會社の書記とかになつて居る。七八年前に前の細君を亡くして其れから四五年は主人の妹で出戻りの四十許りの婦人が家の世話をしてゐたが、其婦人が再緣して間も無く今の細君が來た。もう六十にも近い老人で後添ひでもあるまいと主人は頭を

振つたが、何にせよ子供といつては今年まだ十八にしかならぬ男の子が一人だけで、其男の子は日比谷中學に通學して居る、主人は朝早くから日暮近く迄出勤する、どうしても女が一人居なくては家が修まらぬといふので、其妹が再緣する前から喧しくいつて諸方へ賴み廻り漸く今の細君を見附け出したのである。前の細君と云ふのが長らく病氣の爲め、僅の收入の中から貯へて置いたものも皆無にしてしまつたし、恩給といつても多寡の知れたもの、其に現在の給料と云ふのは十二圓といふので、其で親子三人が食はねばならず、子供の學資も出さねばならぬといふので古川家の暮し向きの困難さは想像の外に在る。裏口傳ひに御用を聞いて廻る看屋も八百屋も古川のうちだけは拔きにする。古川のうちは何を食つてゐるかが借家中の疑問になつて居る。

かゝるうちに後添ひに來た細君といふのは山形在とかの人で、古川へ來る二三ケ月前迄深川のどことかの勞働者の女房であつたのが、相談の上夫婦別れをして、自分は下女奉公をする積りで豫て知り合ひの桂庵に賴みに行つたところ、其桂庵が又古川の知るべとかになつてゐるのでふと話が持出されて直樣纏り、其日から著のみ著のまゝで古川の臺所に坐るやうになつたのである。二階立ての土方は固より此棟つゞきの三軒共皆小身ながらも官吏だといふので腰辨長屋といふ仇名が此界隈に聞こえ、出入りの小僧達は勿論お互の間でも「お神さん」といはず「奥さん〳〵」と互の細君を呼び習はして居る。古川の細君も初めは此「奥さん」の敬語に恐縮したやうであつ

たがそれでも此頃はもう馴れてしまひ、又近處でも「古川の奥さん」といふのは最初の間稍〻輕蔑の意味に用ゐられてゐたのが此頃は其も耳馴れてしまつた。

其古川の奥さんは四十四五で、背の低い割合に鼻が高くつて頰のこけた、眉毛が度外れに濃くつて釣り上つて居る所謂大將眉で、色の黑い見にくい顏立ちだ。背が低いに拘らず著物をつんつるてんに著て、其に丸髷が年の割合に大きいので眼に立つ上に、大方は根が拔けて其髷の上には白い埃の積つてゐる日の方が多い。著物は改められる日はあつても同じ樣な縞柄で同じ樣に古びてゐるので目に立たぬが、其髷が時々結ひ換へられてつや〳〵してゐる事があるのは著しく人目を牽く。あのまづしい暮しの中でよく此頃のやうな高い髮結賃が出せることだと土方の細君などは初めの間不審に思つてゐたが、一錢五厘とかで何處かの八百屋の神さんとかゞ內職に髮結ひをして居る、其處で時々結つて貰ふのだといふ事が後になつてわかつた。

夏冬共古川の奥さんの重な役目は洗濯である。雪が灰のやうにちらつく寒い日でも奥さんはかまはずに洗濯をして居る。夏などは朝風の涼しい時分から、月のある晩などは夜遲くまで洗濯をして居る。別に濯ぎ洗濯を內職として居るやうにも見えぬし、多くは主人や男の子の著古しらしいがよくも絕えずあゝ洗濯物があるものだと近處での評判だ。其から此奥さんが湯に行くのは滅多に見受けることが無い。夏になると十一時過ぎに時々ざぶ〳〵と行水らしい音がするので、土